
リバーシブル・アース

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバーシブル・アース

【NZコード】

N4306Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

アトリの会社「テラ・フェイカーズ」は神素しんそとおいう特殊な気体で地球を茶色いガス惑星に見せかけ、宇宙人の侵略から人類を守っていた。それは青く美しい地表を、あたかも裏返したかのように茶色く変えてしまうことから、「リバーシブル・アース」計画と呼ばれている。

そんなある日、アトリは町でホトトギスという少女に出会い。少々言動のおかしな女の子だが、なぜだかやけに気になり、アトリは休みの日には彼女と会うようになる。

やがて宇宙人が地球に近づき、リバーシブル・アース計画が発動され
るのだが。

「ふひ……」

ぼくは思わず、ため息をついていた。

「毎度のことだけじ、疲れるなあ」

よこしょっ、と、リュックサックタイプのカバンを抱き直す。

「ま、ここまで来れば、あとちょっとだ。頑張ひ」

大自然に囲まれた清々しい朝の開放感からか、独り言にも拍車がかかる。

もつとも、ぼくは普段から独り言が多いこと、みんなにも言われてたつするのだけじ。

周囲には、色とりどりの木々や草花が生い茂り、ちゅうちょが舞い、鳥たちのさえずりが響き渡る。

東京からさほど遠いってわけでもないのに、完全な田舎の風景が広がるこの近辺。

秩父の山奥にある雛森町から徒步でさうに山を登り、三十分ほどかけて、ぼくはこの場所にたどり着いた。

毎朝のことだとはいえ、さすがにちょっと、しんどい。
まだまだ若こつもりだけじ、やつぱり体力は衰えているんだらうな。

ふと振り返ると、眼下には町並みが一望できる。結構な高さを登つてきたことの証だ。

ぼくは、優羽アトリ。
やさば

この春に大学を卒業して、新社会人となつたばかりだ。

ついこのあいだまで、ぼくは東京の実家に住んでいた。

今も両親はその家で生活しているわけだけど。

ぼくは就職先の関係で、今見下るしている雛森町ひなもりちょうに戻ってきた。

そう、戻ってきたのだ。幼稚園の頃まで住んでいた、この町に。昔住んでいたアパートが、今もまだ残つていた。

ぼくたち一家が昔住んでいた部屋も空いていたから、ぼくは今、その部屋で暮らしている。

年季の入つたボロアパート。

他の部屋も、ほとんど空いてるみたいだつたけど。

こんな状況で大丈夫なのだろうか？ 取り壊しとかはされないのだろうか？

そう心配になつてくるほどだ。

ただ大家さんとしては、取り壊すつもりは毛頭ないらしい。

今でこそ何棟ものアパートを所有している大家さんだけど、最初の一棟だつたというこのアパートには思い出がたくさん詰まつているのだろう。ずっと残しておきたいのだと話してくれた。

オンボロではあるけど家賃もすごく安いし、収入を得るためにどう目的よりは、撤去されないために誰かが住んでいてくれればいい、といった考えのほうが強いのかもしれない。

昔住んでいたアパートとはいえ、それももう十五年以上も前になるのだから、近所に住んでいた人たちのことなんて、ぼくはまったく覚えていなかつた。

といつよりも、当時住んでいた人たちはみんな、この町を出でてしまったのだろう。

だから、べつに知り合いがいるわけでもない。

実際、雑森町はのどかな田舎町といった様子で、本当ににもないう場所だ。

村ではなく町という扱いになつてているだけあって、それなりに人もいるし、町の中心部には一応、商店街と呼ばれるメインストリートも存在している。

休みの日には買い物をしに行つたりもするけど、メインストリートという呼び方は似合わないかもしだれない。

舗装もされていない土がむき出しになつていて道の両脇に、木造平屋建ての店が軒を連ねる程度なのだから。

町の中心部でそんなありさまなのだから、観光スポットだとか、レジャー施設だとか、そんなシャレた場所がこの町にあるはずもなく。

結果、寂れた田舎町といった様相を呈していというわけだ。そんな山奥の町の片隅で、ぼくは今、ひつそりと生活している。

通勤先の会社は、今登つてきたこの山の上にある。

日本中央電力株式会社。
最大手の電力会社だ。

本社は東京の都心にあるのだけど、ぼくが勤めているのはここ、
雑森支社。

……支社というよりは、研究所といった雰囲気なのだけど。実際のところ、昔は本当に研究所だったらしい。

そんな、山奥に建設された研究開発を行うための施設。そこでぼくは働いている。

ぼくがこうして、毎朝時間をかけて山を登らなくてはならなくなつたのには、とある理由があつた。

社員寮に入ることができなかつたのだ。

雑森支社の近くには何棟かの社員寮が完備されていて、ほとんど
の社員はそこから会社に通つてゐる。

でも、ぼくはその申請をすっかり忘れていた。

気づいて申請したときにはすでに遅く、部屋はもう空いていなかつたのだ。

……つまり、自業自得とこうやつなのだけだ。

とはいへ、いつも毎朝自然の中を歩いてくるのは、それなりに気持ちのいいものだつた。

色とりどりの木々や草花が生い茂り、ちゅうちゅうが舞い、鳥たちのさえずりが響き渡る。

そんな温かい風景に包まれる日々。

朝の日差しが、まぶしくぼくと周りの景色を照らし出す。

「今日は、いい天氣だなあ。ちょっと暑くなるかも」

汗を拭いながら、ぼくは再び、独り言をつぶやく。

この自然を、ぼくたちは守らなければならぬ。そんな使命感すら湧き上がつてくる。

いや、実際にぼくたちは、この自然を 、
そしてこの、太陽系第三惑星、青くて美しい惑星である地球を、
守るべき立場に立つてゐるのだ。

「ふう……」

山を登りきつたときと同じように、ぼくは再び、ため息をつく。そしてそのまま、机にぐた～っと突っ伏す。会社までたどり着き、所属する部署のドアをくぐり、自分の席に座つた、まさにそのタイミングだった。

山歩きの疲れによつて、業務時間が開始される前だといつのこと、このあります。

社会人一年目にして、ダメダメな感じが溢れないと言わざるを得ない。

でもまあ、ぼくの所属しているこの部署なら大丈夫なはずだ。緊急事態なんて、そういう起じるはずがないのだから。

ぐた～～～～。

ぼくは机に突っ伏しながら、疲れを癒す。
机の表面の冷たさが、なかなか心地よい。

「……って、じりー なに朝から、だらけきてるのよー。」

突然耳もとから怒鳴り声が飛び込んできた。
でもぼくは、慌てず騒がず、その声に答える。

「ん～、だつてさ～、疲れるんだもん、じじまで来るの」

「そりやまあ、毎朝町からここまで来てりやあ、疲れるのもわかるけどや～。だからって、アトリはだらけすぎだよ。昼休みだけは、

超絶元気になるのに

「だつてさ～、この会社での楽しみつていつたひ、『飯くらいしか

ないじやん～』

「そりゃまあ、この会社の食堂は超絶美味しいから、それもわかるけどね～」

怒鳴り声もだんだんとぼくの勢いに流れさせてしまったのか、のんびりとしたテンポへと変わっていく。

「もう思うでしょ～？」

「うん、それももうね～」

いつのまにやら、その声の主も、ぼくの隣の机に突っ伏しているようだつた。

ようだつた、と表現しているのは、ぼくの視界からは彼女が見えないからだ。

彼女の机はぼくの右隣にあるのだけど、ぼくは机の左方向に顔を向けていた。

でも、見えなくとも声の響きやら物音やらで、どんな状態なのがはだいたい予想できる。

彼女も彼女で、やつぱりだらけめつてこると言えるだろ？

辻ゆりかもめ。

ぼくと同じく、今年入社したばかりの新入社員だ。

そして、ぼくの幼馴染みもある。

とはいえ、幼稚園の頃に一緒にだつたというだけで、あまり記憶には残っていなかつたのだけど。

ぼくは幼稚園を卒園したあと、すぐ東京に引っ越した。

ゆりかもめのまつも、小学校低学年の頃に引っ越しして、雑森町を出でいったらしい。

彼女もぼくと同様、この会社に入るところとして、実家から出てきた。

ぼくと違うのは、しっかりと社員寮の申請をしていたことだ。

というわけで、彼女は会社から徒歩一分といつ近場にある社員寮に住んでいる。

社員寮は広い敷地の中に数棟の建物があつて、さらに食堂までも完備されているのだとか。

うーん、申請し忘れて入居できなかつたことが、ものすじへ悔やまれる。

毎朝の山登りで疲れなくて済むというのは、正直うらやましい。

……あれ？ それじゃあどうして、ゆりかもめはぼくと一緒になつて、机に突っ伏してるんだ？

ぼくは山登りで疲れたから仕方がないかもしないけど、彼女はべつに疲れてなんていはないはずだよね……？

ふと、彼女のほうを振り向く。

もちろん、机に突っ伏した頭が左向きだったのを、右向きに向き直しただけなのだけだ。

同じように突っ伏しているゆりかもめの顔が視界に映り込む。目をつぶっている彼女は、化粧つ氣もまったくない。それどころか、髪もボサボサなように見える。

机に突っ伏しているからという理由だけではなく、完全にはねていると思われる寝グセも、たくさんついているようだ。

おそらく、つこちつき起きたばかりで、急いで服だけ着替えて出

社してきたのだろう。

ぱつと見、結構可愛い感じの顔立ちをしていて、実際に
もつたらない。

と、そんな彼女がパチッと目を開く。

「…………」

思わず無言で見つめ合ひ、ぼくとゆづかもめ。
彼女の頬がほのかに染まつて、くよくよ見えたのは、氣のせいだ
つただろうか。

「朝っぱらからお前、そんなだらけた格好で、なに見つめ合つ
てんだが」

不意に頭の後ろのほうから声がかかった。

「あっ、セキレイ。おはよー！」

「おはよー」

ゆりかもめの声に、ぼくも挨拶を重ねる。

彼女が名前を呼ぶまでもなく、誰が声をかけてきたのかはわかつ
ていたのだけれど。

「お前らは、まったく……。せめて、頭くらい上げたらどうだ?
ところがアトリ、こっちを見もしないなんて、失礼すぎないか？」

さすがに文句の言葉が飛んでくる。

「やうだよね。親しき仲にも礼儀ありだよね。でも、疲れてる

からで～

「そりそり～。疲れてるからで～」

ぼくの言葉に、今度はゆりかもめが声を重ねる。

「バカたれ！　だいたい、ゆりかもめは疲れてなんてないだろ？
！　寝疲れは、疲れてるうちに入らないんだぞ！？」

怒鳴り声は、主にぼくを通り越して、田の前にいるゆりかもめに向けられたものではあつたけど。
背後からぼくの田の前の彼女に對して向けられたその声は、もちろんぼくの耳にも痛いほどに響く。

「まつたく……。落ち着いて寝てられないうちんか～」

「アホかっ！　寝てるんじゃない！　もう始業のベルも鳴ったぞ！」

のそのそと身を起し、素早くジッコミが入れられた。頭をひっぱたく平手打ちを添えて。

「おおうー？　いつのまにー！」

「あははっ！　あたしは、わかつてたけどねー！」

「わかつてたなら、一緒になつて寝てるんじゃないー！」

「寝てたわけじゃないよーう！　机さんと一体化してただけだよーう！」

「それを寝てるとこうんだ、ボケつー！」

「あうあうあう～、セキレイが超絶いやめるよーうー！」

「こじめてない！　教育的指導だー！」

なんというか、朝からバカなやり取りだと思わなくもないけど。
というか、これで三人とも社会人だというのが、不思議なところ

であるけど。

そんな光景も、毎朝恒例といった感じだった。

「の教育的指導とか言つてゐる男は、春香川セキレイ。
はるかがわ

指導なんて言つて立場も上つぽい口調ではあるけど、ぼくやゆり
かもめと同じ、入社一年目の新人だ。二年間フリーターをやつてい
たとかで、一歳ほど年上ではあるのだけど。

初日にお互い血口紹介をしたとき、本人から気にする必要はない
と言われたので、ぼくたちは普通にタメ口で話していく。

始業のベルが鳴つたあとだというのにこんなバカ騒ぎをしていて、
本当に大丈夫なのかといつと、それは全然問題なかつた。
「には今、ぼくたち三人だけしかいないからだ。

もちろん上司は存在する。

でもその上司は会議に出るのも多く、朝はほとんど部署にいな
いのだ。

もつとも、ぼくたちには資料を作成するといつ仕事が『えられて
いるから、それを提出する必要はあるのだけど。

ただし、ぼくたちの一番の任務は、いわば緊急事態に備えて待機す
ること。だから普段はゆつくりしていても支障はないのだ。

……などと余裕をぶちかましていたからだろうか。

そのとき、緊急事態を告げるサイレンが、けたたましく鳴り始め
た。

鳴り響くサイレンの音。

そして、部署の一面の壁すべてを使ったサイズの大型モニターに、上司の顔が映し出される。

「あなたたち！ 出番よ！」

「はいっ！」

ぼくもゆりかもめもセキレイも、さつきまでバカ騒ぎしていたことなんておぐびにも出さずに、ハキハキとした答えを返す。

三人の机の上には、すでにキーボードとモニターが用意されている。

「担当各地の風向き、気圧、天気など、異常がないかの確認、急いでね！」

「了解！」

素早くキーボードを叩き、ネットワークでつながれた世界各地にある観測所の情報を引き出す。

異常があれば色が変わつて表示されるそれらを目視。すべての場所で異常がないことを確認していく。

ひとりあたり、百ヶ所以上の担当場所が与えられているデータを、どんなに遅くても五分以内に処理する必要があった。通常は三分以内に終わらせる。

すべての観測所の確認が終わると、実行部隊の出番となる。

Jの研究所を含む、世界各地の数ヶ所にある施設から、とある気

体を噴出させるのだ。

気体の噴出後、世界各国で緊急のアナウンスが流れる。

日本全国に流されるアナウンスも、この会社内のアナウンス室で行う。と同時に、各テレビ局にテロップで緊急ニュース速報を流してもらうことになる。

世界各国に関しては、それぞれの国に任せることになるのだけど。ただ、中心となっているのはこの日本。すべての国の状況が、データとしてこの会社に集められることになっている。

そしてそれらすべての責任を担っているのが、表向きは日本中央電力の雑森支社ということになっている、この施設だつた。ともかく、ぼくたち三人は担当するデータの確認を終える。

「アトリ、確認終わりました！」

「セキレイ、確認終了です！」

「ゆりかもめも、問題ありませんでした！」

三人が声を合わせて報告する。

モニターの向こうに映し出されている上司も、同じように担当場所の確認をすでに終え、ぼくたちの報告を待っていた。

「よしつ！ 各人はそのまましばらく待機！ これより、リバーシブル・アースを起動します！」

上司の声とともに、サイレンの音が変わる。

それは、リバーシブル・アースが、準備フェーズから実行フェーズへと移行したことを表していた。

上司からの待機命令を受け、ぼくたちは一瞬だけ息をついていたけど、それで気を抜いてしまうわけにはいかない。

リバーシブル・アースが実行され、気体の噴出が始まつたら、各地での気体の広がりや濃度といったデータが次々と送信されてくる。それらを、準備フェーズのとき同様、異常がないか逐次確認していかなければならぬのだ。

大型モニターに映し出されている上司の顔にも、焦りの色がうかがえる。

実際に緊急事態が発令され、リバーシブル・アースが実行されるのは、それほど頻繁なわけではない。
でも、地球の未来がかかっている、重要な任務なのだ。
だからこそ、失敗は許されない。

バカ騒ぎしていたぼくたちが一瞬にして静まり、素早く席に着いて真面目に任務に取り組んでいるのも、その責任の重大さがわかっているからだ。

もしほくたちが失敗すれば、地球は侵略されてしまうのだから。

部署の片隅には、テレビも用意されていた。

それにより緊急時に流される速報を確認できるようになつていて、なにかのニュース番組が放送されている画面上部に、ニュース速報の文字が入った。

『リバーシブル・アースが発動されました』の文字が表示されるとともに、番組のアナウンサーにも情報が届いたらしく、

「臨時ニュースをお伝えします」

と前置きをしたあと、臨時ニュースの内容が読み上げられた。

「先ほど、超紫外線警報が発令されました。リバーシブル・アースの発動により、しばらくのあいだ、昼間は空が七色に輝くことになります。なお、警報の解除時期は未定ですが、状況がわかり次第、続報をお届け致します」

スージを着た男性アナウンサーが、落ち着いた声で緊急事態を伝え終えた。
まったく慌てた様子を見せないのは、さすがプロといつたところか。

アナウンサーが読み上げた臨時ニュースにもあった『リバーシブル・アース』とは、世界各地にある施設から特殊な気体を噴出することで、地球全体を覆い尽くす計画のことだ。

近年、太陽の膨張に伴い、『超紫外線』と呼ばれる人体に悪影響を与える光が地球にまで届くようになった。

少量であれば浴びても問題はないのだけど、このところ急激に強くなり、頻度も増してきた超紫外線。

事態を重く見た各国の研究機関で、対策を考え始めた。

研究は難航したものの、やがてひとつの有効な手段が発見される。

それを発見し、実用段階にまで開発したのが、日本中央電力の所有する施設だつた。

そのため、リバーシブル・アースと名づけられた計画は、ぼくの勤めるこの会社が主導してすべてを取り仕切つている。

地球を覆い尽くす特殊な気体 神素じんそと呼ばれるその気体は、空気よりも軽い。

施設から噴出された神素は上昇していき、成層圏の手前で止まる。

神素は温度の低いほうへと進む性質も併せ持つためだ。

成層圏ではオゾン層が太陽光を吸収して温度が上がっているらしく、そこで神素の上昇が止まり、溜まつていいく。

拡散性も強い性質のため、成層圏の手前に溜まつた神素は地球の自転と相まって急激に広がっていき、やがて地球全体を包み込む。その神素が超紫外線を吸収し、安全な光だけを地表に通してくれるのであるのだ。

神素には、くすんだ色の光だけを反射する効果もある。その影響で、神素が広がった状態の地球を宇宙から見ると、地味な茶色っぽい惑星に見えるらしい。

普段は美しい青色をしている地球が、正反対のくすんだ色の惑星に様変わりすることから、地球表面を裏返したような様子をイメージして、「リバーシブル・アース」と名づけられた。

反対に、くすんだ色の光以外は普通に通すものの、神素の粒子によつて乱反射が起こつてしまつたため、地表から見上げると空は七色に輝いて見える。

明るさとしては普段と大差ないほどではあるけど、空が七色に輝いているときには人々は驚いてしまうだろう。

というわけで、リバーシブル・アースの発動は、全世界的にアナウンスすることになつていて。

一般的に認識されているのは、以上のような感じなのだけど。でも、実は 。

神素によって有害な超紫外線を吸収させるため、という根本的なその理由からして、まったくの「テタラメ」だった。

神素といつ气体によって、宇宙から見た地球がくすんだ色に見えるようになる。

それは事実だった。

超紫外線という人体に有害な光を防ぐため、というのが、真っ赤な嘘なのだ。

では、どうしてそんなことをする必要があるのか。しかも、嘘のアナウンスを流してまで。
その理由はただひとつ。
地球の平和を守るためだ。

いつたいそれは、どういうことなのかといつと。

地球のような美しい惑星は、宇宙ではじく稀にしか存在しない、奇跡的な事例なのだといつ。

そんな美しい惑星の存在を奴らが知つてしまつと、地球を手に入れようとしてくる可能性がある。

それを未然に防ぐため、地球は美しい惑星ではないということを偽装する。

リバーシブル・アースは、そのための計画だつた。

そう、ぼくたちの本当の任務は、地球を美しくない惑星だと見せかけ、宇宙人の侵略から守ることなのだ。

地球をくすんだ色の惑星だと見せかける使命を持つた、ぼくたちの組織。

日本中央電力株式会社の雑森支社であることは、紛れもない事実

だ。

ただその業務内容は、一般には絶対に秘密となつていて

宇宙人の存在は、昔から噂されたりはしていた。

広い宇宙に無数に存在する恒星が、それぞれ太陽のように自ら光と熱を放つて存在しているのだから、その周りに地球と同じような環境の惑星があつたとしてもなんら不思議ではない。

仮に地球での生命の誕生が奇跡的な事例だったとしても、無数にある恒星それぞれの周囲に複数の惑星が回っていると考えるなら、そのうちのどこかに生命が誕生していてもおかしくはないだろう。そしてそんな中に、地球よりも文明の進んだ生命体が生活している惑星があつたとしても、とくに驚くべきことではないと言えるはずだ。

十数年前、ついに宇宙人の存在を極秘裏に発見したのが、当時は雛森研究所と呼ばれていた、この日本中央電力の雛森支社だった。

その頃、宇宙を研究することで新たな発電方法を開発できるのではないかと考へ、雛森研究所では、宇宙観測を中心に研究が続けられていた。

大型の天体望遠鏡を使い宇宙を調査していた研究員たちが、あるとき不可解な動きをする影に気づく。

詳しく調べれば調べるほど、それは宇宙人の乗る宇宙船に違いないという結論が導き出されていった。

さすがに半信半疑ではあつたものの研究は続けられ、やはりそれは宇宙船だということが確認される。

ここはぜひ、宇宙人と友好関係を結ぶべきだ。そんな意見も出た。でも、危険だと反対する意見もあり、どうするべきか対応に困っていた。

今のところ、宇宙人たちは遠く離れた場所にいる。まだ地球の存在にも気づいていないと思われた。

とはいえ、いつ地球に気づいてしまつかわからない。

場合によつては侵略を開始するかもしないといつ危険性を考えると、時間的な猶予はなかつた。

宇宙人発見のニュースは、会社から日本政府に報告されていた。それを知った政府は、混乱を避けるため一般には公開しないという選択肢を選んだ。

ただ、各国の首脳陣には連絡を入れ、国際的に対策を講じる準備をしていた。

そんな折、雑森研究所でさらなる研究成果が出る。それが、「神素」という新たな気体の発見だつた。

この神素を使って地球全体を覆つてしまえば、宇宙人に存在を気づかれても単なるガスの惑星にしか見えないから、侵略されることもないはずだ。

そういうた憶測のもと研究された、この神素という気体を使った計画を、政府や各国の首脳陣は受け入れた。

日本の研究施設から気体を噴出するだけでは、地球全体に行き渡らせることまではできない。

というわけで、世界各国に神素を噴出できる施設が建設された。

また、神素に危険は少ないものの、気候などの状態によつては過剰反応してしまい、発光や発熱を引き起こすといった性質もあつた。そのため、人の多い都市などには必ず、細やかなデータを観測する機械を設置するようにした。

それらの設備を整え、数年前から活動しているのが、ぼくの勤め

る日本中央電力雑森支社なのだ。

不意に、緊急事態を知らせるサイレンの音が、けたたましい音から静かな音へと変わる。

サイレンは、準備フェーズから実行フェーズに移る際にも変わっていた。

その実行フェーズの段階で、危険度レベル1の状態となる。そして危険度が高まるに従って、レベル2、レベル3まで、サイレンの音で知らせるようになっている。

だけど、危険度が高まつたことを知らせるサイレンは、レベル1よりもさらに緊迫感を増した激しい音となる。

今鳴っているのは、そういうた種類のサイレンではない。この音は、危険が去つたことを知らせ、後始末を開始するように促す、終了フェーズのサイレンだつた。

宇宙人たちの乗る宇宙船が遠ざかり、地球が発見される危険性はなくなつたのだ。

終了フェーズへの移行に合わせて、すでに神素の噴出も止められているはずだ。

神素が上空に昇つっていく速度は極めて速い。

ぼくたちは素早く、各地の観測所のデータを確認する。

もう、どの観測所からも、神素の成分は検出されなくなつていた。

成層圏の手前に溜まつてゐる神素も、拡散性が高いことと太陽光

によって分解されることから、すぐに消えてなくなってしまう。
だからこそ、実行フェーズ中には神素を噴出し続ける必要がある
のだ。

おそらく数時間後には、普段どおりの青空が拝めることだらう。
じつして、ぼくたちの今回の任務は、無事に終了した。

「お疲れ様～！」

ぼくたちのいる部署のドアを開けて、女性が入ってきた。それは、つこさつきまで大型モニターに映し出され、指示を出していた女性だった。

ぼくたちの直属の上司としてここになら、この部署の部長、古女ヒバリさん。

メガネをかけて髪を首筋の後ろで束ねているため、ちょっと地味な印象を受ける。

落ち着いた雰囲気だからなのか、三十代半ばくらいに見られることが多いけど、まだ二十六歳らしい。

……年齢を詐称していなければだけど。

なんて言つたら、メガネ越しの鋭い瞳でギロリと睨まれてしまうかな。

若くして部長とこう立場に立つたのも、年上に見られてしそう原因になつてこるのである。

気にすることもないと思つただけど、彼女は「古女」とこう名字を名乗つたがらない。

年齢に敏感になつてゐることを考えれば、それもわからなくなつたのだけど。

「ヒバリさんも、お疲れ様です」

セキレイが、礼儀正しい部下を演出しているのか、とても爽やかな顔でヒバリさんの言葉に答える。

ぼくやゆりかもめの前では、眞面目っぽいことを言つわつに、結局は一緒になつてバカをやつてゐるといふのに。

上司の前でまでバカなことをしてたら、サクッとクビになつてしまふかもしれない、といつ思いがあるのかもしない。

でもこの会社、といつかこの部署の場合、大丈夫だとは思うのだけど。

「今日はすぐに宇宙人警報が解除されて、よかつたね」

ヒバリさんに続いてもうひとり、男性がこの部署のドアをぐぐつて入ってきた。

水瀬雷鳥さん。

彼ももちろん、この部署の一員だ。

ヒバリさんと同期の人で、この部署の副部長といふことになつている。

とても優しい感じの声で語りかけてくるのが印象的だった。基本的にいつでも微かな笑顔を浮かべているように見える。おそらくは、それが地顔なんだろうけど。

雷鳥さんの言う「宇宙人警報」というのは、一般の人には「超紫外線警報」として発令されている警報と同義だ。

一般の人たちには宇宙人の存在を明かしていない関係上、そういう定義となつていた。

社内で話す場合には、正式な「宇宙人警報」という呼び名を使う場合が多い。

ところどころたちの部署のメンバーは、ヒバリやら雷鳥やらゆりかもめやら、なにやら鳥の名前ばかりだけど、それは世間的にも珍しいことではない。

一時期、数年間くらいのようだけど、どういったわけか、鳥の名前をつけるのが流行った時期があった。

ちょうどヒバリさんたちが生まれた頃から、ぼくたちが生まれた少しあとくらいまでだろうか。

その期間に生まれた子供は、全員ではないものの、鳥の名前やそれに近い名前がつけられている人が多いのだ。

セキレイやアトリも、もちろん鳥の名前だ。

大空に羽ばたいてほしいという願いを込めて、といふことなどと、両親からは聞いたことがある。

そのブームのもととなつたのは、数年間にわたって続編も製作された大人気ドラマだったというのだから、日本国民、テレビ番組に流されすぎだらうと思わぬくもないのだけど。

そんな鳥の名前に、なんとなくコードネームっぽいイメージがあるからなのか、社員がお互いを呼び合つ場合、名字ではなく、それぞれの名前で呼ぶのが通例となつていた。

ぼくたち新入社員三人を含めて、ヒバリさんと雷鳥さん、以上五名がこの部署の人員だつた。

大きな会社のはずなのに、やけに人員の少ない部署となつているのには理由がある。

この難森支社は特殊な役目を担つた研究施設のため、細かく役割分担されているからだ。

ぼくたちの所属するこの部署の名前は、「第三十八対策執行部」となつてゐる。

そして、対策執行部は全部で三十八ある。つまり、ぼくたちの部署は末番ということだ。

だからこそなのか、一番少人数で、一番若い部長によつて統率さ

れている。

「Jの少人数制というのは、ぼくたちにとつても居心地がよかつた。
……上司のふたりが会議で部署を出たら、だらけ放題だから、
いうのもないわけじゃない。」

確かにさつきみたいなバカ騒ぎを毎日のように繰り広げているぼくたちではある。

だけど、それだけではなくて、ヒバリさんや畠嶋さんも含めて、
楽しい職場になつてていると常々思つていた。

会社側としては、しつかり田の行き届く範囲の少人数で指導する、
という意味合いもあつたのだろう。

そういうた割り振りになつてしているのは、この離森支社の所長さんの意向のようだ。

「おや、みんなちゃんと集まつてますね」

「こやかな笑顔を振りまきながら会話に割り込んできたのはその所長さん、神仙寺御門さんだつた。

のほほんとした言動で、田尻のシワが穏やかな雰囲気を伝える、
氣のいいおじさんといった様子。

四十年代前半らしいのだけど、その落ち着きぶりからは、すでに六十過ぎだと言われても誰も驚かないほどだ。

離森支社なのに「所長」という肩書きなのは、もともと「J」が、
離森研究所といつ名前だった頃の名残だ。

今でもまだ、研究所と呼ばれることも多い施設だし、山奥にあって様々な研究開発用の建物が並ぶこの支社の雰囲気を考えたら、研究所といつ呼び名のほうが合つてることと言える。

それはともかく、所長はいつも頻繁に、各部署に呪を運んでいた。

社員たちがしっかりと働いているか見回りに来る、ところよりも、
「ミミコニケーションを大切にしているところ」ということなのだろう。
いつも机に向って、しばらぐのあいだ優しい笑顔を浮かべつつの
んびりとお喋りに興じる。そしてひとしきり喋ると、また次の部署
へと向かつ。

各部署にはあらかじめ「所長席」が設けられているくらいだから、
そうやって各部署を回るのも仕事のうちだと考えているのかもしれない。

もつとも、普段は来客用の席として使っていることになっている
ので、所長さん専用の席というわけではないのだけど。

でも、ぼくたちの所属するような末端の部署の場合、来客もほと
んどないし、ほぼ所長さん専用と言つてもいい。

上司や所長さんを含め、こんな感じでなんとなくのんびりとした
雰囲気で包まれている雑森支社の第三十八対策執行部。
だからこそ、ぼくはこの会社が好きなのだ。

と、不意に正面の大型モニターに映像が映し出された。
オペレーターの女性が、慌てた声を上げる。

「所長、いらっしゃいましたか！ 報告しますー。なにかよくわから
ない物体が、雑森山へ落下してきていますー。今から、そちらのモ
ニターに映像を送りますー！」

所長さんの顔からはフッと笑顔が消え、鋭い眼光でモニターを見つめ始める。

素早く用件を告げたオペレーターの言葉が終わると同時に、モニターの映像が切り替わった。

カメラが超望遠で捉えた映像のようで、かなりぼやけてはいるものの、青空を背景に猛烈な速度で落下してくる物体が確認できた。燃え上がっているらしく、その物体がなんのかは、さつきりとはわからない。

そしてその物体は、山の中へと落下した。

オペレーターの報告にもあつたとおり、そこは離森支社がある離森山だつた。

ただ、衝撃音や振動はない。

離森支社のすぐ近くではなく、ビーナスの山の中腹辺りに落ちたようだ。

「あの映像からではよくわからないけど、さほど大きな物体ではなかつたよね」

「そうですね。ある程度の大きさがあるなら、衝突で山が削られたりするはずですし。そういう形跡は、映像からは見られなかつた」

ヒバリさんと雷鳥さんが分析の言葉を交換す。

ぼくは、ただ呆然とその声を聞いていたことしかできなかつた。

「……単なる隕石でしょう。振動もなかつたようですし、山にぶつかるギリギリで燃え尽きた、といったところでしょうか」

所長さんも険しくなつていた表情を緩め、普段どおりの落ち着い

た声でそつと想する。

「結構多いものなんだよ、隕石が落下してくるというのはね。宇宙を観測している施設では、じくありふれたことなんだ。ここ最近はあまり見かけていなかつたけどね」

雷鳥さんがぼくたちに解説を加えてくれた。
新入社員であるぼくたちには状況が理解できず、思わず目を丸くしていたからだろう。

「念のためヘリを回して落点を確認してみてください。もし力ケラでも山の中まで達していたら、燃え上がっていましたし、山火事になる危険性もありますから」

「はい、わかりました」

素早く指示を出す所長さんに、オペレーターも迅速な応答を返す。さすがに手馴れた対応だ。

「それでは、わたしはこれで失礼しますよ。みなさんも、気を抜きすぎなこようにな」

所長さんは軽やかに立ち上ると、部署を出でていった。

「ふう、それじゃ、通常業務に戻るわよ」

ヒバリさんの号令により、ぼくたちは通常業務に戻る。
といつても、パソコンを使って資料のデータを整理するとか、その程度のデスクワークなのだけど。

ぼくはキーボードを叩きながら、のんびりと仕事をこなしていく。

思わずあぐびも出でてしまつたものだ。隣ではゆりかもめも同様にあぐびをしていた。

そんなぼくたちの様子を見ても、ヒバラさんは諦めているのか、とくに注意の声が飛んできたりもしない。

諦めているというよりは、いざといつときにしつかりと仕事ができれば、それ以外の時間についてはひるやく言わない、というスタンスなのだろう。

というわけで、上司がいてもいなくても、結局ぼくたちがだらけあつて居るのは変わらないのだった。

「さてと、今日はなにを食べよつかな」

ぼくは寂れた商店街をのんびりと歩いていた。

今日は休日だから、仕事は休みだ。

会社のある山道を歩く必要もなく、朝というよりは晩と呼ぶべき時間に日を覚まし、ぼーっとしたまま着替えて外に出てきた。

緊急事態がいつ起るかはわからないから、あまり遠出はできない。

もつとも、この町からだと会社まで三十分はかかるし、緊急をする場合には間に合わないのだけれど。

それは会社側もわかつているだらうし、じつにかして寮に部屋を用意してくれればいいのに。

ついつい不満が口をつく。

とはいっても嫌だった。

そもそも、寮の部屋はひとりで暮らすにも狭いと、セキレイは言つていたし。

ま、休みの日今まで会社のことなんて、考えないほうが多いな。
ぼくは頭を切り替える。

基本的に自炊ができるないぼくは、食事を外食かコンビニで済ませることが多かった。

木造建築がほとんどの静かな商店街ではあるけど、そんな中に一軒だけ、小さいながらもコンビニがある。

こんな田舎町だと、外食してもリーズナブルな値段だったりする

のだけど、パンとかおにぎりとかを買っておくと、小腹がすいたときに便利だ。

とりあえず今日は、いつもの食堂で朝食お皿を食べてから、コンビニでちょっとだけパンと飲み物でも買っておこうかな。

そう考えて歩いていると、人通りのほとんどない道の脇に、女性の姿を目にした。

女性、というよりは、女の子と言つたほうがいいかもしない。

見かけたことのない子だな。

なんとなく彼女に目を向けながら歩く。

彼女はぼくがいつも行く食堂の前で、サンプルワインでウニヘルツクエリシナガラ、その中を見てこいつだった。

あの子も、この食堂で食事をするつもりなんだな。
そう思いつつ、まくは食堂の正面に手をかけよつとして。

ドサリッ。

突然なにかの音がすぐ横から聞こえた。

振り向くと、さつきの女の子がぐつたり倒れていた。

「うわー！ キミ、大丈夫！？」

彼女のそばにしゃがみ込み、肩に手をかけて揺すってみる。
見たところ、十代後半といったところだろうか、なかなか可憐らしい印象を受ける女の子だった。

それに、倒れているから余計にそう感じるのか、すこく小さい。軽く触れた彼女の肩は、強く搖するだけで壊れてしまいそうな、そんなふうにすら思えた。

肩を揺するほどの存在に気が付いたのだから、彼女は微かに顔を上げる。

ぼくを見つめるその綺麗な澄んだ瞳に、吸い込まれてしまいそうな錯覚に陥る。

と、彼女は震える声で、いつ言った。

「お……おなか、すいた……」

ガツガツガツガツ、ぱくぱくぱくぱく、「じゃあ、じゃあ、じゃあ、じゃあ、

「ん……む二、ひ二、べがち、……一也、かくいへ……ひり
や」

揚げたカツやら千キャベツやらご飯やら味噌汁やらを、それほど大きくないはずの口の中へと次々に押し込みながら、女の子はジャンボカツ定食（三百八十円）をたいらげていく。

「うーん、食べたり寝るなんて、せしたないよ」

思わずお母さん染みたセリフだつて飛び出してしまつてものだ。食べるのに夢中で、まつたく聞いてくれないかも知れないな。そういう考え方ながらではあつたけど。

そんなぼくの言葉がしつかりと聞こえていたのだらへ、一瞬だけ田線をほくのほつに向けた彼女は、

「…………むぐつ…………一づ」

と、うなり声を上げたかと思つと、

「ゲホツ、ゲホツ、ゲホツ！」

思いつきり咳き込んだ。

その勢いで、口に含んでいた揚げたカツやらキヤベシやら飯つぶやら味噌汁やらが、そこかしこに飛び散る。

ぼくの顔面やら服やらぼくの注文したジャンボカツ定食やらひも、飛び散った物体がくっついたりしてゐるし……。

「うあつ！ まつたく、もつ……、落ち着いて食べなよ。ジャンボカツ定食は、逃げたりしないんだから……」「

「ゲホツ、ゲホツ！ お前が急に、話しかけるからだわさー！」

文句の声を上げるぼくに、そんな自分勝手な反論を返してくれる女の子。

「飯をおいじりあげていろとこいつの元、元の態度はこいつたこいつといつことなのや。」

まあ、つまり、こいつこそなんだな、この子は、やつ結論づかる。

「…………はこはこ、ま、落ち着いて食べな

諦めたぼくは、そつ締めくくつた。

ガツガツガツガツ、ぱくぱくぱくぱく、「いやあ、いやあ、いやあ、いや、もぐもぐもぐもぐ。」

そして再び、彼女の豪快な食べっぷりが田の前で展開されたのだつた。

「ふ〜、美味しかっただわやー。」

「……それはよかつた」

さすがにあんな言葉を受けていれば、いかにもぶりきらほつな対応になつてしまつ。

田の前で豪快に食べ続ける彼女を見ていて、それだけで食欲も削がれてはいたけど、もつたいないし自分のジャンボカツ定食はぼくもたいらげていた。

彼女が咳き込んで飛び散つたカツやうじ飯つぶやらの残骸をよけながら。

食堂のドアを開けて、ぼくと女の子は外に出る。

「それで、キミはどうしたんだで、おなかをすかせて倒れたりしてたの?」

とりあえずは元氣にはなつたみたいだけど、状況がわからないままなのは気になる。

ということでおくは質問してみた。

なんとこうか、この辺りでは珍しいと思つけど、もしかしたら家出少女なのかもしれないし。

「キミじゃないわや。あちきは、ホトトギスだわよ

「あ〜、ごめんね。ぼくはアトリだよ」

文句を向けてくる彼女に、ぼくは反射的に名乗り返していく。

「あちきが倒れてたのは、その……たまたま持ち合わせがなかつたからだわさー！」

続けられた彼女の答えに、ぼくの心配は募る。

この子、ほんとに家出少女だったりするのだひうか？

そんなぼくの目線を感じ取つたからか、ホトトギスと名乗つた女の子は少々慌てた様子で、

「あ～、急がないとだつただわさ！ それじゃ、あちきはこれにて！ アトリ、ご飯、ありがとでしただわさー！」

それだけ言い残すと、トタトタと覚束ない足取りで走り去つていった。

喋り方も行動も含めて、とっても変わつた女の子だつたけど。でもなんというか、すゞしく危なつかしくて、思わず手を差し伸べてあげないと、なんて気になつてしまつ感じだつた。うへん、やつぱりぼくつてちょっと、お母さん染みているのかもしれないな。

ぼくはなんとなく、このあいだのホトトギスとこの女の子の「」とが気になっていた。

とっても危なっかしい子だったから、お母さん染みた心配の念からなのだろうなど、自分では分析しているけど。

ともかくそんな感じでぼくは、出社してきて早々、自分の机に頬づえをつきながらぼーっとしていた。

いやまあ、普段からぼーっとしているのは確かなのだけど

「アトリー、今日もだらけきつてるや〜

「やうじゅりかもめだつて、だらけきつた声だけじね〜

隣の席では、ゆりかもめがぼくと同じよつこ、頬づえをつきながらぼーっとしてこむ。

彼女の場合はぼくとは違つて、考え方などではなく、単純に寝起きだからなのだろう。

いつもどおり彼女の寝グセのついた髪の毛が、開け放った窓から入り込んでくる風によつてゆらゆらと揺れていた。

「まつたく、お前らは……」

セキレイから、ため息まじりの言葉が向けられる。
毎朝恒例の「」へありふれた光景だった。

と、突然サイレンが鳴り響いた。

けたたましいサイレンの音は、ぼーっとしたぼくの頭を現実に引き戻す。

「つぎやつ！ こないだあつたばかりなのに、また緊急事態だなんて、超絶ありえないよ～う！」

ゆりかもめのボヤキ声が聞こえてくる。

前回からまだ数日しか経っていないのに、こんな早く次の警報が発令されるのは確かに珍しいことだ。

でも、いつ起るかわからないのが緊急事態つてものなのだし、ぼやいていたって仕方がない。

「ほら、ボサッとしてないで！ 出番よー。」

凛とした大声とともに、前回と同じく、大型モニターにはヒバリさんの顔がアップで映し出された。

必要以上にカメラに近づいているのか、彼女の顔は画面いっぱいに映っている。

大型モニターにドアップだから、肌の細かなくすみなんかまで、見えてしまっているのだけど……。

そんなことを言つてしまつたら気を悪くするだろつから、ぼくは絶対に口にしない。

もつとも、あとで気づかれたら、知つてたのに教えなかつたのね～！ と暴れられてしまうという可能性もある。

ま、そうなつたらそくなつたで、どうにかしてなだめればいいだろひ。

ともかく、今は任務に集中しないと。

このあいだと同様、ぼくたち新入社員三人がキーボードを操作して、それぞれの担当場所を確認していく。

『準備OKですっ！』

三人の声が、ぴったり重なった。

「了解！ これより、リバーシブル・アースを起動します！」
ヒバリさんの声に合わせて、サイレンの音が変わる。実行フェーズへと移行したのだ。
と、そのままあと。
さらに音が変わった。

前回最後に鳴り響いた、終了フェーズの静かなサイレンとは明らかに違う、激しく緊迫感のある音。

そう、それは危険度が高まったことを示すサイレンだった。
すなわち、いきなりレベル2の危険度へと突入してしまったのだ！

「わっ！？ なによこれえ～？」
「レベル2だよ、落ち着いて！」

焦りまくつた声を上げるゆりかもめに、セキレイが的確に状況を伝える。

だけど、セキレイのその声も、かなり上ずつて焦りを含んでいた。
そしてぼくは、声を発することすらできない。

この日本中央電力の雑森支社に入社して以来、レベル1以外の状況なんて、初めての経験だったのだ。それも当然の反応と言えるだろ？。

レベル2といえば、すぐにでも地球の存在を感じされ、宇宙人たちが襲来してくるかもしれない、といった危険度になるのだから。

なお、レベル3になると、すでに宇宙人が地球を目指して侵攻を

開始した場合と定められている。

そうなつてしまつたら、地球をくすんだ色にしてしまうとかすといつリバーシブル・アースなんて、なんの意味も成さないだろう。つまり、レベル2のうちにじぶんにかしなければ、地球の未来はなこと言つても過言ではない。

緊張で汗が滝のように流れ出す。

春先としては暑すぎる今日の陽気も、それに拍車をかけていた。

もちろん社内には空調設備がある。

でも、宇宙人警報が発令され、リバーシブル・アースが起動すると、神素を噴出する装置のために施設内の電力の90パーセント以上を消費してしまう。

そのため、リバーシブル・アースの起動中には、空調がほとんど効かない状態となってしまうのだ。

春や秋なら耐えられるだらうけど、真夏や真冬だと、かなり厳しい状況になると考えられる。

ぼくたち新入社員はまだ、そんな厳しい状況を体験してはいないのだけど。

真冬ならカイロとか、真夏ならカキ氷とか、用意されたりするのかなあ……。

ぼくがそんなんふうに妄想に浸つていると、ヒバリさんからの叱責の声が飛んできた。

「ひーり、アトリくん！ ボケツとしない！」
「は……はいっ！」

慌ててぼくは田の前のモニターに映し出される情報に集中し、キーボードを操作する。

地球の未来がかかっているのだ。

ぼくがぼーっとしていたために地球が侵略されてしまつた、なんてことのないようになつて、しつかり仕事をしないと。

そんなことを考え、余計に重苦しいプレッシャーを感じてしまつていたぼく。

「うわ、アトリくん！ 緊張しちゃー。手が震えてるやー！」

再びヒバリさんからの叱責を食らひつ飛ばにならうのだった。

「うーん、状況はこう着状態に入ったわね」

バリボリ。

ヒバリさんが、うま 棒を食べながらつぶやく。
こんな時間にそんなものを食べてたら、太りますよ。
なんてことは、口が裂けても言えない。言つたら地獄を見ること
になる。

ヒバリさんと雷鳥さんは、リバーシブル・アースが安定したところで、第三十八対策執行部に戻っていた。

そのあとも緊迫した状態が続き、結局レベル2の状態は解除されないまま、すでに終業時間をはるかに越えている。
もう夜もすっかり更けてきていた。

「仕方がないわね。あなたたちはもう帰つていいわ
「気をつけて帰るんだよ」

ヒバリさんの声に合わせて、雷鳥さんも言葉をつなぐ。

「はい……でも、ヒバリさんたちは……」

ぼくは遠慮がちに答える。

「ふふつ。もちろん、泊り込みね。ま、仕方がないわ。立場上、つ
てやつよ。でも明日あんたたちが出勤してたら、少しうつづか
せてもうつか、今日はしつかり休むのよ」

そう言つてくれたヒバリさんの声からは、その笑顔とは裏腹に、渋々ながらという様子がありありとうかがえた。

仕事に情熱を燃やす真面目なヒバリさんでも、泊まり込みはさすがに嫌なのだろう。

ぼくは家まで結構歩くことになるし、会社の仮眠室なんかに泊まるという選択肢だつて考えられたけど、緊迫した現状を考えれば泊り込みの社員が使う可能性も高い。

ここにはヒバリさんの言つとおりにするのが、最良の選択だと思った。

休むときにはしっかり休む。それは社会人としての務めでもあるのだ。

「それじゃあ、お先に失礼します」

ぼくたち新入社員三人は素早く帰り支度を整え、ぞろぞろと会社を出ていく。

社員寮に帰るだけのゆりかもめとセキレイに別れを告げ、ぼくはひとり、山道を下るのだった。

とりあえず、夕飯も食べていなかつたぼくは、コンビニでインスタントラーメンを買って帰る。

カップラーメンでもよかつたのだけど、五袋セットのインスタントラーメンを買うほうが経済的なのだ。

中に入れる具も、ほとんどいつもタマゴだけと、ちょっと寂しい

けど。

自分なりのこだわりとして、最初にどんぶりに水を入れて、それを鍋に移す。

きつちり一杯分の水で、スープが薄すぎず濃すぎず、確實にちょうどよく仕上げられるのだ。

お湯が沸騰し始めたらインスタントラーメンを鍋の中に入れ、箸で適度にほぐす。

そして時間を見ながら、好みの固さに麺を茹で上げていく。麺がある程度やわらかくなってきたタイミングで、タマゴを落とす。

最終的にタマゴが半熟の状態となるように、上手く調節するのがポイントだ。

それを全部どんぶりに注ぎ込めば、ひとり分のラーメンの出来上がり。

べつに威張れるようなものでもないけど、麺の固さとタマゴの半熟加減に、なんとなく満足感を得られる。

……もともとそれ以上に、空しさのほりで胸がいっぱいになるのだけど。

ともかくぼくは、自分の住んでいるアパートへと戻つてきた。

「ふーっ」

いくらオンボロなアパートだといっても、自分の居場所に戻つてくると、やっぱり落ち着くもので。

敷きっぱなしの布団の上に、大の字に寝つ転がる。

と、そんな安息を迎えた瞬間。

ピンポーン、と、チャイムの音が響いた。
時計の針はもう、十時を回っている。

こんな夜遅くに、こつたに誰だろ？

首をかしげつつ、ぼくは重い腰を持ち上げ、ドアを開ける。
そこには、ひとりの女の子が立っていた。

「ああ、おはようございます」と、おしゃべり。

「へん、どうしてなつてこるのだい？」

ちやぶ皿を挟んだ反対側に、ねむじさんと正面座をしながらラーメンを一心不乱にすする女の子。

それは、このあいだもジャンボカツ定食をおいしくあげた、ホトギスところの女の子だった。

「じとん時間で、ひづったの？」

ぼくの間にかけに、

「わーわー、あふおふえ、わー、ふおのあふあーふおー、わー、
ふあいつのをみあふえあひ、わーべーじせつ、じせつ、ふふおつ

！」

ラーメンを口こぼれこに含みながら答へよつとして、豪快にぐち

やぐひやになつた物体をまき散らすホトトギス。

もつりん、ぼくの顔面や服、ちやぶ台やその上に置いてあつたぼくのラーメンにも、それらの物体が襲いかかってきた。

「だ～、まつたくもつ、学習能力ないなあ～……。つて、ぼくもかぎスに當つ。

思わず文句が飛び出したけど、話しかけたのはぼくのまつなのだから、こつちに責任がまつたくなことは言いきれない。

ぼくは顔やら服やらちやぶ台やらをフキンで拭きながら、ホトトギスに當つ。

「ともかく、食べ終わつてから話さう」

「へん。ホトトギスは黙つて頷く。
学習能力は、一応あつたといつことか。

じつと、ぼくは自分のラーメンを眺める。

うへん……、飛び散ったの、この中にも入つただろうなあ……。
でも、捨てるのももつたいなし、ま、いいか。

再び豪快にラーメンをすすり始めたホトトギスと一緒に、ぼくもずるずると音を立てながら遅い夕飯をたいらげるのだった。

「……で？」

ラーメンを食べ終え、お茶を用意してひと息ついたぼくは、ホトギスに再び問い合わせた。

彼女は素直に口を開く。

「うん、あのね、このアパートに入るのを見かけたから、来てみた

んだわや」

「こんな、遅い時間に？」

「うん。……迷惑だつた？」

瞳をつむりながら、ホトトギスは上田遣いで説いてくる。
そういう仕草は、反則じやないだろつか。もし迷惑だと思つてい
たとしても、そんなこと言えなくなつてしまつ。
もつとも、ぼくはべつに、迷惑だなんて全然思つていなかつたの
だけど。

といつよつ、彼女のことが少し氣になつていたから、念えて嬉し
いといつのが正直な感想だつた。

でも、こんな時間 もつ十一時近いこの時間に、女の子とふた
りきりだなんて……。

そう考えて、自分の置かれた状況に、今さらながらに赤面してし
まつ。

そんなぼくに、ホトトギスからトレーナーのひと撃。

「ひとりじゃ、寂しいかなーと思つて……」

ドキシ。

「わ……それって、どうして……」

どうせめめと拳動不審氣味になりながらも、どうとかぼくな言葉を
返す。

喋り方とか行動とか、なんだかちょっとおかしな部分はあるもの
の、最初に会つたときにも思つたけど、顔立ちはとても可愛らしい。
幼く見える感じではあるけど、おそらく十代後半だらうと思われ
る女の子が、こんな夜遅くに男のひとり暮らしの部屋に来て、こん

な」と呟つなんて。

「あちあちも、寂しかったから……」

ドキ、ドキ、ドキ。

鼓動が高鳴る。

これって、つまり……。

ゴクリ。ツバを飲み込むぼく。

でも。

「どうか、おなかすいてたから……」

ん?

「また、『飯にありつかぬかなー、なんて思つたんだわ』」

『感づくなぐ、そつづけてのけるホトトギス。

えへっと……。

彼女の様子は、やうこつぶつと恥ずかしさを紛らわせようと
している……なんて雰囲気では、もうちうんなかつた。

果然としたまま声も出せずにいるぼくに構うこともなく、ホトト
ギスはそろこ言葉を続ける。

「おなかいっぱになつただわ。やつぱつ『飯は、誰かと一緒に
やないだわね。それじゃ、あちあちは帰るとするだわぞ!』

やう言つが早いが、彼女は素早く靴を履き、玄関のドアを開ける。

「いや、ちがう。ありがとうねん！」

「とにかく立ち上がり玄関までふらふらと近づく間に、ワインク

と短いお礼の言葉だけを残して、ホトトギスは去つていった。

夜遅い時間なのだから、ホトトギスは女子だし送つてあげるべきだったとは思うのだけど。

だらしなく口を開けて呆然としていたこのときのぼくは、そんなことを考へる余裕なんてあるはずもなかつた。

「ううう……」

「アトリ、どうした?」

モニターに目を向けながらも集中できず、つなり声を漏らしてい
たぼくに、隣の席のセキレイが声をかけてきた。

「いや、ちょっと体調が悪くてさ……」

弱々しく答えると、反対側の隣から耳にキンキンと響く声が割り
込んでくる。

「ちょっと、アトリ、大丈夫? 無理しちゃダメだよ~う? 帰つ
てもいいよ? ヒバリさんと雷鳥さんが休憩中だから、ちょっと大
変だけど、でもあたしたち、超絶頑張るからー!」

それは、ゆりかもめの声だった。

心配してくれているのは伝わってきたけど、そんな言い方をされ
たら余計に帰れなくなってしまう。

「ん……大丈夫。でもちょっと、テルリンのとこ、行ってこようか
な」

「そうだな、行ってこい。薬をもらつて飲めば、すぐ治るかもしれ
ないしな」

「ううん、だけどなんか、怪しい実験薬を飲まされそうでちょっと
怖いかも」

「ははは、確かにそうだな~! ま、ひどくならぬいつかこ、行つ
てこいよ。こつちは任せておいて大丈夫だから」

「アトリーもセキレイもひどいな。テルリン、怒っちゃうよ？」「ほうほう、ゆりかもめは今度体調崩したら、テルリン直行だな？」「はつは、それは嫌だよ～！」

そんな他愛のない会話を残し、ぼくは部署を出る。

目指すはテルリン。というか、医務室。

テルリンところは、この離森支社に常勤している保険医だ。

照葉樹林さん。年齢はヒ・ミ・ツ　と、本人は言っている。

一年ほど前に三十路を越えたことを、すじく気にしているらしい。だから、年齢の話題はタブーだ。

新入社員のぼくにまで年齢が伝わっちゃつてると考えると、今さら隠したところで無駄だとは思うのだけど。

それはいいとして、彼女には他にもふたつほど、厄介な部分がある。

そのひとつが、さつきも話題に出た実験薬だ。

なにやらいつも研究開発に余念がないテルリン。

たいていは、どんな症状にも効くとかいう激しく怪しい薬の開発だつたりするわけで。

具合が悪くて医務室に行つた社員をつかまえ、「おお、ちょうどいい薬があるぞ！」と言つて自分の作った実験薬を飲ませる、とこつたことを頻繁にやつているのだ。

もちろん、成功したためしなどない。

だからこそ、医務室に行へへうしなら山を下りてでも病院へ行く、という人が多いのが実情だ。

うへん、そんなふうに考えていたら、行きたくなくなつてしま

た……。

とはいえる。ゆりかもめやセキレイに負担を強いいるわけにもいかないのだから、ここは覚悟を決めるしかない。

ぼくはグッとこぶしを握りしめ、医務室を田指した。

それにしても、こんなに体調が悪いのは、どうしてなのだろう? 軽い頭痛と吐き気、微妙な腹痛が同時に襲いかかってきていた。普段からぼくは、あまり体調を崩すことがないといつのこと。少し考えて、ある原因に思い至る。

昨日ラーメンに入れたタマゴ、賞味期限をかなり過ぎてたかも……。

このところ食堂で食べることが多かつたから、冷蔵庫に入れてしまったとはいえ、あのタマゴはかなり古くなっていた可能性がある。いつ買つたのか、まったく覚えていないし……。

ホトトギスもあのタマゴを食べたけど、大丈夫だったかな……? もし体調を崩したりしてたら悪いよね……。

ぼくはそう考へながら、廊下を歩いていた。
と、ふと気づく。

でも考へてみたら、完全にタダ飯食いじやん、あの子。もし体調を崩しても、それは自業自得ってやつだ。ぼくが悪いわけじゃない。だいたい金銭的にあまり余裕のないぼくなんかにたかるなん

て、それ 자체がひどいことだし。

今さらながらそのことに思い至った。

ただ、それでもぼくは、あのホトトギスといつ女の子に怒りの念を持つたりはしなかつた。

やつぱり最初に会つたときのお母さん染みた感覚が、まだ残つていゐるのだろう。

ほどのくして、医務室のドアが見えてきた。

ホトトギスのことより、今は自分の体調について考えないと。頭を切り替え、ぼくは医務室のドアノブに手をかけた。

「うん、これはただの風邪だな。よし、ちゅうじこ、いい薬が……」

「いえ、市販の風邪薬をお願いします」

容態を診てくれたテルリンが、嬉々とした表情で棚の中から紫色の液体が入つた怪しげなビンを取り出そうとするのを、ぼくは素早く制止する。

明らかな不満顔をこぼしつつも市販の薬を取り出し、それを渡してくれる彼女。

「ほらよ。水は自分でどうにかしない。無理矢理そのまま水なしで飲むのがお燐めだ」

「ひらひら、そんな意地悪な言い方するもんじゃないよ、テルリン

」

ぶつきつけめうな声で箱入りの市販薬を投げつけるテルリンに、突然やけに軽い声が向けられた。

「すまないね」、ぼくのテルリンが意地悪なことを言つて。白漫の実験薬を試すことができなくて、ふてくされてるんだよ」

「口ッ。

爽やかな笑顔を浮かべながら、そう話しかけてきたのは、あすまやじゅん東屋純さんだつた。

確か、第二十七対策執行部の人だつたはずだ。

「ぼくのテルリンってなんだ、こら！ 撤回しろバカ！」

ボカボカボカボ力！

テルリンから思いつきり後頭部を連續で殴られながらも、笑顔を崩さない純さんは、ある意味すごい人なのかも知れない。

なんというか、かなり軽い喋り方である上に、見た目的にも赤に近いような茶髪だったり派手な服装だったりで、チャラい感じとうのがしつくりくる言い方だろうか。

そんな雰囲気ではあるけど、純さんは二十九歳で、テルリンが「早くこっち（三十路）の世界に来いー！」なんて言つていた。
……とこつかテルリン、年齢は秘密なんじゃなかつたつけ？

「純さんは、どうしてここにいるんですか？ まだレベル2の警報が継続中のはずですけど……」

「ふつ、ぼくも体調を崩してしまつてね。テルリンの愛で治してもらおうと思つて、ここまで来たつてわけさ」

前髪をかき上げながら、純さんは恥ずかしげもなく言つてのける。

「ウチに愛なんてない！ とくに純なんかには絶対にない！ あるのは実験薬だけだ！」

言いきるテルリン。

「ふつ、そんなに恥ずかしがることないの?」マイハイー
「くだらん呼び方するな! 純の診察はとっくに終わってるだろ?」
が! 仮病は病気じやない! 早く任務に戻れ、このバカタレが!」
「はつはつは、相変わらずシンデレだなあ、テルリンは! そんな
とこも、素敵なんだけどね!」

「テレなんてない! 早く出でいけ!」

なんというか、すつしょお似合いなのではないだろ? が、こ
のふたり。

もちろんテルリンは即刻否定するだろ? ナビ。

「あつ、せういえば……」

医務室から出ていく「うとする純さん」が不意に立ち止まり、真面目
な口調でつぶやいた。

「ちょっと小耳に挟んだんだけど、宇宙人が忍び込んでるって噂、
聞いてるかい?」

「え……?」

まつたく思いもよらなかつた言葉に、ぼくは疑問符を浮かべるだ
けだったのだけど。

「ああ、やつらじこな」

テルリンは落ち着いた様子でそつ答えていた。

「あの、それってどうしたことですか？」

ぼくの疑問に、純さんが説明を加えてくれる。

今回、宇宙人警報のレベル2が発令された。

でも通常、そんな急速にレベル2になるなんて、ほぼありえないことなのだという。

どうしてそうなったのかを説明づけるためには、前回のレベル1の警報のときに宇宙人がすでに地球に忍び込んでいたと考えるのが妥当なのだそうだ。

つまりは、その宇宙人がスパイとして侵入し、仲間の宇宙人たちを地球へと向けて導いている、ということだ。

あくまでも噂でしかない段階とはいえ、会社側としては無視できないと判断した。

すでに始められているという調査の途中経過によると、どうやら宇宙人がいるとすれば、離森町に潜伏している可能性が高いらしい。

「宇宙人……ですか……」

いろいろと説明してもらつたものの、いまいちよくには信じられなかつた。

宇宙人警報というのは、レベル2でもまだ気づかれていないことが前提になつてゐるはずだ。

もし宇宙人が地球にまで到達していたなら、すでに気づかれてレベル3になつっていてもおかしくないような気がする。

だいたい、前回のレベル1のときに宇宙人が来ていたのだとしても、宇宙船かなにかで來るとすれば、さすがに気づかないはずはないだろう。

「日本の日本中央電力雑森支社の宇宙観測設備は、かなりの精度を誇つてゐるのだから。

「ま、あくまでも噂だよ。気にすることはないわ。なにかわかれれば、会社側から連絡が入るはずだしね」

純ちゃんはそう言ひ残して、医務室を出ていった。

「それじゃあ、ぼくもこれで……。テルリン、ありがと『うざこま』した」

市販の薬をもらつただけとはいえ一応お礼を述べて、純さんに続いて出てこいつとするぼくに、背後から声がかかった。

「お大事にな。大切な部下を診てやつたのだから、ヒバリには感謝してもらわねばならんな。今度思いつきり抱きつかせてもらつから、覚悟しておくように」と、伝えておいてくれ

「あ～……、はい……」

苦笑をまじえながら、ぼくは曖昧な返事だけしておべ。

ふたつほどあると言つたテルリンの厄介な部分、そのひとつは、これ。

彼女は女性が好きなのだつた。

「女性同士だから、構わないだろ?」なんて言いながら、ことあることに抱きついたりキスしたり……。

怪しい実験薬の件と、この件によつて、この医務室にまよひどい誰も訪れない。

でも、単にテルリンがサボりたいがために演技しているんじゃな

いだろうかと、ぼくはこの人と会うたびに考えているのだけれど。
真相は謎のままである。

「アトリ、大丈夫～？」

ぼくたちの部署まで戻ると、ゆりかもめが飛びつかんばかりの勢いで心配顔を向けてくれた。

「うん、大丈夫だよ。ただの風邪だつて。薬をもひって飲んできたから。……あつ、もちろん市販の薬だよ」

「は～、よかつた～」

その安堵は、ただの風邪だつたことに対してなのか、もらつたのが市販の薬だつたことに対してもうのか。

「ま、大丈夫だとは思つてたけど、よかつたな」

セキレイはそう言つてぼくの肩をポンポンと叩く。

軽く話しかけているけど、ぼくが医務室に行つてゐるあいだ、ぼくの担当場所の確認も受け持つてくれていたはずのセキレイ。

そんな様子をまったく見せないし、ましてや恩に着せようとすると素振りなど微塵もない。

ゆりかもめもセキレイも、やっぱり最高の同僚たちだと言えるだらう。

「でも、無理は禁物よ？ 悪化するよつなら、すぐ戻つて休んでいいんだからね？」

「そうだね。体調が悪い状態で無理なんかして、重要な情報を見逃したり、普段なら起こさないミスを犯したり、といったことがあっても困るからね」

ヒバリさんと雷鳥さんからも心配の言葉をかけられた。

ふたりとも、休憩から戻つてきていたようだ。

雷鳥さんの言葉はちょっと厳しい内容ではあつたけど、でもぼくのことを気遣つてくれているのは、その優しげな瞳からも伝わってきた。

「はい」

ぼくは素直に答える。

「あつ、やうだ、ヒバリさん」

伝える必要があるのかどうか判断に迷つといひだつたけど、一応テルリンから受け取つた言葉を伝えることにした。

「テルリンが、今度思いつきり抱きつかせてもらつから、覚悟しておくよ」と、だそうです

「……あ、あの人は、まったく……」

ぼくの伝言を聞いて、ヒバリさんは「めかみをピクピクさせながら頭を抱えていた。

「あははは～！ ヒバリさん、テルリンに超絶氣に入られちゃつてますもんね～」

面白い話題を得たとでも言わんばかりの明るい声で、ゆりかもめが茶々を入れる。

でも、

「あっ、ゆりかもめにも伝言。体調が悪くなくても、いつでも医務室に来てくれていいぞ、念入りに可愛がってやるからな、だつてさ」「えいやう～！ 超絶危険を感じる～！ 絶対お断りだよ～う！」

ぼくの伝言パート2によつて、叫び声を上げることになるのだった。

業務時間中はどうにか我慢していたのだけど、結局ぼくは体調がよくならず、残業なしですぐに帰らせてもらうことになった。
事態はこう着状態が続いたまゝ。いまだにレベル2のサイレンが鳴り響いている。

ぼく以外の四人は、このまま残業していくのだろう。
休憩を挟んだヒバリさんや雷鳥さんは、今日も泊まり込みになるかもしねりない。

みんなに迷惑をかけるのは心苦しかったけど、体調の悪い状態では余計に迷惑をかけてしまう可能性もある。

素直に帰宅する以外、ぼくに選択の余地はなかつた。

山道を歩いたことで体調が悪化したのか、頭がぼーっとしてはいたものの、ぼくはさうにかボロアパートまでたどり着くことができた。

部署のドアの前に立ち、カギを取り出した、そのとせ。

ふりつ。

微妙な浮遊感が襲いかかってきた。

いや、ぼくは倒れかけてしまつたのだ。

でもぼくの体は、そのまま床までたどり着きはしなかつた。

「ちよつと、大丈夫かや？」

「の声は……。

聞き覚えのある声に安堵したのか、ぼくの意識はソレで途切れてしまつた。

「あ、ぼく……」
「あつ、起きたかや？ 今、おかゆができるかい、待つてんだわさ

上半身を起こした音に気づいたのか、台所から声がかけられた。
それは、ホトトギスだった。

彼女がぼくを部屋の中まで運んでくれたんだ。
それに、おかゆまで作ってくれてるなんて。
じーんと心が温かくなる。

やがて、出来上がったおかゆを持って、ホトトギスがそばに寄つてくる。

「あ……あつがとつ……

「いえいえ。あつ、そのままそこにいていいだわ。」

ちやぶ台の横に移動するため起き上がりとするぼくを、ホトトギスが声で制する。

「え、でも……」

「迷惑しているぼくの横にちよこんと座り、茶碗に盛ってくれたおかゆを左手に持ち、右手にはおかゆ用の木のスプーンを持つ。サラサラのおかゆをスプーンでひとさじゅくうと、彼女はそれを自分の口のほうへ。」

今まで何度も見ていた彼女の行動パターンから考えると、もしかしたら自分で食べちゃつたりするかも。なんて、ある意味妙な期待を込めて眺めていたのだけだ。

「ふーふーふー」

ホトトギスはスプーンのおかゆに息を吹きかけ始める。そして、

「はい、あーん」

と囁いながら、ぼくの口の前にスプーンを差し出した。

「……あーん」

彼女に言われるまま、ぼくが口を開けると、ホトトギスはスプーンを優しくぼくの口の中へと進める。

ぼくがスプーンをぱくつとくわえると、すかさず彼女はそのスプーンをゆっくりと、微かに上のほうへ引き抜いていく。

口の中には、ほじよい塩味が絶妙なおかゆだけが残された。

今まで会っていたホトトギスのイメージから、彼女は料理なんてしなさそうで、したらしたで、すうまい味だったり黒「」ゲだったりとかしそう、なんて思つていたのに。

それはとても失礼な想像だつたようだ。

食べさせもらつたおかゆは、すゞくまともな味だつた。

茶碗に盛られたおかゆをたいらげたぼくに、彼女は優しく微笑みかけてくれた。

「大丈夫かや？ 熱はないかや？」

茶碗をちちやぶ台の上に置くと、ホトトギスはそつと顔を近づけてくる。

「あ……」

ひつん。

ぼくのおでこと、彼女のおでこが、ピッタリをくつついた。

「ん……少し熱があるみたいだわ。ゆっくり休むのがいいだわよ」

「う……うん……」

頭が激しくぼーっとなつていたのは、はたして熱のせいだけだったのだろうか。

ともかくぼくは、言われたとおり再び布団をかぶり、眠りに就いた。

次の日、起きてみると、額の上には水に濡れたタオルが置かれていた。

すでにタオルはぬるくなっていたけど、ホトトギスはあるあと、しばらくぼくを看病してくれたということになる。

さすがに朝までいてくれたりはしなかつたらしく、ドアはカギが開いたままだつた。

カギを持っていくわけにもいかないし、かといってぼくを起こすのも悪いと思ったのだろう。

体調は、すっかりよくなつていた。

おかげが、よかつたのかな。ホトトギスには感謝しないと。そう思いながら台所へ向かうと、空っぽになつたレトルトのおかゆのパックが、ごみ箱に捨てられていた。

あ……ちょっと前に買つて、置いておいたんだっけ。ホトトギスはそれを温めただけだつたということか。なんとなく彼女らしいと思い、笑みがこぼれてしまった。

会社に向かつて雑森山へと足を踏み入れると、山の上方からは微かにレベル2のサイレンが聞こえていた。空も神素の影響で七色に輝いている。

状況はまだ、変わつていないのだ。

でもぼくは、ホトトギスのおかげで朝から清々しい気分に包まれながら、山道を歩いていた。

舗装はされていないし、それなりに傾斜もある山道ではあつたも

の、そんなに歩きにくいうわけでもない。

ちょっとしたハイキングコースのような感じだ。

だからまだ眠気の残る朝早い時間から歩いていたとしても、いつ

も清々しい気分ではあるのだけど。

今日は普段にも増して、いい気分だった。

「……ぼくつて、単純だな」

ホトトギスが見せた優しい笑顔を思い浮かべながら、ぼくはつぶやいていた。

「尊はどひやうら真実のよひです」

会社に着いて自分の席に座るなり、ドアを開けて入ってきた所長さんから、間髪を入れずそんな言葉が投げかけられた。

「ほえっ？ 所長さん、どうこうことですか～あ？」

ゆりかもめが寝ぼけまなこのままで質問する。

まだ始業時間前だつたから、彼女は机に突つ伏して眠りこけていたのだ。

もつとも、社員寮に住んでいるゆりかもめやセキレイは、昨日も遅くまで残つて仕事をしていたと考えられる。

ぼくが体調を崩して帰つてしまつた穴を埋めるために、といふのが理由なのだから、本当に頭が下がる思いだ。

「とりあえず、落ち着きなれ。とこつか田を覚ましなさい、ゆりかもめさん」

すかせすヒバリさんから注意を受ける彼女。

始業時間前だつたとはいえ、すでにヒバリさんも畠鳥さんも席に着いていた。

レベル2状態は続いているのだ、そつそつ休憩してもこられないのだろう。

会議があれば出でてしまつかもしれないけど、それまでなこじにて作業をするはずだ。

それにしても、こうして所長さんが入ってきて、しかも雑談を始めるでもなく、深刻な表情で語りかけてくるなんて。

いつたいどんな状況になつてしているのか、ぼくには皆田田見当もつかなかつた。

「あう……。はい、わかりました。おはようござります」

まだいまいち寝ぼけている様子ではあつたけど、ゆりかもめはヒバリさんに素直な声を返す。

そう返しながらも、なんとなく口を尖らせて不満顔ではあつたのだけど。ゆりかもめは寝起きが悪いからなあ……。

「それで所長さん、いつたいどうことなんですか?」

意図的にだつたのかはわからないけど、セキレイが助け舟を出す。彼の質問に、ゆっくりと席に腰を落とした所長さんは、いつもながらの優しげな落ち着いた声で、さつきの言葉についての説明を加えた。

「ここ最近、宇宙人が忍び込んでいるという噂が、会社内で流れていた。」

もちろん一般市民にまでは広まつてはいなかつたし、仮にそんな噂を聞いたとしても、普通の人ならば信じたりはしないだろう。宇宙人の存在は、おおやけにはされていないのだから。

でも噂の出どころは、この雑森支社の研究施設内だつた。

どうやら、前回の宇宙人警報レベル1のときに落ちてきた隕石のようなもの、あれが実は宇宙人の乗つた小型の宇宙船だつたのではないかといふ話らしい。

小型の宇宙船なら、隕石との区別もつかない可能性があるからだ

という。

ともかく、そうやつて地球に不時着した宇宙人が、地球人に紛れ込んでスパイ活動をしているのではないか。

いつしかそんな噂へと、発展していった。

半信半疑ではあつたものの、無視はできないと考えた会社が調べた結果、とある推論へとたどり着く。

雑森町に潜伏している宇宙人は、地球人の女性……というよりも少女の姿をしているということだった。

しかもそれは

「……確實とは言えないのですが、最近アトリくんに接触してきた女の子 ホトトギスさんが宇宙人である可能性が高いのです」

若干ためらいながらではあつたけど、所長さんははつきりと、そう言い放った。

「な……なによそれ！？ アトリに接触してきた女の子って、誰よ！？ どうこうこと！？」

ゆりかもめがす」に勢いで、なにせり微妙にずれた方向に食いついた。

彼女は鬼のような形相で、どうにうわけかぼくに對して怒鳴りつけてくる。

どうしてぼくが責められているのだろう。

もう思わなくはなかつたけど、ゆりかもめの勢いに圧されたぼくは、素直に説明する。

「いや、ホトトギスは最近知り合つた女の子だよ。ところでも、三回くらい会つた程度だけね」

回数としては正しいけど、実際にほんのつか一回はアパートのぼくの部屋に上げていたりする。

ただなんとなく、そこまで言つてしまつと大変なことになつそうだから、こうこう言つておいたのだけど。
ゆりかもめは、じとーっとした目でぼくを見つめていた。

思わず田を逸らしてしまつぼく。

べつに、やめることがあるわけじゃないことこの上。

といふか、どうしてゆりかもめに、ここまで責められなきゃならないのだろう？

……あれ？ わついえば……。

「所長、どうしてホトトギスのことを知つているんですか？」

「それはもちろん、彼女を監視していたからですよ。アトリくんが

彼女と一緒に食堂で「」飯を食べたり、アパートの部屋に連れ込んだりしていったことわ、ぱつぱつ報告をされていますよ」

「それはもちろん、彼女を監視していたからですよ。アトリくんが

彼女と一緒に食堂で「」飯を食べたり、アパートの部屋に連れ込んだりしていったことわ、ぱつぱつ報告をされていますよ」

「

彼女は執拗に、ホトトギスと知り合ってからの経緯を事細かに説明しようと怒鳴りつけられる。

わざわざ説明するのも面倒だけれど、やうやくもめに逆ひりつとあとが怖こみなあ……。

そんなことを考えてみると、

「じいじい、ゆつかもぬ、落ち着いて。今はそれよつも、所長さんの話を聞く」

絶妙なタイミングで、セキレイが彼女をなだめるように声をかけてくれた。

セキレイ、グッジョブ。

「やうだね。……所長さん、それで、アトコくんは必ずぼーいのでしよう?」

雷鳥さんも場を取りまとめるふうに質問の声を上げた。

「」Jの部署まで来たのは、彼と直接話したかったからなんですね？」

さらにビバリさんも質問を重ね、所長さんに話を続けるよう促す。ふたりの思いに応え、所長さんはぼくのほうに向き直ると、いつ言葉をかけた。

「先ほどホトトギスさんを監視していたと言いましたが、正確には監視ではありません。町の巡回に当たっている所員が偶然見かけ、追つてみたらアトリくんと接触したというだけです。とはい……」
慎重に調査は続けています。もしも彼女が宇宙人のスパイだったとしたら、地球の未来はアトリくん、キミにかかっている可能性もあるんですよ。ですから、慎重に行動してください」

所長さんはぼくに言葉をかけたあと、すぐに部署を出ていった。ヒバリさんも雷鳥さんもセキレイも、ゆりかもめですらも、なにも言わなかつた。

宇宙人警報レベル2の危険な状態は続いているのだから、仕事に戻る必要があつたのだ。

ゆりかもめはときどき、なにか言いたそうな目線を向けてきていたけど。

ぼくとしては、とくになにも言いつもりはなかつたし、体調も戻つたのだからと、しつかり仕事に集中することにした。

夜、残業も終え、帰宅を許された。

今日は金曜日。普通なら週末は土曜日曜と続けて休みになる。だけど、いまだにレベル2の状態は続いている。

というわけで、週末のどちらか一日は出勤するように言われた。ぼくは病み上がりということで、明日は休んで日曜日に出勤することになった。

帰りの暗い山道を、懐中電灯を片手に歩きながら、ぼくは考える。所長さんからあんなことを言われてしまつたけど、そう言われても困るだけだ。

だいたいホトトギスが宇宙人だなんて、そんなの信じられない。

そりやあ、彼女の言動はちょっと、とかかわり、普通の人とずれているのは確かだと思つ。

加えてぼくは、彼女の下の名前以外、なにも知らない。

ホトトギスという名前だって、本名なのかどうかわからないわけ

だし、いつも「飯をたかつて」いるだけとこつ飯もあるナビ……。

だけど昨日は、体調の悪いぼくを看病してくれた。

ぼくの家に置いてあつたものとはいえ、おかゆも作ってくれた。

そんな彼女を宇宙人だと疑うなんて、そんなこと、ぼくにはできなかつた。

いや、そんなふうに思いたくなかったのだ。

所長さんの話によれば、ホトトギスの件はまだ調査中とこつことだつたし、念のため忠告しただけなのだと思われる。
もし本当に危険だと考えているなら、所長さんだつてわざわざまくに話したりはしないだろ?。

逆に秘密においておいて、監視を強めるとか、そういう対応になるはずだ。

だから、少なくとも所長さんにに関してだけ言えば、今のところホトトギスが宇宙人だなんてことを本気で考えているわけではないと言える。

あまり気にする必要はないかもしねない。
とはいっても気になつてしまつ。

ホトトギスに会つて、いろいろと話を聞きたいな。

そう思いながら、ぼくは自分のアパートまでたどり着いた。

もしかしたら玄関の前で彼女が待つてくれているかも。

なんて期待をしてしまつっていたのだけど、もちろん彼女がいるわけもなく。

ぼくはひとり寂しく布団にへるまると、山歩きで疲れた体を癒すのだった。

次の日、いつもの食堂にでも行こうと、ぼくは家を出た。
もしかしたら、町を歩いていれば彼女と会えるかもしれない。
そんな思いがあつたのも事実だつた。

ホトトギスの連絡先を、ぼくは知らない。
だから、偶然会う以外に方法はないのだ。
見慣れた食堂の温かさ漂う木造のたたずまいが、ぼくの視界に映
り込む。

そして。

食堂のサンプルワインドウの前に、彼女が立つていた。

「ホトトギス！」

ぼくは思わず声をかけていた。

彼女は振り返ると、笑顔を浮かべる。

「アトリー、来てくれて、ありがとだわぞ。」

べつに約束していたわけじゃないのに、そう言われた。
つまりそれって、ぼくにたかるつもりで、ここで待つていたって
こと？

そう思つて、ちゅつとムッとした表情を浮かべてしまつたけど。

「具合、よくなつたのね。よかつただわぞ。」

なんて満面の笑顔を向けられたが、怒つたりなんてできなくなつてしまひ。

「うん。それじゃ、なにか食べよつか」「わ～い、なにしようかなあ！ 迷つかせー。」

ぼくの言葉を聞いた彼女は、次の瞬間にはサンプルワインハウ

ベったりと張りついていた。

食事を終えたぼくは、ホトトギスを誘つて町を歩いていた。
といつても、なんとなく店をのぞいたりしながら、ふらふらと歩
き回つてこむだけなのだけど。

少しでも長く彼女と一緒にいたかったのだ。
そう考へている自分にハッとする。

これは前に思つたような、お肉を染めた心配からくる感情では
ないことに、改めて気づいた。

ぼくはホトトギスのことを 女性として意識してゐるのだ。

確かに最初から、可愛い女の子だとと思つていた。
でもそれだけではない。
ちょっと変わった子ではあるけど、それが余計に、ぼくの心を惹
きつける。

そんな感覚が、ずっと心の中にはあったのだ。

所長さんから言われたことは、もちろん気になつてゐる。

でも、一緒に寂れた商店街を歩く彼女の楽しそうな笑顔を見ていると、なにも訊いてはいけないようと思えててしまう。

次に会つたら、いろいろと話を聞きたい。

そう考えていたはずなのに、結局ぼくはなにも訊けないまま、彼女とふたりの時間を過ごし、そしてそのまま別れた。

「また、会おうね」

別れ際のぼくの言葉にホトトギスは、

「うん、もちろんだわさー。」

と言いつらひよつと不器用なワインクを返してくれた。

レベル2の警報が出たまま、数日経つた。

太陽の出でいる時間帯は、神素の影響で、空が絶えず七色に輝いている。

カラフルな光が照りし出す景色は、朝の清々しさをも軽減させていた。

ずっと緊張の解けない状況が続いているのだから、そんな空でなかつたとしても、あまり清々しくは感じられなかつたかもしないけど。

ぼくはいつもどおり、朝の山道を歩いて会社へと向かう。社内に入り、第三十八対策執行部のドアをくぐると、中にはセキレイとゆりかもめがいた。

もちろんゆりかもめは、机に突っ伏して眠そうとしている。

一方セキレイのほうはとて、まだ始業前ではあるけど、先行して仕事を始めていたようだった。

ヒバリさんと雷鳥さんは、姿が見えない。

すでに会社してきてはいるらしく、ホワイトボードには「会議」の文字が書かれてあつた。

朝から忙しそうだ。また泊まり込みだつたのかもしれない。

ともかくぼくは、同僚のふたりに「おはよう」と声をかけながら席に着く。

と、ゆりかとゆりかたちの動作で身を起こし、ゆりかもめが声をかけてきた。

「アトリー、おはよ～……」

「おはよつ、ゆりかもめ。相変わらず、朝弱いねえ～」

「う～、だつて、夜眠れないんだもん……」

「え？ どうかしたの？」

ぼくの問いに、ゆりかもめは口をつぐんでしまつ。

？ こいつたい、どうしたのだろう？

「う～、超絶眠いよ～う……」

うめき声を上げるとい、ゆりかもめは再び机に突つ伏してしまつた。

「ゆりかもめ……？」

「アトリー、ま、寝かせとこいやれ。……もつとも、原因はお前にあるんだるうけどな」

不意に背後から、セキレイが話に割り込んできた。
寝かせておくのは、まいにこして……。

「セキレイ、ぼくが原因つて、ビツビツ」とへ。

思わず振り向き、ぼくは聞き返してこた。

「あ～、つまりだな、ゆりかもめは……」

「ちよ……ちよ……ちよとセキレイ！ 余計なこと言わないでよーっ。」

ガバッとするごとに勢いで顔を上げたゆりかもめが、ぼくへ葉を返そうとしていたセキレイを止める。

わざわざあんなに寝ぼけた感じだったところのこと……。

「ゆりかもめ……？」

再び疑問符を浮かべながら、彼女に田を開けたぼく。
ゆりかもめはそんなぼくをじっと見つめ返し、数瞬のあいだ、時
間が止まつたように見つめ合つた。

「な……ば……べつに、なんでもないわよ~うー。」

だけど、急に顔を真っ赤に染めたと思つたら、彼女はまた机に突
つ伏すと顔を隠してしまつた。

「ん~? どうしたんだよ、ゆりかもめ……」

そんなぼくの肩に、ボンと手を置くセキレイ。

「ま、放つておけ。……それにしても、つぐづぐ報われない奴だ…

…」「え? 報われないって、ぼくが?」

「いや、そうじゃなくてだな……。ま、それはもうこいつ。それよ
り」

ぼくにはこまごま、よくわからなかつたのだけど。
ともかくセキレイはこじりで、話の流れを変えてきた。

「どうやら、こいつのとおかしな状況になつてゐるらしいな

「え? どうこいつ」と?」

セキレイの言葉に、ぼくは質問で応える。

さつきまでの話も気にはなつたけど、それよつもずっと『元』になる
話題にすり替わつたのだ、当然と言えるだらう。

その質問に、セキレイはせりて説明を返してくれた。

「宇宙人の話さ。」「コードネーム・ホトトギス。そう呼ばれてるみたいだけだな」

「「コードネーム……」

そうつけ加えることで、一応ぼやかしているのかもしれないけど、そのままホトトギスの名前で呼ばれている話……。

ぼくはなんだか、もやもやした気持ちでいっぱいになつた。

だつて、ホトトギスは宇宙人なんかじゃない、普通の女の子なのだから。

そう思い込もうとしているだけなのかもしれないけど、どちらが現実的かを考えたら、ぼくが思い至つた結論のほうが正常だと言えるはずだ。

この会社の人間は、リバーシブル・アースに関わり、宇宙人の存在を知つてしまつている。

だから、普通の人とは違うかもしねないけど。

それでも、あのホトトギスが宇宙人だなんてありえないことだ。

ぼくがもやもやとした考えを頭の中で思い描いていると、セキレイはさらに説明の言葉を続けた。

「彼女が宇宙人のスパイだとするなら、今レベル2を引き起こしていいる宇宙人たちとの連絡手段を持つていいはずだ。ただ、そういう通信の形跡はないらしい。それは通信手段がなんらかのトラブルによつて使えなくなつたと仮定できる」

彼の説明は、ぼくにはよくわからなかつた。
でも、セキレイにしても、聞いた話をそのままぼくに伝えているだけなのだろう。

「とはいって、強い感情によつて、非常通信が発動すると考えられるらしい。もしコードネーム・ホトトギスが泣いたりすれば、それによつて宇宙人本体に通信が届き、最悪の場合、地球侵略が開始される。そういう可能性も懸念されている」

「いくらなんでも突拍子もなさすぎる話に、ぼくは困惑していた。だけどセキレイは大真面目な顔で語つている。冗談、というわけではないのだろう。

ゆりかもめにもぼくとセキレイの会話は聞こえていいはずだけど、彼女は口を挟んだりはしてこなかつた。

そんな中、セキレイの説明はなおも続く。

「その件に関して、どうも三つの派閥ができるらしいんだ」

「派閥……？」

「ああ、そうだ」

腕を組み田をつぶりながら、セキレイは額を返した。なんだか偉そうだ。

と、いきなり彼は声のトーンを上げる。

「泣かすなら、仲よくしよう、ホトトギス！」

「え？」

「泣かすなら、仲間を待とう、ホトトギス！」
セキレイはぼくの視線なんて気にすることもなく、大声を発し続

「泣かすなら、仲間を待とう、ホトトギス！」

セキレイはぼくの視線なんて気にすることもなく、大声を発し続

けていた。

「そして、泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス！」

「殺……！？」

突然の物騒な言葉に、ぼくは思わず言葉を失つ。

「以上三つが、それぞれの派閥の主張だ」

泣かすなら、仲よくしよう、ホトトギス。

すなわち、ホトトギスと仲よくなり、宇宙人たちのもとへ地球人が自ら出向いて友好関係を結ぼつとする、「友好派」。

泣かすなら、仲間を待とう、ホトトギス。

すなわち、とりあえずこのまま彼女を泣かせたりはしないようにしつつ現状を維持し、そのうち仲間の宇宙人たちが様子を見に来るのを待つ。そして仲間たちが来たら、そのときに改めて対策を考えようといふ、「保守派」。

泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス。

すなわち、先手必勝！ ホトトギスを含めて、仲間の宇宙人たちもすべて殺してしまえばいいんだといふ、「過激派」。

ぼくたちの会社内、そして会社と密に連絡を取っている政府や各國首脳陣のあいだでは今、その三つの派閥が発生しているのだと、セキレイは語つた。

ホトトギスを宇宙人だと決めつけていた。それを前提とした三つの派閥に、ぼくは深い憤りを感じていた。

そしてその中には、ホトトギスをも殺してしまおうと考へるような派閥まであるといふのだ。

いつたいどんな状況になつてゐるのか、ぼくはよくわからなかつたけど、それにしたつてひどすぎる。

ぼくの表情から怒りの念を感じ取つたのだろう、セキレイは、「ま、あまり気にするな。お前はお前の信じる道を行けばいいぞ」と言つて、ぼくの肩を呂く。

「セキレイは……」

セキレイは、どう思つてゐるの？

そう訊きたかったのだけど、言葉にできなかつた。でも鋭い彼は、ぼくの言つたことを汲み取つてくれた。

「おれは、放つておくのがいいんじゃないかと思つてゐんだけどな。派閥とかなんて興味はないが、あえて言つなら保守派つてことになるだろ？」「セキレイ……」

「ホトトギスつて子とお前がどういう関係なのか、べつに詳しく聞くつもりはないが……。ま、聞くまでもなさそうだよな」

ぼくがホトトギスに惹かれていたのも、セキレイにはお見通しのようだった。

「でも……、もうひとつ、周りも見てやつてほしこりのが、おれの意見だけどな」

「え？ 周り？」

セキレイがなにを言いたいのか、ぼくにはひばりわからなかつた。

ただ、セキレイとぼくの話に聞き耳を立てていたのだろう、机に突つ伏したままのゆりかもめが、一瞬だけピクッと体を震わせたことに気がついた。

とほいえ、ビリしてなのはもちろん、わからなかつたのだけど。

「おはよー、みんな」
「ちやんと揃つてゐね。ゆりかもめさんは、しつかり皿を覚ましてください」

ヒバコさんと雷鳥さんが、第三十八対策執行部の室内に入つてきた。

雷鳥さんから注意を受けたゆりかもめは、飛び上がるよつに身を起していた。

あまり細かくじかじかと言われなこゝの部署でなかつたら、じつひどく叱られるところだらう。

むづむづ雷鳥さんは、それ以上なにも言つたりはしなかつた。

ふたりは素早く席に着くと、ぼくたちを見据える。

ぼくたち新入社員の机は三人分が横に並んでいて、その正面に、

部長であるヒバリさんと副部長の雷鳥さんの机が横に並んでいた。

ヒバリさんたちの机とぼくたちの机は、向き合つような配置になつていてる。

だから、「うるさいへ指導されたりしない部署だとはいえ、上司のふたりが席に着くと、ぼくたちは眞面目に仕事をせざるを得ないのだ。

上司ふたりの視線を感じながら、モニターに目を向け、キーボードに手を置く。

さて仕方がない、仕事を始めようかな。

そう思った刹那、ヒバリさんからぼくたちに、こんな質問が投げかけられた。

「あなたたちは、コードネーム・ホトトギスに関して、どんな感想を抱いてる?」

新入社員であるぼくたちに、どんな答えを求めているというのか。ぼくはどう答えるか、言葉に窮してしまった。

ホトトギスに関することだから、慎重になつてていたといつのもあるかもしれない。

そんな中、セキレイが真っ先に口を開いた。

「実際に宇宙人なのかどうか、おれにはわかりませんが、あまり急ぎすぎないほうがいいんじゃないかと考えています」

「……そう。……ゆりかもめさんは?」

セキレイの言葉を聞き、ヒバリさんは続けてゆりかもめに問い合わせた。

「あ……あたしは、その……。正直、よくわかりません。宇宙人って言わても、まだピンとこないし……」

ゆりかもめは素直に答える。

もつとも、彼女がいろいろと思案して答えるなんて、考えられなかつた。

いつも素直に。それがゆりかもめだ。……単純、とも言い換えるられるのだけど。

それはともかく、ヒバリさんの視線は続いてぼくのほうへと向く。

「アトリくん」

「……はい。ホトトギスが宇宙人だなんて、ぼくにはやっぱり信じられません」

名前を呼ばれたぼくは、ゆりかもめを見習つたといつわけでもないけど、自分の思つていることを素直に返した。

「……そう、わかつたわ」

ヒバリさんは小さく頷くだけだった。

「あ、あの……！　おふたりは、どう考えていらっしゃるんですか？」

ぼくは思わずそう尋ねていた。

突然の大声に、一瞬目を丸くするヒバリさん。

彼女はすぐ横にいる雷鳥さんと視線を交わし、やがて前に向き直ると、静かな口調でこいつ答えた。

「……わたしたちは、慎重に考へてゐるわ。もし本当に彼女が宇宙人のスパイだったとしたら大変なことになる。でも、もし違つたら、それはそれで大変なことだと思うしね。おそらく会社は、彼女を監視したりして、調査を続けているはずだから」

「だけど、小さな犠牲を避けようと考慮していたら、より大きな犠牲を強いられることがある、といった考えを持つている人たちもいるんだ。その主張もわからなくはないけど、危険だよね」

ヒバリさんの声に、雷鳥さんも解説を加える。

ふたりの言葉を聞く限り、三つの派閥で言えば、保守派に近い考え方を持つていてことになるのだろう。

つまり、ぼくたちと同じだ。

この部署にいる五人すべてが、同じ立場にあるらしいこと。それは、なにがなんだかよくわかつていかない現状を考えると、とても心強く思えた。

「とりあえず、お喋りはここまでよ。レベル2の警報は、まだ続いているんだから。コードネーム・ホトトギスの件は置いといて、今は自分たちの役割をしっかりと果たさなきゃ」

『はい』

ぼくたち新入社員の三人は、声を揃えて答えた。

そして素早くモニターに目を移すと、担当場所のチェックを開始する。

仕事モード、オン。

頭を切り替えて頑張ろう。そう考えた、その矢先のことだった。

部署の壁に設置された大型モニターに、緊急の通信が飛び込んできたのは。

「なにを悠長なことをやつていいのだね、キミたちは… やつれど奴らを追い払うか、始末するかしたまえ！」

大型モニターには、いかつい顔のおじさんがビデオで映し出されていた。

そのおじさんは、額に青筋を立てて怒鳴りつけてくる。
ぼくたちには、ただ呆然とその映像を眺めることしかできなかつた。

でも、はて？

このおじさん、会社の人ではないと思うのだけど、ただ、どこかで見たことがあるような……。

首をかしげているぼく。

そんなぼくの様子を、右隣の席に座るゆりかもめがじつと見つめていることに気づいた。

「……アトリ、わからないの？ ニュースとか見てないの？ このおつかやん、防衛大臣さんだよ～」

「え？ 防衛大臣……？」

言われてみれば、確かにテレビで見たことがあるような……。
だけど、その防衛大臣さんが、どうしてこの大型モニターに映つているのだろう？

「アトリくん、この会社は日本政府と密に連絡を取つていいんだよ。宇宙人からの侵攻もありえるということから、防衛省が主導して対

策を練つてゐる。政府に緊急性の高い情報が届くと、そちらに各国首脳へと連絡が行く、という感じのネットワークになつてゐるんだけどね。ともかく、日本国内では防衛大臣に主導権があるんだよ」「もつとも、防衛大臣の権限は警備行動までだから、実際に防衛のため自衛隊を出動させるといった直接行動を決定する権限は、総理大臣にしかないんだけどね」

雷鳥さんとヒバリさんが続けざまに解説してくれた。

「……入社時にも説明されたはずだけどな」

セキレイが呆れ顔でそつとぶやいていたけど。

ともかく、会社と防衛大臣さんとのつながりといふのはわかつた。でも、その防衛大臣さんがどうして、この部署のモニターに映し出されたのか、その理由まではわからぬ。

政府側との連絡というのは、会社の上層部とのあいだでやり取りされるはずなのに。

ぼくが疑問を浮かべているあいだも、防衛大臣さんは怒鳴り声をまき散らし続けていた。

「各国の首脳陣からも、再三再四、どうなつてゐるのかと通信が入つてきてるんだぞ！ なにかしらの対策を打ち出さなければ、リバーシブル・アースを主導していいる国として、示しがつかん！ 早急な返答を求むぞ、神仙寺くん！」

「……所長さんに対する文句のようですね」

「ええ、それに、わたしたちの声や映像は届いていないみたい」

ぼくのつぶやきに、ヒバリさんも言葉を重ねる。

「つまり、緊急時用の全モニターへの映像送信モードになつていてことだね。政府側からは、そういう通信もできるようになつていいはずだから。きっとあの防衛大臣さんが、焦つてボタンを押し間違えてしまつたんだううね」

雷鳥さんが冷静に分析する。

この人の場合、普段から微かに笑つてゐるような表情だから、優しい声質で丁寧な言い方をしていても、ちょっと嘲笑気味に思えたりするのだけど。

ともかく、この雑森支社にあるすべての大型モニターに、今あの防衛大臣さんのビデオが映つてゐるということのようだ。この通信方法の場合、返答できるのは所長室だけらしい。

「ああ、これはこれは防衛大臣殿、お待たせしました。ちょっとトイレに行つてしましてね。それで、どうこいつた用向きですかな?」

映像には映らないけど、突然所長さんの声が響いた。

おそらく所長室から通信を返しているのだろう。

それにして、あの怒り心頭な状態の大臣さんに、そんないつもどおりの、のほほんとした口調で応答するなんて。

「ちよ……、神仙寺くん!　この非常時に、いつたいなにをそんなにのんびりしておるのだね!　?　キミがそんなふうだから　」

ぼくの予想どおり、火に油を注いだよつて、防衛大臣さんは顔全体を真っ赤に染める。

その怒声に対する所長さんの答えは　なかつた。

「神仙寺くん！　聞いていいのかね！？」

「ん？　ああ～、ちょっと爪を切つておりましてね」

『そんなこと、あとでやれ~~~~~！』

防衛大臣さんの声と、ぼくたち第三十八対策執行部の面々の声が、不覚にもピッタリと重なるのだった。

終始防衛大臣さんの怒鳴り声だけが響いていた感じではあったものの、通信は終わった。

通信の結果としては、もう少し待つてくださいな、と言つ所長さんに対し、可能な限り早く事態を收拾し、と防衛大臣さんが命令調の言葉を放つて締めくぐられた。

相変わらず、のほほんとしている所長さん。

でも、防衛大臣さんがあんなにも怒り心頭で通信をしてきたのだから、さすがにどうにかすべきではないのだろうか？

もちろん所長さんにだつて、考えはあるのだろうけど。

とはいえて、新入社員のぼくには、地球の危機とも言ひべき現状に関するして意見するような権利なんかない。

ここは所長さんや、頻繁に会議をしているビバリさんや畠鳥さんといった、立場が上の人たちに任せておけばいいのだ。

ぼくはそういう結論づけ、今やるべき仕事へと頭を切り替える。

事態は、まったく変わる気配がない。

レベル2の宇宙人警報が発令されたまま、神素の放出は続けられ、昼間の空は常時七色に光り輝いている。

いつたいいつまでこんな状況が続くのだろう。

ぼくはそろそろ、清々しい青空が恋しくなつていた。

清々しい青空を拝むことができないまま、さらに数日が経過した。日曜日。今週も土田のつち一田だけの休みだった。

ぼくがこつものよひの、こつもの食堂に足を運ぶと、こつもせりサンブルワインドウを食に入るようて眺める女の子がいた。
もちろん、ホトトギスだ。

いつもと同じように、まだれを垂らしながらサンブルワインドウにかぶりつく彼女。
相変わらずだった。

「おはよう、ホトトギス」
「あっ、おはようだわさー。お食事の時間だわせー。こつもありが
とうー。」

……完全にたかられているのも、相変わらずだ。

とはいって、それでも全然構わなかつた。
美味しそうにご飯をほおばる彼女の笑顔が、なによりも心地よく
感じていた。

ぼくはいまだに、彼女の連絡先を知らないままでいる。
だから、こいつしていつも食堂に来るのだ。
そこではいつも、ホトトギスが待ってくれていた。

彼女の言葉だけ聞くと、単じご飯田当てなだけ、ところづぶりに
か思えないけど。

でも最近の彼女は、それを楽しみにしてくれているみたいだった。

そして食事のあとは、ぼくと一緒に散歩を楽しむ。つまりは、デート、ということになるのだわ。

もつとも、ホトトギスがそういうつもりでぼくと一緒にいてくれているのかは、いまいちよくわからない。

だけど、笑顔を浮かべてぼくにいろいろと話しかけながら散歩する彼女の様子を見ている限り、嫌われてなんていはないのは確かだ。

二十一歳にもなつて、なにを思春期の小中学生みたいなことを、なんて思われそうだけど。

それでもぼくは、今まで充分幸せだった。

「もー……んみゅ？ もぐ……どうか、したかや？ ……むぐむぐ」

ホトトギスは首をかしげながら、ぼくに不思議そうな視線を向けている。

食べながら喋るのは直つていなし、彼女のほっぺたにはじ飯つぶがくつづいているし。

ああもう、いつもどおりだなあ、この子は。

食堂に入ったぼくたちは、すでに注文も済ませ、サバの味噌煮定食を食べていた。

彼女とぼくは、いつも同じメニューを注文している。

ホトトギスが自分で決めないから、ぼくが同じものを頼んでいるのだけど。

彼女と同じ味を楽しんでいると考えただけで、なんとなく幸せなのだ。

「ん……。ホトトギスの食べる姿は、いつもながら豪快だなあ、って思つてさ」

「ぶふつ！」「ほほほほっ！ ちょっと、人の食事姿をのぞき見てる
んじゃないだわさ！ それになんのかや、豪快つて！？ こんな
可憐で清楚なあちきに向かって！」

ぼくの声に、いろいろとシッ ハビリの満載なセリフを吐いて答
えるホトトギス。

いやまあ、もちろん吐き出したのは言葉だけではなくて、口の中
のサバやらご飯つぶやら味噌汁の具の豆腐やらなんかも同時にまき
散らされていたわけだけど。

そんなのもすでに慣れてしまっていた。

……この子は、せめて口に手を当てるとか、じょりと思わないの
だろうか。

ま、いきなりあんな感想を述べたぼくにだつて責任はある。
というか、最近ではホトトギスの食事中にわざとしゃべった言葉
をかけていたりもするのだけど。

彼女のいろんな表情を見られるのが、楽しいのだ。

ぼくの言葉に対する反応は、焦つたり怒つたり笑つたり恥ずかし
がつたり、様々で実に面白い。

「またたくもう、アトリつてば、変な人だわさ！」

口を尖らせながらそういう言い返してくるホトトギスも、充分、変な
人だと言えるだろう。

とはいえ、それはそれで構わない。

人と変わってるというのは、個性的だとも言えるのだから。

彼女の場合、かなり突飛すぎる部分もあるかもしれないけど、そ
れを言つたら、ぼく自身も変わり者なのは否めない。

変わり者同士、仲よくやつていければいいや。

ぼくは、そう考へながら、再びホトトギスをじっと見つめる。

「人が食べるのなんて見てないで、アトリも早く食べるだわせ！
とにかく、お返しにあちきもアトリが食べる姿を、じつと見つめちゃるだわせ！」

そんなことを大声で叫ぶ彼女の脣からは、またもや、飯つぶが飛び出していくのだった。

食堂を出ると、寂れた商店街を歩くのが、ぼくたちのお決まりのコースだった。

毎回同じコースだし、失礼かもしれないけど大したお店もない寂れた商店街だから、ホトトギスが楽しんでくれているのか、若干心配ではある。

たまにはちょっと遠出して、ディズニーランドとかにでも連れていくてあげようかな、などと思わなくもないのだけど

ただ、レベル2の宇宙人警報がいまだ解除されないままという現状。空は神素に包まれ、七色に輝き続けている。

ぼくの場合、仕事の関係上、この雛森町から離れるといつわけにはいかない。

なんにもない田舎町だから、おのずと散歩コースとして選択できるのは、商店街か、公園か、疲れるだけかもしれない雛森山か、その程度しかなかつた。

ホトトギスはショーウィンドウをぽけーっと眺めて居るのが好きみたいだ。

もつともこの町の場合、そのショーウィンドウだって、薄汚れていて地味な商品がちりぢりと並べられているだけだったりするのだけど。

それでも彼女が楽しめるのならばと、ぼくは散歩コースとして商店街を選ぶことが多かった。

今日もじみ分に漏れず、人通りもまばらな商店街をホトトギスとふたりで歩いていた。

と、そのとき。

前方から見知った男女が歩いてくるのに気がついた。

あっ、あれは。

すぐに向こうもぼくたちに気づいたようで、明るく声をかけてきた。

「やあ、アトリくんじゃないか！ こんなところで、奇遇だねえ！」

軽い口調で声をかけてきたのは、男性のほう。

それは同じ会社の社員であり、数日前に医務室でも会つた、純さんだつた。

「おや？ 連れもいるみたいだな。デート中だつたか」

もう片方の女性も、落ち着き払つた声を上げる。

「おひらは、保険医のテルリンだ。

「おお、そうだったのかあー。いやあー、邪魔をして悪かつたかな

「？」

それに合わせて、純さんがさうに言葉を重ね、いやにいやと笑顔を向けてくる。

「いや、その……、べつにいいじゃないですか！　といふか、そつちこちおふたりで、『データ』中でしたか？」

「違う。ただの買い物に出しだ」

即答するテルリン。

なんだかちょっと、純さんが涙を堪えているようにも見えたけど。「もつとも、もう終わつたが。今日はこのまま社員寮に帰る予定なんだがな」

「ぼくは結局荷物運びだけですか……」

純ちゃんがぼそりとつぶやく。
なるほど、そういう関係ですか。

きよとん。

ふとホトトギスがぼーかーっとこちらを見ていこうとしている。おひと、やうだつた。

「あつ、『めん、ホトトギス。』『ちう、同じ会社の人たちで、純さんと保険医のテルリンだよ』

「ほむん。えつと、あちきはホトトギスだわさ。アーリの、えへつ
と、お友達？　だわよ」

ぼぐがふたりを紹介すると、ホトトギスも自己紹介を返す。
でも、そこでハツとなる。

そうだった、会社では「コードネーム・ホトトギスとして、宇宙人かもしれないっていう話になってるんだっけ……。

ちらりと、ぼくは純さんとテルリンの様子をうかがつてみた。

「へえ～、ホトトギスちゃんか、可愛い名前だね！　ぼくは東屋純、よろしくね！」

「ウチは照葉樹林、通称テルリンだ。よろしくな」

「あ～っ、よろしくだわさー！」

どうやら、とくに気にしていないようだ。
と、不意にテルリンがぼくの袖をつかみ、道の脇まで引っ張り込んだ。

「ちょ……、テルリン、どうしたんですか？」

「あの子、噂の……？」

あ……やつぱり気づいてはいたんだ。

「え～っと……、はい」

ぼくは観念して素直に答える。

「そうか。普通の女の子だな」
「はい」

もちろん、そうだ。宇宙人だなんて、そんなバカなことがあるはずはない。

「よし」

テルリンは頷きひとつ。
首をかしげるぼくに向かつて、続けていつ言った。
「せつかくのデートだ、上手くいくよ」と、ウチが手伝つてやるわ」

テルリンたちと別れ、ぼくとホトトギスは散歩を再開した。といつても実際のところ、テルリンと純さんのふたりは、隠れてぼくたちについてきている。

テルリンは、手伝つてやる、なんて言つていた。でもべつにぼくはそんなこと望んでもいないし、だいたい見られていたら落ち着つかない。だから断つた。

それなのにテルリンは、「まあまあ、そりゃうな。任せておけばいいのだ」と聞く耳を持たなかつた。

ぼくはため息をつき、諦めて放つておいたのだけど、彼女たちはしつかりとついてきているようだつた。

しかも、一応隠れているみたいではあるものの、さつきからテルリンの髪の毛がチラチラと見えている。

純さんは純さんで、どう考へても面白がつてついてきているだけだろうし、テルリンの暴走を止めてくれるような期待はできない。

「わ～、あのケーキ、美味しいそだわさ～！」

食後すぐだといつのに、ホトトギスはケーキ屋のショーウィンドウにかぶりついて、よだれを垂らしていた。

今さつき食堂を出るときに、「ふ～、おなかいっぱいだわせ～。もうなにも食べられないだわよ」なんて言つていたはずなのに。女の子の場合、甘いものは別腹なんだうけれど……。
ともかくこじま、いつ言つ以外、ぼくの選択肢はなかつた。

「買つてあげるよ」

「ほんと? ありがとだわぞー。」

ぼくの言葉に、ホトトギスは満面の笑みを向けてくれる。

ほわんと、温かな気持ちに包まれる。

彼女の笑顔を見るためなら、ぼくは悪魔にも魂を売るかもしれない。

大した品揃えもない、小ぢんまりとしたケーキ屋に入り、ホトトギスが選んだショートケーキをひとつ買う。

「アトリは、食べないのかや? あちきのを、半分こ?」

ちょっと不満を含んだような表情で問いかける彼女。

「いや、ぼくはおなかいっぱいだから。これはホトトギスが全部食べていいくからね」

「わーい!」

ホトトギスは素直に喜びを全身で表す。

正確な年齢も聞いてはいけないけど、見た目からすれば十代後半、おそらくは十八歳前後と思われる女性だとはどうていえない、あどけない様子だった。

たつたひとつだけのケーキだけど、それを紙の箱に入れ、さら込んでいたりしないように紙製の仕切りを詰め込む店員さん。

箱の上部にある取っ手のようになっている部分を持ち、ぼくはなるべく斜めにしないよう気をつけながら歩く。

隣に寄り添うホトトギスは、じーーーーーーーーとその箱を見つめていた。

ああもう、またよだれ垂らしむし……。

「うへ、あちき、我慢できない。すぐにケーキ食べたいだわ」

「ふん、まあ……。言葉に出して言われなくても、彼女がそう考えているのは、丸わかりだった。

ふと視線をずらすと、曲がり角にある建物の陰からテルリンが顔を出していった。彼女のすぐ横には、純さんもいる。

そして、なにやら身振り手振りでぼくに云々よつとしているみたいだった。

テルリンが右手になにかを持っているような感じで、それを大きく開けた純さんの口の中に……。

つまり、ぼくがケーキを持って、ホトトギスに食べさせてやれ、と?

そんな恥ずかしい」と、できないうてば!

……とはいえ、考えてみたら、他に方法はないかもしねない。すでにホトトギスはぼくからケーキの箱を奪い取り、フタを開けて右手を突っ込もうとしていたのだから。

彼女が手づかみで食べ始めたら、どんな汚い食べ方をするか、わかつたもんじやない。

もちろん、そんなことを口に出して言ひたりはしないけど。

「あへ、ホトトギス、ストップ! ぼくが持つてあげるよ」

そう言つて、彼女からケーキの箱を奪い返す。

おもちやを取り上げられた子供のように怒りの顔を向けてくる彼女の口もとに、ぼくはショートケーキの尖っているほうを差し出す。

ぱくつ。

ぼくがつかんでいたショートケーキに、笑顔でかぶりつくホトトギス。

なんだか、いつのまゝが恥ずかしくなつてくる。

「うは～、美味しいだわさ！　スウィートドリシャストレボントレービアンだわよ！」

……甘くて美味しいで、とても美味しい素晴らしい？

とりあえず満足してくれているのは、よく伝わってきた。でも、ぼくがケーキを持つてあげていても、彼女の食べ方はあまりお上品とは言えず。

生クリームが口の周りにベッタリとくっついていた。

ハンカチを取り出そうとポケットに手を入れようとして、再び建物の陰から顔をのぞかせるテルリンがまた、なにかジョスチャーを……。

テルリンが純さんの顔に自分の顔を近づけ、舌を出してペロリと、純さんの口の周りを舐めるような仕草を……。

つて、そんなこと、できるわけないってのー

ハンカチを取り出して、拭いてあげよう。そう考えながら、手をポケットの中に滑り込ませる。

……
ぼくの指先がつかんだのは、ポケットの内側の布地だけ……。

しまつた、ハンカチ持つてくるの、忘れてた……。

だけど、いくらホトトギス本人が気にしていなさそうだとはいえ、口の周りを生クリームまみれのままにしておくのも、問題だし……。

やつするといひは、テルリンの希望どおり、舌で舐め取るしかないのだろうか……。

じつと、ぼくはホトトギスを見つめる。

彼女は口の周りを生クリームだらけにしながらも、ちゃんと首をかしげ、ぼくを見つめ返してきた。

か……可愛い……。

で、でも、さすがに、口の、周りを、舐めるだなんて、そんなこと……。

真っ赤になつて心の中で焦りまくつて、ぼくだったのだけビ。すぐに気がつく。

べつに舌で舐め取る必要はない、といひことに。

彼女がぼくの持つているケーキの最後のひと口を食べ終えると、ケーキを包んでいた紙を丸めて箱の中に捨てる。

ぼくはすかさず、すつ……と右手を差し出し、人差し指でホトトギスの口の周りを拭つていく。

微かに触れる彼女のやわらかな唇の感触にどきまきしながらも、ぼくはくつついていた生クリームを綺麗に拭き取ることに成功した。まだちょっと残つてはいたけど、それくらいなら彼女自身が自分の舌で舐め取るとか、自分の手で拭うとかするだろう。

「あ……ありがとだわさ」

「いえいえ」

こんなの、いつもの盛大な吹きこぼしに比べたら、大したことないしね。ぼくはそう心の中でつけ加えていた。

うへん、だけど、指で拭つた生クリームは、どうしようか。ハンカチもティッシュもないし、服で拭うわけにもいかないだろう……。

…。

建物の陰からは、またもやテルリンがなにやらジエスチャーをしていた。

彼女は自分の人差し指を、ぱくつとくわえた。

つまり、ホトトギスの口の周りについていたその生クリームを、食べちゃえ、と。

だから、そんなこと、できないうてば！

あっ、そうか。箱の中に捨てた紙とか箱自体とかで、拭い取つてしまえばいいんだ。

と、ぼくが思い至った、その瞬間。

ぱくつ。

突然ホトトギスが身を屈めたと思つたら、ぼくの人差し指にしゃぶりついてきた。

「わっ！？」

さすがに驚いて、そして恥ずかしくて、でも右手を動かすこともできなくて、ホトトギスの成すがままのぼく。

彼女のやわらかい舌が指に絡みつく感触で、ぼくの顔は火が出そうなほど真っ赤になつていた。

ホトトギスはペロペロと舌を使ってぼくの指を舐める。

というか彼女は、ぼくの指についた生クリームを舐めているわけだけど……。

建物の陰から顔を出しているふたりが、生温かい笑顔をこぢらに向けていた。

うう、恥ずかしい……。

そんなぼくの思いなんて考えもしないのだろう、ホトトギスはぼくの指から口を離してその身を起こすと、

「ケーキは全部、あちきが食べていって約束だったからねん。残しちゃつたらもつたいないだわさー。」

満足そうな笑顔で言い放つのだつた。

そのあとも、ぼくとホトトギスは商店街をひとしきり歩き回った。
もちろんずっと、テルリンと純ちゃんは隠れてついてきて
いたわけだけだ。

ともかくぼくたちは、ソフトクリームを買つために町に一軒だけ
ある「コンビニ」と足を運んだ。

それにしても、まだ食べるんだ、ホトトギス……。

歩き回ったとはいってもこんなに狭い商店街だし、サバの味噌煮
定食とショートケーキを食べてから、まだ三十分程度しか経つてい
ないというのに。

と言いつつ、今回はぼくの分も買つてあつた。

べつに、それほど食べたかったわけでもないのだけだ……。

「コンビニに入つてソフトクリームを買おうとしているので、
入り口付近からのぞき込むテルリンのジョスチャーが見えた。
そのジョスチャーは、「ひとつだけ買つて一緒に食べろ」と語っ
ていた。

そんなこと、できないって!

というわけで、ぼくはふたつのソフトクリームを買つてコンビニ
を出た。

コンビニから出たぼくたちは、公園へと向かつ。ベンチに座つて
アイスを食べよつといつことだ。

休日の公園では、子供たちが無邪氣で元氣なはしゃぎ顔を上げて
いた。

そんな中、ぼくとホトトギスは並んでベンチに座る。

「はい、ホトトギスはストロベリーチョコレートクスソフトだよね。で、ぼくせこひちのバニラソフトだと」

ビニール袋からソフトクリームを取り出すと、片方をホトトギスに手渡す。

クリームの部分にわざわざコーンでフタをしてあつたそのソフトクリームに、ホトトギスはそのままかぶりつく。こつものことながら、田にも畠まらぬ早業だ。

ぼくもバニラソフトの上にかぶせられたコーンを、一気にたいらげる。

まだ春とはいえ、五月も近づくと、それなりに汗ばむ陽気の田も増えてくる。

絶好のソフトクリーム日和と言えるだね。

と、突然ぼくの視界に影が割り込んできた。

それは、ホトトギスの頭だった。

ぼくが田の前に持っていたバニラソフトに、ぱくりとかぶりついたのだ。

「ん~、バニラも美味しいだわさー。」

「こ……こら、ホトトギス！」

「あっ、代わりにあちきの、どひだ！」

困惑するぼくの田の前に、彼女は自分の舐めていたストロベリーチョコレックスソフトを差し出してくる。

もちろん彼女は、全体的にペロペロ舐め回して食べていたのだから、ぼくがどこからかじりついても、間接キスということに……。

ま、まあ、それくらい、べつに、戸惑ひよつね、ことでも、ない

よね。

とかなんとか、頭の中でしつかり焦りまくしながら、ぼくは彼女の差し出したソフトクリームにかぶりつく。ドロドロにとろけた食感が、口の中に広がる。ボクの食べていたバーランフトはまだ、そんなに溶けていないというのに。

「ストロベリーとチョコとバニラと、三つの味を楽しめてお得な感じ

じ

ホトトギスはそう言って、『満悦の様子。

ぼくのほうとしても、ある意味お得な感じだったのは確かなので、なにも文句なんてない。

気づけば植え込みの陰から、テルリンと純さんが生温かい表情でこちらに顔を向け、親指を立てて「グー」の合図を送っていた。

ソフトクリームを食べ終えたぼくとホトトギスは、そのままベンチに座つてゆっくりとしていた。

噴水の音が静かに響く。

辺りの景色はそろそろ、夕焼けによつて赤く染まり始めていた。いい雰囲気、といふことになるのだろうか。

いつのまにか、植え込みの陰にいたはずのテルリンと純さんの姿も見えなくなつていた。

さすがに気を遣つて、帰つたのかな？

まあ、あのふたりだつて、いつまでものぞき見ているほど贅沢じゃな

いだらう。

並んでベンチに座つてゐる男女ふたり。

腰の横でベンチに両手を置いてゐるぼくとホトトギスの手のひらは、今にも触れ合つべからこの至近距離にあつた。

「あ……あのや、ホトトギス」

「んみゅ？ どうしたかや？」

ぼくの声に、こつものよつに少しだけ首をかしげて見つめ返してくる彼女。

夕陽の赤さは、彼女の瞳や頬をも、美しく染め上げていた。
思わず目を逸らしてうつむいてしまつ。

「ん～？ アトリ……？」

ホトトギスは首をかしげたまま、ぼくを見つめ続ける。

「あ、あのや、ホトトギスつて」「

じこに住んでるの？ 離森町のどこがだよね？

学生さんなの？ それとも働いてるの？

どうしていつも、おなかをすかせてるの？ じこ親は？

……聞いてしまつたら、悪いかな？ でも、知りたいんだ。

それと……、

ぼくのこと、どう思つてるので？

聞きたいことの洪水が頭の中をものすごい勢いで流れていったものの、のどもとでせき止められてしまい、結局ぼくの口からは言葉の波が溢れ出ることはなかった。

と、唐突にぼくでもなくホトトギスからでもない言葉の波が、背後から押し寄せてきた。

「だ〜、もう！…じれったいな！…アトリ、おまえそれでも男か！？」

それはもちろん、テルリンだった。その横には純さんもいて、首をすくめていた。

どうやらふたりは、ベンチからも見える植え込みの陰から、ベンチの背後にいる芝生へと場所を移動し、隠れてぼくたちの様子をうかがっていたようだ。

「ふたりとも、なにをしてるんですかーー？」

ぼくは思わず立ち上がり、ふたりに向かつて怒鳴りつけていた。そんなぼくに、テルリンはさりに声を荒げてしまふし立てる。

「こたない雰囲気だというのに、なにをもたもたしているのだ、おまえはー！…もつとくつつけ！…キスしてしまえ！…といつか、その先まで……！」

「ちょ……、なにを言つてゐるんですかーー？」

焦るぼく。

だいたい、ホトトギスもすぐ横にいるわけだし。
ちらりと視線を向けてみると、彼女はなにがなんだかわからず、おどおどしているようだった。

「そつすれば、非常通信がだな……、つー！」

そこまで言つて、テルリンはハツとして自分の口を押さえた。

でも、もう遅い。

非常通信……。彼女は今、確實にそう言つた。

ぼくは以前セキレイから、宇宙人は強い感情によって非常通信が発動すると考えられている、ということを聞いていた。

ホトトギスが泣くと宇宙船に通信が届いて、侵略が開始されるかもしれない、といった可能性があるという話だった。

だけど、強い感情といったら、なにも泣くことだけではないだろう。

恋愛感情だって、激しい感情のひとつだ。

つまり。

「テルリン、あなたは彼女が宇宙人だって前提で行動してますね！」

ぼくの指摘に、テルリンは唇を噛みしめて口をつぐむ。どうやら図星のようだ。

そうすると彼女は、以前に聞いた、会社内に発生しているという三つの派閥の中のひとつ、「泣かすなら、仲よくなろう、ホトトギス」を唱える、友好派だとということになる。

彼女とともに行動しているのだから、おそらくは純さんも同じ派閥なのだろう。

テルリンと純さんは、ぼくとホトトギスを無理矢理にでもいいからくつづけて、宇宙人たちと友好関係を結ぶ布石にしようとしていたのだ。

「でもそんなこと、させないわよ～う」

「そういうことだ。仲よくするのは悪いことじゃないが、軽率な行

動は慎むべきだ

不意に声が増える。

ぼくが振り向くと、そこにぼゆりかもめとセキレイが立っていた。

「え？ どうしてここに……？」

「所長さんから言われてな、隠れて見ていたんだ。テルリンと純さんの行動が、なにかおかしい。そのことに所長さんは気づいていたのさ」

セキレイはぼくの問いに素早く答えを返す。

テルリンと純さんは観念したのか、黙つてつむぐのみだった。

「べつに所長さんはおふたりを罰するとか、そんな気はないんです。だから、なにも言わずに、このまま帰つてください」

ゆりかもめが、いつも彼女からほびの慈愛に満ちた声で促す。

テルリンと純さんは黙つて頷き合ひつと、そのままきびすを返し、言われたとおり公園を出ていった。

「……任務は終了だ。アトリ……、またな」

「えへつと、その……。ううん、なんでもない、また明日、会社でね」

セキレイとゆりかもめも、それだけ言つと公園を去る。

あとには呆然としたままのぼくと、もつとわけがわからないであるホトトギスのふたりだけが残された。

突然自分の名前が出て、そして宇宙人がどうのいの、といった

話が田の前で展開されていたのだ。

ホトトギスが混乱するのも当然だらう。
ぼくはそつと、彼女の肩を抱き寄せる。

「気にしないでいいよ、ホトトギス」

「……うん……」

夕陽はいつのまにかその姿を隠し、周囲はもう、すっかり薄闇に包まれていた。

しばらく寄り添つたあと、ぼくたちも公園を出た。
送つていいくよ。

その言葉にホトトギスは首を左右に振り、いつもと同じように後ろ姿を見せると、ぼくの前から去つていった。

テルリンと純さんが引き起こした一件から、一日が経つた。
あれから、ふたりにはとくに変わった様子もなく、通常どおり勤務しているようだった。

友好派の派閥全体としてどうなのがはわからない。
テルリンも純さんもなにも語ろうとはしないから、ふたりが勝手に行動しただけなのかもしないし、そもそもそういった派閥に属して上からの指示で動いたりする立場だつたのかもわからない。
でも、所長さんもとくに咎めるつもりはないという話だつたし、ぼくとしてもあまり気にしないほうがいいだろうと考えている。

そんなわけで、若干もやもやした思いが残りつつも、ぼくは自分の仕事をこなしていた。

長々と続く宇宙人警報レベル2の状況に、サイレンを鳴らし続けるのもじるさいからなのか、今ではすでにサイレンの音量も下げられ微かにしか聞こえない。

と、唐突に大型モニターがオペレーターの女性を映し出す。

「すべての部署に連絡です。しばらく続いていた宇宙人警報レベル2ですが、たつた今、解除されました。すみやかに終了フェーズへと移行してください。サイレンの音量も戻し、終了フェーズの音を鳴らし始めます」

「その通信のあとすぐに、終了フェーズを告げる静かなサイレンが、通常どおりの音量で流れ始めた。

「ありや、終わつたんだね。超絶突然で、びっくりだよ～！」

ゆりかもめが、若干困惑しながらも、ぱっと笑顔になつてはしゃいだ声を上げる。

「やうだな……。いやー、今回は長かった」

セキレイも大きく伸びをしながら、安堵の息をついていた。
もちろんぼくも、やつのんびりとした気分に戻れることを心から嬉しく思っていた。

小さい音量に下げられていたとはいえ、ずっとけたたましいサイレンが鳴りっぱなしでは、ビリビリして緊迫感が漂つてしまつただから。

ぼくもゆりかもめもセキレイも、ぐつたりと机に突つ伏した。
なんか、一気にだらけてしまつた気がする。

「みんな、お疲れ様～！」
「長々と、よく頑張ったね」

しばらぐあるヒドアが開き、ヒバリさんと雷鳥さんが部署に入ってきた。

その表情は実に晴れやかだった。

ふたりとも、ここしばらくは残業続きで、会社から近い社員寮暮らしがいえ、ぼくたち下つ端と違つて休みすらなく出勤していたのだ。ぼくたちにも増して、ホツとしているに違いない。

「所長さんからお許しが出たわ。明日からは今までの分、代休を入れてしまふといいわよ。もちろん、誰かひとりは出社するようにして上手く調整してほしこけど」

「やつた～！ 思いつきり、寝るぞ～う～！」

ヒバツセの言葉に一番はしゃいだ声を上げたのは、ゆりかもめだった。

「一田中寝るつもり?」

「あつたじまえじやん!」

「……そうですか……」

さすがは、なまけ者のゆりかもめだ。なんて言つたら歯みつかれるかな。

「アトリ、お前はどうするんだ?」

「ぼく? うーん、そうだな……」

セキレイの問いかけに、ぼくは思考を巡らせる。

やつぱつ、ホトトギスと一緒に出かけたいな。

あ……でも平田だから、余裕があるとできないか。連絡先、知らないしな……。

もしかしたらアトリもあるし、とつあえず食堂とか商店街の辺りでも、つらうわしてようかな。

そんなぼくの顔を見て、なにを考えているのか推測できたのどうか、

「あの子こ、会って行くのか?」

セキレイはそう続けて問い合わせてきた。

「ふんつ。しないだだつて一緒にいたじやん。超絶いやうじんだか

なにやら不機嫌そうな顔で、ゆりかもめが突つかかってく。

「いやらしくして、なんだよ。べつにほんばは……」

彼女に言い返そうとして、言葉に詰まる。ゆりかもめは黙つたまま、じとーっとした視線を向けていた。

「まあまあ。とにかく、休みを入れる日を三人で調整すること。おれとヒバリさんも、そのスケジュールを見て代休を入れさせてもらうから」

さすがに見かねたのだろうか、雷鳥さんが穏やかな声で話に割り込んできた。

「はい。わかりました」

ぼくたちは言われたとおり、代休の調整を始めた。

そしてぼくは、その次の日に早速休みをもらつた。

毎近くに起きていつも食堂へと向かつと、平日だといふの、ホトトギスの姿があつた。

もちろんいつもどおり、サンプルウェインドウにかぶついて、まだれを垂らしながら。

「ホトトギスは、毎日ここでぼくを待ってるの？」

さすがにうぬぼれかも、とは思いつつも、やつ詫かずにはいられなかつた。

「んみゅ？ そんなことないだわ。たまたまあちきがこの食堂に来るど、いつも決まってアトリが来てくれるんだわさ。……もしかして、アトリがあちきのことストーカーしてるんじゃ、なんて思つたりもしたけど……、違うよねん？」

「そんなこと、あるわけないよ。そっか、でも、そういうと」

「ぼくたちってすごく相性がいいのかかもしれない。
やう言おうとして、ぼくは言葉を呑み込んだ。

こぐらなんでも、恥ずかしすぎたから。

途中で言ひのをやめたぼくを、いつものように首をかしげて見つめるホトトギス。

「ああ、やつぱり可愛い……。

「や…… やあ、早く入って、『飯ごじょひー』
「うふ、やつするだわさー！」

恥ずかしさを紛らわすため、ぼくは勢いよく年季の入った木製の引き戸を開けると、食堂へと足を踏み入れた。

もちろん食堂では、

白身魚定食をほおばるホトトギスが、ぼくの言葉に大口を開けて答えを返し、
『飯つぶやら白身魚のフライやりひれん草のおひたしやらを盛
大に口から吹き飛ばし、

まくの顔やらお膳の上やらびぶちまける、
といった、そんな日常のひとコマが展開されるところになつたわけ
だけだ。

いつもじめうつてこつのは、やつぱりいいものだよね。
……若干、食堂のおかみさんに引かれているような気がしなくも
なかつたけど、まくはべつに気にしないのだった。

食事を終えたぼくたちが、いつもおり商店街を軽く歩き回った。今日は比較的早めに食堂に行ったこともあり、まだ時間は一時前。せつかくだから、雛森山まで足を伸ばそう。ぼくはそう提案してみた。

山を歩くことになるし、嫌がるかなとこつ思つもあつたのだけど、ホトトギスは笑顔で頷いてくれた。

というわけで、ハイキング気分で山道を歩く。

山道とはいっても、ぼくにとっては出勤するたびに通つてゐる、慣れ親しんだ道。

ぼくには、上り坂を歩きながらも、ホトトギスを気遣つ余裕があつた。

「朝通ると鳥たちの声が響いたりして、とても清々しいんだけどね。昼間だとちょっと暑いかな。ホトトギス、大丈夫？」

「んみゅ、大丈夫、だわさ。これくらい、へっちゃら、だわよ」

答える声は、息も荒く、途切れ途切れ。強がつてゐるだけだとうのが、丸わかりだ。

やつぱり女の子には、ちょっとつらこんだな。

ぼくはそつとホトトギスの手を握り、歩調を彼女に合わせながら先導する。

ほじなく、汗ばみながら歩くホトトギスにも、景色を楽しむ余裕が出てきたようだ。

「うわー、町があんなに小さく見えるだわさー。それに綺麗なお花がたくさん咲いてるだわよー。」

「うん、いい景色だよね。空気も澄んでるし、今日みたいに晴れて暖かな日つて、ほんとに気持ちいいよね」

嬉しそうに景色を眺めているホトトギスを、ぼくは温かな気持ちに包まれながら眺めていた。

長いあいだ続いていた宇宙人警報が解除され、神素の噴出も止まり、久しぶりに自然な空が顔を出している。
まぶしいほどの青空が、ぼくたちを歓迎してくれているかのように包み込んでいた。

雨が降っていたりすると、この辺りは涼しく……というよりも冷たいと思つくらいにまでなつてしまい、歩くのも困難になるのだけど。

「あっ、なんか建物が見えてきただわさ」

ふとホトトギスが山の上のほうを指差しながら言った。

「あれが、ぼくの通う会社だよ」

いつも通っている山道を彼女とふたりで歩いてきたわけだから、会社の建物が見えてくるのも当然だつた。
べつに会社を見せたいと思つて連れてきたわけじゃなかつたけど、
雑森山には雄大な自然以外なものない。
ということで自然と、会社のほうに向かつていたのだ。

もちろん、会社の敷地内にまで彼女を案内しようとは思つていない。

ホトトギスがどう思つているのか、いまいちわからないけど、ぼくにとつては気になる女の子とふたりきりでのハイキングなのだ。
会社の人を見られたりするのも、恥ずかしいものがある。

とくに社員寮に近づくのは避けたかった。

今日はゆりかもめも休みを取つて、社員寮でのんびりしているだ
らうから。

なんとなく、彼女と顔を合わせるのは、気まずく思えた。
どうしてそう思うのか、自分でもよくわからないのだけど。

暖かい日差しを受けながら、傾斜が比較的緩やかになる会社の敷
地近くまで、ぼくたちは到達していた。

ここから見下すと、町並みがかすんで見えるほどだ。
ホトトギスがいたこともあり、一時間以上かけて、ぼくたちはこ
こまで歩いてきた。

いつもよりゆっくりだったとはいえ、ぼくでもさすがにちょっと
疲れを感じていた。

小柄なホトトギスのほうは、かなり疲れているのではないだろう
か。

でも彼女は決して泣き言をこぼすことはなかつた。意外と強情な
のかもしれない。

と、突然。

ぼくの手が強く、下のほうに向かつて引っ張られる。
いや、ホトトギスが、倒れたのだ。

「ちよっと……！ ホトトギス、大丈夫！？」

ぼくは屈み込んで、むき出しの地面に身を横たえた彼女に呼びか
ける。

額には汗が玉のよつに浮かび、息も荒く、眉根を寄せて苦悶の表
情。

彼女の肩に手をかけ、優しく揺すってみるもの、ぼくの呼びかけには応えてくれない。

どうじみつ……。

山歩きで疲れただけだけだとは思つけど、様子がおかしいのは確かだ。もしかしたら、病気ということもあるかもしれない。

だけど、ぼくは信じていなければ、彼女がもし本当に宇宙人のスパイなのだとしたら、病院に連れていいくのも問題があるだろうか……。

というより、彼女を抱えて山を下りるなんて、さすがに無理だ。

幸い会社が近い。

先日の件もあるし、気が引ける部分はあるけど、医務室でテルリンに診てもらうのが最良の選択だと考えられた。

ホトトギスの姿を会社の人たちに見られてしまつことになるけど、この際それは仕方がない。

ぼくは素早くホトトギスを抱え上げると、一路、会社の敷地内を

目指した。

「どうでしようか……？」

「うむ、ただの風邪だな。問題ない」

ベッドに横たわったホトトギスを診てくれたテルリンの声に、ぼくは安堵の息を吐く。

「でも、倒れるなんて、風邪とはいえた重症なんですか？」

安心はしたもの、ぼくの心配は消え去ったわけではない。つかみかからんばかりの勢いで、ぼくはテルリンに詰め寄る。

「いや、大丈夫だろ？ もともと風邪気味だったところに疲れが重なって、足に力が入らなくなっていた、という感じのようだ」

テルリンの答えに、ぼくは再度、息をついた。

「もつとも、彼女が宇宙人だとしたら、どうなるかはわからんがな」
せつかく安心したといつのに、テルリンはわざわざ不安材料を投げ込んでくる。

彼女としては、保険医としての意見を率直に述べているだけなのだろうけど。

「ま、そんなに心配するな。大丈夫だ。ちょうど今日はウチが泊まり込みの当直の日だ。このままここに寝かせて、ウチが朝までしつかりと看病してやるわ」

「…………あの……、ぼくもここに泊まつたらダメでしょうか…………？」

ぼくは今日、ホトトギスが風邪気味だつたといつに、まったく気がついていなかつた。

もつと注意深く彼女を見ていればよかつた。

後悔の念が押し寄せ、そう頼み込んだぼくの強い決意を含んだ口調に、テルリンは優しい笑顔を向けてくれた。

「それほどまでに心配しているのだな。ま、ウチは構わないぞ。当直だと見回りもしなくてはならないからな。そのあいだ、彼女がひ

とつりになるのを避けるためにも、キミがいたほうがいいだろ？
「ありがとうございます！」

ぼくは素直に頭を下げる。

夜、ホトトギスは安らかに寝息を立てていた。

「それじゃあ、見回りに行つてくれる。……寝てる彼女に、あんなことやこんなことをしても、ウチとしては全然構わないからな」

「そんなことしません！」

「ふつふつふ、ま、行つてくる」

医務室からテルリンも出ていき、狭い医務室の中にぼくとホトトギスのふたりだけが残された。

テルリンにはあんなふうに反論したけど、可愛らしい寝顔をさらけ出しているホトトギスを見ていると、ついぼくもいけない考えを浮かべてしまう。

寝てるんだし、少しくらいなら……。

つて、ぼくはなにを考えてるんだ！　ダメだつて！

かなりテンパつた思考に顔を真っ赤に染めながら、ぼくはテルリンが戻つてくるのを待つた。

寝間着なんてさすがになかったから、少しでも楽になるように、ホトトギスのブラウスのボタンは、襟から三つめまで外されていた。テルリンはホトトギスをそんな状態にして、心なしかニヤニヤと

した視線をぼくに向かって医務室を出ていった。

布団がしつかりとかかっているから、問題はないと思っていたのだけだ。

暑いのか汗ばむホトトギスが布団を押しのける。そのたびに胸もとが見えかけ、ぼくは慌てて布団をかけ直してあげる。

そんなことを繰り返しながら、ひたすら時間が過ぎるのを待つていた。

テルリン、早く帰ってきて……。そうじゃないとぼく、どうにかなっちゃいそうだよ……。

だけどその願いは、なかなか叶ってはくれず。

結局テルリンが戻ってきたのは、それから一時間後のことだった。

テルリンは徹夜でホトトギスを看病してくれた。

「ぼくもホトトギスを見守ります、そつ言つてみたのだけど、次の日仕事に響くだらう」と諭された。

それを言つたらテルリンもそつなのでは、と反論したのだけど、

「いつも適当に仮眠を取つたりしているからな。どうせここにま、大して人は来ない。いくらでも休憩している時間はあるや」

と笑い返されてしまった。

うへん、会社の保険医として、はたしてそれでいいのだろうか。そんなツッコミを呑み込みつつ、ぼくは空いているベッドで寝かせてもらひことにした。

次の日の朝。

ホトトギスはまだ目覚めていなかつた。

さすがに心配になつたけど、テルリンは呼吸も正常だから心配いらない、と容態を伝えてくれた。

「アトリ、キミには仕事があるだらう、彼女のことはウチに任せて、早く自分の部署に向かえ」

そう言われたぼくは、素直に従つ。

もちろんホトトギスのことが心配ではあつたけど、だからといって仕事を休むわけにもいかない。

宇宙人警報がやつと解除され、今はゆつたりとした、いわば待機状態にある。とはいっても、再び警報が発令されないと限らない。

代休消化のために出社人数が減つていいる今だからこそ、しっかりと自分の役割はこなす必要があるのだ。

「それじゃあ、ホトトギスのこと、よろしくお願ひします

ぼくはそれだけ言い残すと医務室を出る。

そして、まだ朝の涼しさが残る廊下をコシコシと微かな足音を響かせながら歩き、第三十八対策執行部へと向かった。

部署のドアを開けると、そこにはゆりかもめの姿だけがあった。

「あっ、アトリ、おはよー！……うわ、すごい寝グセー！」

彼女はぼくの顔を見るなり、田を丸くしてそう叫んだ。

そういうえば、鏡も見ずに出でてしまった。ぼくの髪の毛は、いつたいどんな状態になっているのだろうか。

おそるおそる頭を両手で触つてみる。

「う、これは、確かにひどい……！」

鏡を見るまでもなく、おそらくスーパーサーヤ人の」とき形状だ
うつと想像できるなんて、どれだけ寝相が悪いんだ、ぼくは…
心配」とがあると、寝相にまで悪影響が出るものなのかもしれない。

だけど今のぼくはそんなことに構つていられるような精神状態で

はなかつた。

テルリンは大丈夫だと言つていたけど、それでもやつぱり、ホトギスのことが心配だったのだ。

「……直さないの？ その寝グセ」

髪の状態に気づいたのに、そのまま席に座つて突つ伏していたぼくに対して、ゆりかもめが心配そうな声をかけてきた。

「……うん、べつにいいや」

ぼくは抑揚のない声でそう答えることしかできなかつた。ゆりかもめも、それ以上、言葉をかけてはこない。ただ黙つて、ぼくのほうを見つめていたようだつた。

やがて、ヒバリさんが部署に入つてきた。

セキレイと雷鳥さんは代休を取つていて、今日は出社してこない。もつともふたりとも社員寮にはいるだらつかひ、緊急事態が起これば駆り出される可能性もあるのだけど。

「アトリくん、ゆりかもめさん、おはよっ」「おはよー」「おはよー」

朝の挨拶だけ交わし、沈黙が続く。

ヒバリさんも、ぼくの様子がおかしいことには気づいていに違いない。

もちろん寝グセでおかしい、ところどころではなく、精神的に落ち込んでいるのを感じ取つてゐるはずだ。

でも、声をかけていいものか、悩んでこる。そういうことなのだから。

上回であるヒバリさんに入ってきたのだからと、さすがにぼくは机から顔を上げ、キーボードに手を置いてモニターに向かっていった。

ヒバリさんは、ゆりかもめにアイコンタクトで、どうしたのかわかる? といったことを尋ねているようだった。

声は出れず、ゆっくりとかぶりを振るゆりかもめ。

ぼくは視界の端でふたりの様子を見ていたけど、自分からはなにも言わなかつた。

しばらくして、ヒバリさんが声をかけてくる。

「アトリーくん。どうしたのかしら? 悩みじとなり、もじょかつたら相談に乗るわよ?」

沈黙に耐えきれなくなつたから、とうわけではなく、自分の部下が悩んでいるのなら力になりたい、といった思いからなのだろう。そんなヒバリさんの厚意を、無下にするのもできない。

「あつがとうござります。実は 」

ぼくは素直に、昨日ホトトギスと会社の近くまで来たところで彼女が倒れ、今は医務室で寝ているところを伝えた。

「……なるほど。つまりアトリーくんは、ホトトギスさんのことが心配で仕事が手につく状態じゃない、ってことね

ヒバリさんの声は、ぼくを責めるようなものではなかつた。それどころか逆に、優しさを多分に含んだ、温かな声だった。

「……」は大丈夫だから、彼女のそばについていてあげたら？」

そんな気遣いの言葉すらかけてくれた。
でもぼくは、甘えるつもりはない。

「いえ、仕事はしつかりしますよ。セキレイも休みだし、油断はできないですから。テルリンが看てくれますから、ホトトギスは大丈夫です、絶対」

それは、自分に言い聞かせているという意味合いでほうが強かつたのかもしれない。

「……強がる必要ないのに」

ゆりかもめが、ぼそりとつぶやく。

ただ、そんな彼女の顔は、苦味を堪えているような複雑な表情をたたえていた。

「わかったわ、仕事、頑張ってね。でも、どうしても気になるようなら、いつでも言って」

一方のビバリさんは、優しくそう微笑みかけてくれた。

業務時間が終わると、ぼくはそれをと部署を出て医務室へと向かつた。

ドアを開けて医務室の中に入ると、ホトトギスの笑顔が出迎えて

くれた。

「アトリ、お帰りだわさー」

「……うん、ただいま」

なんかちょっと違うのでは、と思わなくもない挨拶を交わすぼくたち。

彼女の笑顔の魔法で、ぼくの心はほわんと一瞬にして温まる。そんなぼくに、テルリンが声をかけてきた。

「アトリ、来たな。見てのとおり、彼女の意識は戻った。だが、念のためしばらく安静にすべきだ。もう数日ほど、じりりでゆっくり休んでいいともうひとつもりだ。異存はないな？」

「……はい、わかりました。ぼくもまた、じりに泊まります」

「ああ、わかった」

じりじりぼくとホトトギスは、一田田の医務室の夜を迎えることになった。

ぼくとホトトギスはまた、医務室に泊まることになつたわけだけ
ど。

さすがにふたりきりで泊めるわけにもいかないからか、当直では
なかつたものの、テルリンも医務室に泊まつてくれた。

「今日はウチも寝かせてもらひつもりだが、ベッドはふたつしかな
い。どうわけでアトロ、キミは彼女と一緒にベッドで寝たまえ」
と言われただけで、ひとり用のベッドなのだから、それはいく
らなんでも厳しい。

そんな狭いベッドでホトトギスと密着しながら寝るといつ状況に、
惹かれるものがあるのは確かだつたのだけど。
でも、風邪で倒れた彼女をゆっくり休ませることが先決なのだか
ら、ここはぼくが犠牲になるしかないだらう。

医務室には、小さなソファーも置かれていた。足を伸ばしたりは
できないけど、ぼくはそこで寝ねばいい。
テルリンにそう答へたら、「チッ、つまらん」と舌打ちされてし
まつた。

それはともかく、次の日。

始業時間の十分前に目覚めたぼく。

ホトトギスはこの時間だと、やっぱりまだ寝てゐるようだつた。
といつかテルリンすらも、豪快にいびきをかきつつ眠つていた。

そんなふたりを残し、ぼくは医務室を出る。

今日は一応鏡をのぞき込み、軽く手グシで髪型をセッティングしてきた。

もともと大してオシャレには気を遣わないぼくではあるナビ、昨日の寝グセはさすがにひどすぎたと反省していたのだ。

ぼくは第三十八対策執行部のドアを開けて中に入る。

今日はゆりかもめセキレイも代休を取っているはずだから、もしかしたら誰もいないかも。

そういうながら部署に入つたのだけど、中にはふたつの人影があった。

ヒバリさんと雷鳥さんだった。

「あー、アトロイさん、おはよー」
「おはようヒバリさん」

ふたりとも、すでに席に着いて仕事を始めていた。ぼくもそそくかと自分の席に着き、てきぱきと準備を進めると、作業を開始した。

それにしても、ゆりかもめセキレイが休みだと、上司がふたりに対して部下がひとりという比率になる。
べつにいつもやく言われたりするわけじゃないけど、わざがにちょつと緊張するところが、どうしても気になってしまつ。
そんなふうに考えてみると、

「アトロイさん、ちよつとこいかしらへ。」

ヒバリさんが真面目な表情でいつも尋ねてきた。
顔を上げてヒバリさんのほうに向けてみると、彼女の隣に座る雷鳥さんもぼくをじっと見据えていた。

「えつと、はー。……どうしたんですか？」

少々戸惑い気味のぼくに、ヒバリさんは若干声のトーンを落として続ける。

「実は、ホトトギスさんのことなんだけど……」

彼女が言つには、ホトトギスの体調が悪いのはただの風邪ではなくて、地球から離れていた宇宙人部隊との通信が途絶えたから、という可能性があるのだという。

もちろんそれは、彼女が宇宙人のスパイだということを前提とした憶測だ。

ヒバリさん自身は、そう思つてゐるわけではないとつけ加えていたけど。

ともかくそいつた可能性を考え、どうして通信が途絶えたのか詳しく述べる必要があると、友好派と過激派の人たちが動き出したらしい。

先日まで発令されていたレベル2の警報。

その原因となつていた宇宙人の部隊は、地球から離れていたはずだ。だからこそ、警報は解除されたのだ。

だけど、もしホトトギスが宇宙人のスパイだったとしたら、下手に手出しするのは危険を伴う。

場合によつては、せっかく地球から離れていた宇宙人たちが戻つてくることも考えられるだろう。

「だからね、ホトトギスさんをどこかに匿うのがいいと、わたしは思うのよ」

ヒバリさんはそう言つた。

「今はこの会社の医務室にいるけど、せん、アトロバムのあこだの件は覚えてるでしょ？ テルリンは、友好派の一員なのよ。このまま彼女にホトトギスさんを任せたまでは、危険だと言わざるを得ないわ」

「言葉を返すことができないでいるぼくに対し、ヒバリさんは矢継ぎ早に状況説明を重ねる。

彼女の隣の雷鳥さんは、黙つたまま、じっとぼくに視線を向けていた。

「……えっと、今ままじゃ危険、ってことですよね？ でもそれじゃあ、どうすればいいって言つんですか？」

どうにかぼくの口から飛び出した質問にヒバリさんは、待つてましたと言わんばかりの早業で答えを返してくる。

「大丈夫よ、わたしたちに任せて。雑森町にわたしの親が経営しているマンションがあるの。そこに部屋を用意してあるわ。ちょうど空き部屋があつたからね。セキュリティーもしっかりしてるマンションだから、会社内にいるよりも安全なはずよ」

「周囲に人が大勢いる場所ってことにはなるけど、彼女を狙っている派閥は、この会社の人間と、会社が密に連絡を取っている政府、あとは各国の首脳陣の中につくことになる。寂れた田舎町とはいえ、それなりに人のいる町の中では、そう簡単に手出しができないはずだよ」

ヒバリさんの声に続いて、これまで黙つていた雷鳥さんも解説の言葉を連ねた。

「そういうわけだから、わたしたちのほうでホトトギスさんをマン

ションへ連れてこようと思つた。もちろん仕事があるから、わたしの親に連絡して、連れていつてもいいことになるけど。アトリくん、それでいいかしら?」

「じつとほくの皿を見つめ、ヒバリさんがそつ確認を求めてくる。

「大丈夫、ほくたちに任せとけば安全だよ」

雷鳥さんもほくを見据え、いつもどおりの穏やかな声を響かせる。

「……はい、わかりました。ホトトギスのこと、よろしくお願ひします」

こつも温かく気遣つてくれる上司ふたりからの提案に、ほくは素直に頷きを返していた。

「ええ、任せとおいて。マンションの場所は教えておくから、仕事が終わったら向かうといいわ」

そう言つて、プリントアウトしてあつた地図をほくに手渡すヒバリさん。

「それじゃあ、わたしたちはこれから会議だから」「アトリくん、ひとりだけになるからつて、サボつたりせずに仕事をするよつこんね。多少のんびりペースでもいいからさ」

ほくが肯定の意思を返すやいなや、ふたりは素早く席を立つ。

「あ……はい。行ってらっしゃい」

「今日は戻つてこないから、終業時間になつたら帰つていいわよ。

すぐ近くでもホストギスさんに会こたいでしょ？ マンションに元気ついてあげてね」

ヒバリさんはやつ言い残すと、雷鳥さんを従えて部署を出ていった。

キーボードを叩くカタカタという音だけが響く中、第三十八対策執行部のドアが唐突に開かれた。

「おや？ 今日はアトリくんだけですか？」

「あ……はい」

部署に入ってきたのは、所長さんだった。

いつものようにゆっくりと社員たちとのお喋りに興じるつもりだつたのだろう。

ぼくひとりだけだとわかつても、その行動に変わりはないようだ、所長さんはゆつたりとした動作で「所長席」に座る。

所長さんは、昨日は来なかつたけど、もしかしたらそういう日だつてある。さすがに毎日来てもいられないだらう。

そう思つていたのだけど、どうやら昨日、所長さんは体調を崩していらっしゃい。

「わたしはもう、若くないですからね。アトリくんはまだ若いですが、油断は禁物です。体調管理には気をつけくださいね」

「はー」

「ところで……どうかしたのですかな？ 少々気分が沈んでいるように見受けられますか」

「アーヒーをすすりながら、穏やかな表情でそつ尋ねてくる所長さん。

自分の体調の話をしながらも、ぼくの様子を観察していたのだ。のほほんとした感じに見えて、結構鋭いんだよな、この人。だが

「はい、実はホトトギスが……」

「はい、実はホトトギスが……」

ぼくは素直に今までの経緯を話した。

雑森山を歩いていたときにホトトギスが倒れて医務室に連れていったこと、風邪のようだったけど念のためしばらく安静にさせていたこと、でも友好派や過激派に狙われる可能性を考慮してヒバリさんたちがマンションの部屋を用意してくれたこと、そのマンションにヒバリさんのご家族がホトトギスを連れていく手はずになつているということ。

所長さんは時おり相づちを打ちながら、ぼくの話を聞いていた。ぼくがホトトギスを心配していて気が気じゃないことを、理解してくれたのだ。ぼくがそこまで話しあると、

「すぐにでも彼女のもとへ行つてあげたほうが、いいのではないですか？」

と言つてくれた。

「いえ、でも仕事がありますから」

「……そうですか」

ぼくの答えに、所長さんは頷いて再びコーヒーをする。

ただその顔に浮かぶ表情には、なんとなく困惑の色がうかがえるようにも思えた。

と、そのとき。

突然、壁に取りつけられた大型モニターに映像が映し出され、耳

をつんざくような大声が響き渡る。

「おこ、神仙寺くん！　聞こえているか！？　わたしだ！」

大型モニターに映し出されたのは、このあいだも通信してきた防衛大臣さんだった。

「聞こえていないのか！？　緊急事態だ、早く応答しろ！」

怒鳴り散らす防衛大臣さん。

じゅやら前回と同様、間違えて雑森支社にある全モニターへの通信モードとなつていいようだ。

顔を真っ赤にしている防衛大臣さんの様子を見るに、早く応答しないと卒倒してしまったなほどだった。

とはいって、この通信モードの場合、応答できるのは所長室にあるマイクからだけといつことになる。

「はあ、仕方がありませんね。ちよっと行つてきます」

所長さんは呆れ顔でため息を漏らしながら、そう言い残して部署を出ていった。

「おこ、神仙寺くん！　またトイレか！？　いつでも応答できるように、秘書やオペレーターは常時待機させておくべきなんじゃないのか！？」

防衛大臣さんの怒号はなおも響き渡つていた。

この雑森支社には、秘書はいないものの、オペレーターが常に対応できるようになっている。

だけど、自分が間違つた通信モードにしているから、所長さんが

自室にいないと応答できない、というだけなのだ。

防衛大臣さんは通信モードが間違っていることに気づいていないわけだから、こんなふうに怒っているのもわからなくはないのだけど。

自分のミスだとあとから知ったとしても、反省なんてしないんだろくな。

防衛大臣という立場にいる人に対して失礼かもしれないけど、あの怒鳴り方から考えると、ぼくにはそつとしか思えなかつた。

やがて、所長室に着いたのだろう、所長さんの声が大型モニターのスピーカーから聞こえてきた。

「これはこれは、防衛大臣殿。お待たせしました。ちょっと、トイレに行つてましてね」

前回の通信対応のときと同じく、所長は開口一番、そう言った。

「神仙寺くん！ いつもいつも、対応が遅すぎるぞー。どうなつているんだね！？」

「いやいや、失礼しました。それはともかく、今田はどうこつたご用件ですかな？」

防衛大臣さんの怒りを、いつもどおりの落ち着いた物腰でするりとかわす所長さん。

こういった対応をすると火に油を注いでしまいそうだと、ぼくは心配になつていたのだけど。

どうやら本当に緊急事態だつたようで、防衛大臣さんはどうにか怒りを抑え、通信してきた理由を語り始めた。

今までの勢いと変わらない、怒鳴りつけるような物言いでの。

「コードネーム・ホトトギスの件だ！ まだ各国首脳陣の一部しか知らない極秘事項のばずだつたが、どういうわけか各国の政府内には広く伝わってしまったらしい。とくに過激派に属している国が、そんなスペイ宇宙人なんて即刻殺してしまえと、迫つてきているんだ！」

え？

ぼくの心臓が、ドクンと大きく鼓動を高鳴らせる。
ホトトギスを、殺してしまえ？

「そんなこと、ダメに決まってるじゃないか！」

思わず席から立ち上がり、ぼくは叫んでいた。
もちろん、モニターに映し出された防衛大臣さんご、ぼくの声が届くはずもない。

だけど、所長さんがぼくの思いを代弁してくれた。

「はつはつは、そんなこと、できるわけないではないですか」

まったく、なにを言つているのやひ。
そんな嘲笑染みた言葉を返す所長さんに對し、防衛大臣さんはさらなる怒鳴り声を上げる。

「言われなくても、わかつておる！ だがな、そういうことを躊躇なくやってのける国もあるのだ！ コードネーム・ホトトギスの保護はそちらに任せているのだからな、なにかあつたら大問題となる！ それをしつかり心に留めておきたまえ！ 以上だ！」

一方的にまくし立てた防衛大臣さんは、言い終えるやいなや、さつさと通信を切ってしまった。

「ふう、相変わらずですね、あの人は」

思わず「ほれたのだろう所長さんのつぶやきが、マイクに拾われ微かにスピーカーから聞こえた。

しばらくして、所長さんはぼくの部署へと戻ってきた。
ドドードド しょと声を出して、所長席に座る。

「アトリくん、見ていましたね？」

「……はい」

さつきの通信で防衛大臣さんは、ホトトギスを殺してしまえと迫つてきている過激派の国もある、と言っていた。

そのことを気にしているのが、ぼくの表情からじみ出していたのだろう。

所長さんはそんなぼくを気遣い、真面目な口調で諭すよいひいつ
言った。

「大丈夫です、安心してください。ホトトギスさんはわたしたちが
守りますよ」

ぼくは黙つたまま所長さんを見つめ返すと、大きくひとつ頷きを
返す。

すると所長さんは、いつもの穏やかな、それでいて心強い笑顔を
返してくれた。

終業時間を告げるベルの音が響き渡る。

ぼくは素早く作業を終了し、そそくさと部署を飛び出した。最後に部署を出る人が戸締りをする決まりになつていて、ぼくはドアのカギを閉めながらも、心はすでにホトトギスのもとへと飛んでいた。

急ぎ足で廊下を駆け抜け、一旦散に医務室へと向かう。ヒバリさんの親が来てホトトギスを連れていつたはずだけど、そのときの状況とホトトギスの容態がどうだったのかが気になつていて、ぼくは、とりあえずテルリンに話を聞いてからマンションに行こうと思つたのだ。

だけどぼくが医務室に着くと、中はもぬけの空だった。

「どうか、医務室に誰もいなつて、それは問題ありなんじや？」
職務放棄？

そもそも思つたのだけど、テルリンはホトトギスとぼくのために、一日連続で泊まり込んでいたことを思い出す。

疲れが溜まって、社員寮へと帰つたのかもしれない。どうせあまり人も来ないと言つていたし。

もしそうだとしても、代わりの人を待機させるか、せめてドアに貼り紙でも残しておくべきでは、とは思つけど。

ともかく、テルリンがないのなら、ぼくがここにいても仕方がない。

ホトトギスの姿がすでにはない以上、彼女はヒバリさんの親が経営しているところのマンションに連れていかれたあととなる。

ぼくは医務室を飛び出すと、一路、雛森町にあるマンションへと向かつた。

薄暗がりから宵闇へと変わつゆく山道を歩き、町明かりが視界に迫つてくる。

いくらい下り坂になるとはいつても、いつも山道を全速力で駆け抜けることなんてできない。

それに、辺りは暗い。足もとに気をつける必要がある。
まだ真っ暗とまではいかないものの、念のため懐中電灯で足もとを照らして歩く。

もどかしさでいつぱいになりながらも、ぼくはなるべく急ぎ足で山道を下りていった。

雛森町に入れば、住宅から漏れる明かりや街灯がある。
とはいっても、家はかなりまばらな配置だし、街灯もそれほど数が多いのが実情だ。

商店街ならいざ知らず、町の外れ付近は、夜ともなるとかなり薄暗い。

そんな中を、ぼくは走り抜けていく。

たまに街灯の下でビバリさんから渡されていった地図を確認し、マシンションを目指す。

ぼくの住むアパートからは、結構な距離があった。
商店街を挟んで、雛森町の外れの反対側、といつた感じだ。

やがて、目的地にたどり着く。

マンションと呼ばれているだけあって、周りの家々と比較すればそれなりに豪華には見える。

明かりが点いていない部屋が大半だから空き部屋が多いそうではあるけど、一応五階建ての建物となっていた。

高層というほどではないものの、これくらいの高さがある建物は、こんな田舎町には不釣合いかもしない。

中心部ではなく町の外れにあるのは、個人所有のマンションのようだし、土地の値段が安い場所を選んだとか、そういう理由なのだろう。

ともかくぼくは、地図に書かれていたホトトギスのために用意されたといつ部屋へと向かつ。

404号室。

なにやら、縁起の悪そうな部屋番号ではある。

そういう番号は欠番として使われるのが一般的なような気もするのだけど。

四階までエレベーターで上り、部屋の表札を確認していく。

401号室、402号室、403号室、

そして、405号室……。

あれ？ 404号室がない？

もう一度戻つて確認しても、403号室の次は405号室。

部屋は一列に並んでいるため、別の場所にある、というわけでもなさそうだった。

念のため四階を隅々まで回つて確認してみると、やっぱり404号室はない。

403号室に明かりが点いていたのでチャイムを押してみる。

出てきた人に404号室のことを語ると、やつぱりそんな部屋は存在しないといふ。

嫌な予感がした。

403号室の人から、大家さんが五階にある501号室に住んでいるから聞いてみると「こと」と言われ、ぼくは大家さんのもとへと急いだ。

ヒバリさんの言葉どおりなら、彼女の親、ところへとなるはずだけど……。

表札はヒバリさんの名前、「古女」ではなかつた。チャイムを押して、出てきた大家さんにヒバリさんのことを語してみたけど、案の定、知らないといふ。

これはいったい、どうこいつなんだ？

マンションの住所はここで間違いない。マンションの名前も、間違つてはいない。

それなのに、ホトトギスを匿つはずの部屋はなく、大家さんもヒバリさんは関係がない人だった。

嫌な予感は、どんどんと膨れ上がる。

ぼくはきびすを返し、会社へと舞い戻った。

会社に戻り、第三十八対策執行部を田指す。
ヒバリさんと雷鳥さんは会議だと黙つていた。

終業時間まで戻つてはしなかつたものの、会議のあとには部署に戻るはずだった。

だけど、力ギを開けて入つてみても、ぼくが出てから誰も入ったような形跡はない。

ホワイトボードのビバリさんと雷鳥さんの欄も、「会議中」のままだ。

ぼくは会社内を駆け回る。

何ヶ所かある会議室を訪ねてみたけど、どにも会議は終わり、ひつそりと静まり返っていた。

「どうなつているんだ？　ホトトギスはいつたい、どいへ？」

疑問符が頭の中を飛び交う。
と、そんなぼくの目の前に、すつ……と人影が現れた。

「所長さん……」

そう、それは所長さんだつた。
でもその顔に、いつものような穢やかな笑顔はない。
ぼくの声に答えるよつこ、所長さんはいつ言った。

「じつやらホトトギスさんは、ヒバツさんたちによつて、連れ去られてしまつたよつです」

「こつたい、じりこじりなんですか？」

ぼくは所長さんに聞いかけた。

「とりあえず、座りましようか」

いつもどおりの笑顔はないものの、所長さんは落ち着いた様子で所長席に腰を落とす。

慌てても仕方がない、そう語っているのだろう。所長さんの言葉に従い、ぼくも自分の席に着いた。

ずずず。

「一ヒーをひと口呑みますと、所長さんは語り始めた。

「ヒバリさんはどうやら、過激派の一員だったみたいですね。もちろん、いつも彼女をサポートしている雷鳥くんもね」

ふたりは秘密裏に過激派としての活動をしていた。ホトトギスをどうにかしようと、ずっと狙っていたと考えられる。彼女がぼくと会っているのは知っていたのだから、そのときや、別れたあとなんかを狙えばいいのでは、と思ったのだけど。過激派がどうしてやつしなかったのかは、所長さんにもわからなといつ。

「さつき防衛大臣さんが通信で言っていた、ホトトギスを殺してしまえと迫ってきてこいる過激派の国と、ヒバリさんたちは共謀しているところなんですか？」

「うーん、それはなんとも言えませんね……。ただ、もしさうなら、行動が早すぎます。防衛大臣からの通信よりもずっと前から日本に入っていたと考えれば、それもありえることだと私は思いますが……」

そうではないことを願います。所長さんは苦い表情でそつそつとやいた。

所長さんにとつては、ヒバリさんも雷鳥さんも信頼していた社員なのだ。

彼女たちの普段の活躍ぶりを考えれば、有能な社員といつ認識だつたに違いない。

若いからという理由で、三十八番目である末端の部署を割り当てられてはいたけど、所長さんがヒバリさんたちの能力を高く評価しているのはよくわかった。

だからこそ所長さんは、他の部署よりも頻繁にぼくたちの部署へと足を運んでいたのだ。

今回の件が解決したあと、できればあまり厳しい処分にはしたくないという思いがあるのだ。

テルリンと純さんの件でも、なにもお咎めはなかった。

もちろん今回のことは、テルリンと純さんのときは規模も目的も違つ。

泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス。

そう主張する過激派による行動だと考えられるのだから、危険な行為を伴う可能性も高い。

とはいって、ヒバリさんも雷鳥さんも、ぼくにとつて頼りになる尊敬すべき上司だから、できれば穩便に解決してもらいたいところだ。

「でも所長さん、それならぼくたちが、どうすればいいんでしょう？」

「

ヒバリさんたちがホトトギスを連れ去ったとして、いつたいどこへ行つたのか。

それがわからなければ、探しに出ることすらできない。

ぼくには思い当たる場所がまったくなかつたから、あとは所長さんに頼るしかなかつたのだ。

だけど 。

「わたしにも、わかりませんね……。せめてなにか、犯行声明などでも残してあればと思ったのですが、そういうものもまったくないのですよ」

所長さんは、ぼくがマンションに向かっているあいだにおかいと気づき、ホトトギスを看病していたテルリンに話を聞こうと、医務室へと向かつた。

医務室へはその前にぼくも行つていたわけだけど、やつぱりテルリンはいなかつたという。

それから、ヒバリさんたちが出席していたはずの会議室にも行ってみたものの、やはりなんの痕跡もなかつた。

目撃者くらいのものかと、会社に残つていた人たちにも話を聞いてみたらしい。

ただ、もともとレベル2の警報が解除されたばかりで休んでいる人が多い上に、残業する必要もないのが現状。有力な情報が得られることはなかつた。

「そういうわけで、わたしとしても打つ手なし、お手上げ状態なんですよ……」

頃垂れながらわいつぶやく所長さんの声が静かに響いた、その後。

ぼくの携帯電話が鳴った。

ポケットから取り出した携帯電話の画面に表示されていた名前は。

「もしもし」

ぼくは急いで電話に出た。

「アトリくん、わたし、ヒバリよ

「ヒバリさん！」

そう、それはヒバリさんだった。

所長さんも頭を上げ、じっとこちらを向けていた。

そして軽く頷く。

話を続けてください。任せましたよ。

所長さんの瞳が、そう語っていた。

「今、どうしているんですか！？　とにかく、その……」

ヒバリさんがホトトギスを連れ去った犯人。それは、状況を考えればほぼ間違いないと思われた。

でも、もしかしたら違うかもしない。

頼んでおいた親が来られなくなり、代わりにヒバリさんたちがホ

トトギスを連れていこうとして、過激派の国によつて一緒に拉致されてしまった、といったような可能性も考えていた。

もしそうだとしても、マンションの大塚さんがヒバリさんとは親でも親戚でもない、赤の他人だったことの説明がつかないのだけど。

ともかく、ヒバリさんはなにもやましいことなんて、していないのかもしない。

そう思いたいという部分もあつて、ぼくは一瞬言葉を詰まらせる。だけど、今は状況をしっかりと把握することが先決だ。ぼくは思い直し、一番高い可能性を前提とした言葉をヒバリさんにぶつける。

「ホトトギスはどうなったんですか！？」

できれば、「一緒に捕まつてしまつたから、助けに来て。どうとか抜け出して、今、電話してるのよ」といった答えが聞きたかった。でもその望みは叶うことのないまま、霧散して消えてしまう。

「ふふつ、すぐそばにいるわ。ロープで縛つて、猿ぐつわをはめてね。だから声は聞かせてあげられないけど」

微かな笑い声を響かせながら、ヒバリさんは言った。

信じたくはなかつたけど、彼女がホトトギスを連れ去つたということに、どうやら間違いはなさそうだ。

「アトリくん、もうすでに所長さんから話を聞いてるんじゃないかな？ わたしは、過激派のメンバーなのよ」

「ダメとばかりに、ヒバリさんは迷うことなく宣言した。もづ、疑いようもなかった。

「それでね、こいつして電話したのは、あなたに来てほしいからなの。
もちろん、ひとりだけね」

とりあえず、少し考える時間を『』えるわ。またあとで電話をかけるから。

そう言い残して、ヒバリさんからの電話は途切れた。

「所長さん」「

ぼくは、黙つたまま険しい視線を向けていた所長さんに、電話の内容を伝えた。

おそらくは「伝えるまでもなく、わかっていたのだ」。

所長さんの表情は、まったく変わらなかつた。

ぼくは話しつぶやいながら、今度は自分の意思を伝える。

「所長さん、ぼく、行こうと思ひます」

「アトリくん、これは罷です。」こなまず、様子を見てから、じつくつと対策を練つたほうが……

「そんな余裕はありません!」

所長さんの反論に、ぼくは思わず声を荒げる。
いくら相手がヒバリさんたちだとまといつても、ホトトギスの命がかかっているのだ。
悠長なことをやつてこないあいだに、手遅れにならなことも限らない。

最近何度も会つて、ぼくがホトトギスに惹かれているといつのも、もちろんある。
でも、それだけじゃない。
もしそんなことになつたら、ヒバリさんたちだってどんな処罰を受けるかわからない。

「しかしだね、アトリくん、血ちりにかかりに行くみつな無謀なことを……」

「ホトトギスは、ぼくが助け出しますー。」

なおも止めようとする所長さん、「ぼくは立ち上がって大声で叫び返す。

その力強さで、ぼくの決意のほどが伝わったのだろう。所長さんは真面目な顔で頷くと、こつ答えてくれた。

「……わかりました、行きなさい。任せましたよ」

「はーー！」

勢いよく返事をし、ぼくは部署を飛び出した。

会社の敷地から外へ出たところで、携帯電話が着信音を響かせる。素早くポケットから取り出すと、ぼくは電話に出た。

「はー、もしもし」「ヒバリよ

それはヒバリさんからだつた。

もちろん、あとで電話すると言っていたわけだし、登録してある名前が携帯電話の画面に表示されてもいるのだから、召乗られるまでもなく、わかつてはいたのだけど。

「アトリくん、答えはだいたい予想がついているけど、とつあえず訊くわ。あなたひとりで来てくれるかしら？」

ヒバリさんの問いかけに、ぼくは迷つことなく答えを返す。

「はい。今、会社の外に出たところです」

「ふふつ、行動が早いわね。それじゃあ、これから山をさらに離森町とは反対方向へ進んでちょうだい」

「山の奥のほうですよね？ 会社の訓練施設辺りを田舎せばいいんですか？」

「いいえ。そこを越えた、もつと先よ。そうね、また訓練施設を越えるくらいの時間に連絡するわ」

プツッ。

電話はそこで途切れた。

ぼくたちの会社は、かなり広い敷地を持つている。

いつもぼくたちが働いている離森支社の建物と社員寮以外にも、訓練用の施設や倉庫などが、山の中の何ヶ所かに点在しているようだ。

今ではもうほとんど使われていないような建物が、いくつも山の中に存在しているという話は聞いていた。もつとも、ぼくには詳しいことはわからないのだけれど。

ヒバリさんとの通話にも出できた訓練施設というのは、主に研究所から離森支社と名前が変わった頃の名残で、今はあまり使用されることのない場所だ。

電力会社の新入社員にとっては、電柱など高い場所に登る訓練なんかも必須となっている。そういうた訓練を行っていたのが、この訓練施設なのだ。

現在の離森支社に関してだけ言えば、「リバーシブル・アース」専用の施設という位置づけになっているため、そういうた訓練は免

除されてこるのでござる。

だからこそ、ぼくはこの支社への勤務を希望した、といつのもあつたりする。

それはともかく、訓練施設にはトレーニングルームなんかもあり、今でも体力作りのために通う人はちらほらといふらしい。

古くて薄汚れているとはいへ、会社の施設といふことタダで使うことができるため、なかなか便利そうではある。

ちよつと雑森支社の建物や社員寮から離れているのが難点だけど、山道を往復するのも訓練や体力作りの一環とも言えなくもないだろう。

そういうればゆりかもめが、ダイエットのために通おうかな、なんて言つていたつけ。結局、「面倒だから行くのやめたよ～う」と、あつたり断念していただけだ。

ともかく、ぼくは懐中電灯を片手に、真っ暗な山道を歩いていく。当然ながら山道に街灯なんかが整備されているはずもない。普段から夜帰る時間には辺りが真っ暗になつてゐるため、懐中電灯は必需品だった。

訓練施設を通り抜けた辺りで、宣言していくとおり、ヒバリさんから電話がかかってきた。

さつきの電話のあと、こっちから折り返し電話をかけてみたのだけど、電源を切つてゐるようだつた。

携帯電話から居場所がバレるのを怖れているのかもしれない。

電話に出ると、ヒバリさんはそのまままっすぐ山道を進むよつと指示してきた。

「本当にひとりで来てるわよね？ もし嘘だつたらどうなるかは、

わかつてゐるわよね？」

「もちろんです。大丈夫、ぼくひとりですよ。ホトトギスを助ける

ヒーローが、姑息なマネなんてできません」

「ふふつ。そう言いながら、声に力がないじゃない？」

「……山道で疲れただけです」

「ま、そういうことにしておきましょつか。それじゃ、電話はこれで終わり。かなり細い道だけど、まっすぐ進めばわかるはずだから」

何度か言葉をやり取りしたあと、今回も唐突にヒバリさんから通話を切る。

道なのかどうかわからない、うつそつと茂る草むらをかき分けるよにしながら、ぼくはしつかりと足を踏みしめて歩いていく。

やがて田の前には、ツタが一面に絡まり、周囲の草むらにも紛れてカモフラージュされたようにたたずむ、ホコリまみれの小屋が現れた。

小屋とはいっても、結構な大きさがある。ただ、かなり年季が入つてゐるようで、今にも崩れそうなほどだった。

ツタに絡まれてわかりにくくはあつたものの、ドアがついているのは見て取れる。

建物なのだから、入り口があるのは当たり前だらうけど。

ぼくは慎重にドアへと歩み寄る。

辺りは真つ暗闇だ。ひつそりと静まり返つてゐる。

今にも外れてしまいそうなドアに、ぼくはおそるおそる手をかけた。

ギイ———。

ドアはきしんだ音を響かせながらも、抵抗なく開いていく。

小屋の中も、外と同様、真っ暗だった。

ぼくは真っ暗な部屋を懐中電灯で照らし出していく。

と、小屋の奥側にある柱に、縛られている女の子の姿が浮かび上がった。

「ホトトギス！」

「ん～～～～～！」

それは、猿ぐつわをはめられて微かなうめき声しか出せない状態のホトトギスだった。

座った状態で柱に縛りつけられている彼女は、身動きもできなさそうだ。

ぼくは彼女のあとへと駆けつける。

そのとき。

来てくれたのねん！ 嬉しいだわぞ！

……え？

ぼくは一瞬、なにが起こったのかわからなかつた。

今、ホトトギスの声が、はつきりと聞こえたような……。

でも彼女は猿ぐつわのせいで、まともに声を出せないはずでは……。

ぼくが困惑する中、突然辺りが強烈な光に包まれた。

いや、小屋の電気が点けられただけのようだ。暗闇に慣れたぼくの目には、まぶしすぎただけだった。

そして、

「よく来たわね、アトちゃん。ちゃんとひとりで来たみたいね、安心したわ」

明るくなつた小屋の中に、ヒバリさんの声が響き渡つた。

ぼくに鋭い視線を向けているヒバリさんの横には、いつもどおり雷鳥さんも立つていて。

それに、会社の他の人たちや見たこともない外国人まで、総勢十人以上がずらりと並んで、ぼくのほうに視線を向けていた。彼らが全員、過激派グループということなのだろう。

中央に陣取り、腕を組んで声をかけてきたヒバリさん。

その様子からすると、ヒバリさんが過激派グループのリーダーだということなのだろうか？

でも、過激派グループというには、十人ちょっとというこの人数は少ないような気もある。

行動しやすいよう、少数精銳での作戦に打つて出たのかもしれない。

「ふふっ、アトリくん、罷だというのがわかつていても彼女を助けに来たその勇気は買うわ。だけど、勝算もなく行動するのは、愚か者のすることよ」

ヒバリさんが嘲笑を浮かべる。

ちょっと放任主義的などころはあるけど、いつも頼りになる上司の彼女。普段なら温かく向けられるヒバリさんの目線は今、背筋が凍るほどに冷たかった。

ぼくは、なにも言い返すことができず、ただ彼女を睨み返すのみ。

「反抗的な目つきね。仕事中にはそこまで鋭い目になつたこと、ないんじゃない？　ふふっ、やっぱり愛しい人の前だと違うのかしら？」

「……ホトトギスを殺すなんて、そんなことは絶対にやせない！」

面白がっているかのよつたビバリさんの言葉に、ぼくはどうとか
言葉をしほり出す。

しほり出された声は、すぐに勢いを増し、最後には叫び声のよう
になっていた。

「熱くなってるわね。そんなに彼女が大事？」

「当たり前です！ それに、ホトトギスが宇宙人だなんていう、根
も葉もない理由で殺されてしまつのは、絶対に納得がいきません！」「
根も葉もない……わけではない、ということは、アトリくんのほ
うがよくわかつてんんじゃないかな？」

ぼくの叫び声に横から割り込んできたのは、やつさまで黙つて成
り行きを見守つていた雷鳥さんだった。

普段は優しげな笑みを向けてくれる彼のまつも、今は鋭い目線で
ぼくを睨みつけている。

「それは……」

雷鳥さんの言葉に、ぼくは声を詰まらせた。

ホトトギスがちょっと変わった女の子なのは確かだ。それは認め
る。

そんな彼女に惹かれたぼくも、かなりの変わり者なのかもしれない
んだけど、それはこの際どうでもいい。

だけど、変わっているから宇宙人だ、といつのはさすがに、突拍
子もなさずぎる。

とはいえばとも、彼女がどこに住んでるのかとか、ご家族のこ
ととかは知らない。

最初は家出少女かも知れないと思つていたけど、どうもかうこうわけではなさそうだ。

連絡先は知らないものの、彼女とは頻繁に会うことができた。それ自体、偶然とは言ひがたいことなのかも知れない。

会社側からなにも聞かされていなかつたら、さすがに宇宙人だという考えには至らないだろうけど。

もしかしたら本当にそうなのかも知れない、と疑つてゐる部分があつたのも事実だ。

だけどぼくは、彼女と会つて楽しい時間を過ごせれば、それでいいと思つていた。

ホトトギスが宇宙人なのかどうかなんて、ぼくには全然関係なかつた。

「どうちにしても、宇宙人は危険な存在だから消してしまおうだなんて、そんな考え方自体、絶対に間違つてますよ!」

「侵略されてからでは、遅いんだよ?」

どうにか言葉を返すことができたぼくに、雷鳥さんはやつぱり落ち着いた声を向けてくる。

「でも、そうなるかもしれない、っていう憶測だけで殺してしまはんて、どう考へても行き過ぎです!」

ぼくはそう叫びながらも、頭の中では別のことを考えていた。

以前、最初にレベル1の宇宙人警報が発令されたとき、小型の宇宙船が地球に飛来した可能性があると聞いた。

隕石と区別がつかなかつたというのだから、それはあくまでも憶測にすぎなかつたはずだけど。

その後、会社側で調査した結果、ホトトギスが宇宙人だという結論に至つたといふ。

所長さんからやう聞かされたときには氣にしなかつたけど、考えてみると、いつたいどんな調査からそんな結論に至つたというのだろうか？

不思議には思つたけど、今氣にするべきは、そこではない。

ホトトギスは、そのとき飛来した宇宙船に乗つていたスパイだと考えられ、会社側から、とくにヒバリさんたち過激派からマークされていたと思われる。

泣かすなら、殺してしまえ、ホトトギス。

そう主張する過激派なら、わざわざこんな小屋に連れ去つてこなしても、いくらでも彼女を殺すチャンスがあつたのではないだらうか。

雛森町や会社の中での殺すわけにはいかなかつたとしても、例えば会社の外の森辺りでなら、実行できたはずだ。

なぜ彼女たちはそうしなかつたのか？

ぼくは叫び始めた勢いに乗つて、そう問い合わせる。

「確かにわれたちの部隊は、彼女をマークしていたよ。でも、雛森町でキミと別れたあと、彼女を追つてみても、どういうわけだか毎回見失つてしまつていた。それで追跡は諦めたんだ」

「ふふつ。だからこの小屋でいろいろと準備を進めていたのよ。宇宙人がいるとわかつたあと、会社内ではいろいろな研究が進められていたわ。宇宙人に対抗する兵器なんかの開発もね。そして開発されたのが、地球人には影響が出ないけど、宇宙人の脳には影響を与えるられる特殊な電波を出す装置だつた」

雷鳥さんの言葉を引き継ぐように、ヒバリさんは語り始めた。

ホトトギスが雑森山に入つたことを知つた過激派は、その装置を使用した。

その装置から放出された電波によって、予定どおりホトトギスは倒れた。

ただ、ぼくがそばにいて、すぐに会社の医務室に連れていつしまつた。

人の多い時間帯にはなかなか手が出せないため、会議ということにして遅くなつても不自然さがないようにした。

長かつたレベル2の警報が解除され、代休で人も少ない日が多くつたのも、好都合だったと言える。

ともかくそうやって、彼女たちはホトトギスを捕らえ、そのままこの小屋まで連れてきたのだ。

「装置のあるこの小屋なら、安全なはずだからね。あとは実行するだけだつた。……でも、さすがにわたしたちも鬼じゃない。最後にひとつ、彼女のお願いを聞いてあげることにしたのよ。せめてもの、はなむけとして……」

ヒバリさんはやうやく、微かに唇の端をつり上げる。

「そうしたら、アトリくん、あなたに会いたいってさ。ふふっ、おアツいことで」

と、ヒバリさんがスッと右手を上げた。

「お願いはもう、叶えてあげたからね。そろそろ終わりにしましょう」

「う

力チャリ。

数人の外国人たちが、懐から黒い物体を取り出して、こちらに向ける。

それは、拳銃だった。

「ふたりとも、仲よくあの世に行つてね。地球の未来のために

」

「それじゃ、やよいなら

ヒバリさんが高々と掲げた右手を、ゆっくりと下ろす。同時に放たれたのは、拳銃の弾ではなかった。

「え？ なに！？」

慌てた声が響く。

突然真っ白な煙が噴き上がったかと思うと、あつという間に部屋の中に充満してしまったのだ。

視界が、奪われる。

いや、視界が奪われただけではなかつたようだ。

銃を構えていた外国人たちが、大きく咳き込み始めた。

これは 催涙ガス！？

ぼくは慌ててハンカチを取り出し、目と鼻を覆う。

さつき、煙はヒバリさんたちの足もとから噴き出してきたよつこ見えた。

おそらく視界を奪うための煙幕と、催涙性の高いガス、二種類が噴き出していたのだろう。

ただ、部屋中に広がった煙幕のほうは、すでに消えかけているようだ。

ドン！ ダダダダダダダダダ！

そのとき、小屋のドアが開かれ、複数の足音が響いた。

ぼくは、おそるおそる目を押さえていたハンカチをすらし、様子を確認する。

なにを言っているのかはわからなかつたけど、焦つた様子の外国人たちが咳まじりの叫び声を発している。

そして。

「あつ……！」

入ってきたのは、見知った顔ぶれだつた。

それは所長さんを筆頭に、セキレイやゆりかもめ、純さんを含む、会社の人たちだつたのだ！

いや、それだけじゃない。どうやらその中には、警察官も数人いるようだ。

危険があると考えられる場所へと突撃してきたにしては少ない人数のような気もするけど、山の中を氣づかれずに近づいてくる必要があつたはずだから、仕方がなかつたのかもしぬない。

セキレイと純さんが真つ先に飛び込み、外国人たちの構えていた拳銃に蹴りを入れて弾き飛ばす。

警察官が周りを取り囲むように、咳き込んでいる過激派の人たちに迫る。

ゆりかもめは素早くホトトギスのもとへ駆けつけ、流れてきていた催涙ガスを吸つたのか涙目になつていいた彼女を縛りつけるロープをほどぐ。

「ホトトギスさん、平氣？」

「（）ほつ、（）ほつ……！ ふう、助かつただわさー！」

猿ぐつわも外され、ホトトギスはようやく解放された安堵の声をこぼしていた。

一瞬にして、状況は変わった。

「おや？ テルリンはいないのかい？」

純さんのつぶやきが聞こえてくる。

その声はいつもどおりの軽い響きではあつたけど、彼の表情からは真剣さが感じられた。

あれ？ そういえば、確かにテルリンの姿がない。いつたい彼女はどうなったのだろう？

もしかしたら、ヒバリさんたちがホトトギスを連れ去るときに、もう。

ぼくは大きく頭を左右に振り、不穏な考えを払い落とす。と、そんなぼくにも声がかけられた。

「アトリくん、大丈夫ですか？」
「はい、大丈夫です！」

所長さんが、ぼくのすぐそばまで駆けつけてくる。その穏やかな顔を見たぼくは、これで終わつたんだと思い、安堵の息をついた。

辺りに充满していた煙は、もつすっかり消えていた。入り口のドアが開け放たれたことで、完全に霧散したのだろう。

「みなさん、もう終わりです。観念しなさい」

まだ目を押さえて咳き込んでいる過激派の人たちに向けて、所長

さんが降伏勧告の言葉を投げかける。

でも。

「ふふっ……」

ヒバリさんが、笑い声を漏らした。

その顔には、余裕すら浮かんでいる。

所長さんたちや警察官に囲まれている絶体絶命ともいつべき状況だといつに……。

これは、なにかあるに違いない。

彼女を取り囲む面々も、うかつに近づけなくなってしまひ。

そんな中、不敵な笑みを浮かべながら、ヒバリさんは語り始めた。

「アトリくんがひとりでここまで来たとしても、所長さんには連絡が行つてゐるはず。だから、増援が来るのは予想済みだったのよ」

落ち着き払つた彼女。催涙弾にも素早く対応していたのか、咳き込んだり涙目になつたりもしていよいよだ。

ヒバリさんの隣では、雷鳥さんも同じように鋭い視線を巡らせながら身構え、取り囲むセキレイたちを牽制していた。

だけど増援が来るのを予想していたことは、最初から、所長さんを含めておびき出すのが彼女たちの目的だったということなのだろうか？

「ふふっ、そうよ。わたしたちの計画を」とく邪魔してくる所長さんは、各国にいる過激派の人たちも煙たく思つていた。だからホトトギスさんと一緒にまとめて処理してしまつことに決まったのよ

「よ

そう決まった、といつゝとは、ヒバリさんだけの意思ではなかった、ということだ。

きっと彼女の上には黒幕ともいづべき、過激派グループの上役がいるのだろう。

「ホトトギスさんを処分するにはアトリくんが邪魔だつたけど、アトリくんを処分するのはさすがにためらつたわ。それでどうにか、ホトトギスさんがひとつになるように仕向けたつてわけ」

ヒバリさんはぼくを、いつもの温かな瞳で見つめる。

直属の上司として一緒に頑張ってきた彼女の瞳が微かに潤んでいるように見えたのは、催涙ガスのせいだけではなかつたのかもしれない。

「本當ならそのあと、所長さんを呼び出す手はずだったのよ。……結局ホトトギスさんのわがままで、こつしてアトリくんにも心中してもらつことになつてしまつたけじね」

彼女は落ち着いた声のままだつた。とはいえてその顔からは、今回のみ満足していない様子がうかがえる。

最後にひとつ、ホトトギスの願いを叶える。それを指示したのも過激派の上役の人で、ヒバリさんの意思は考慮されなかつた、といふことなのかもしね。

「いやつて彼女が語つてこないで、とにかくしてしまつべきだらうか。

そんな考へがよぎつたに違ひない。警察官たちが微かに動きを見せようとする。

と、それを制するかのように、ヒバリさんが一步前に出た。そして、

「それじゃあ、出てきなさい！　ひとり残らず、捕まえるのよー。」

パチンと指を鳴らすと、ひときわ大きく声を響かせた。

.....。

.....。

.....。

ヒバリさんの声が響いてから、一分弱だろうか。

緊迫した空気が流れる中、勝ち誇ったようなヒバリさんの笑みが、徐々に歪んでいく。

なにも……起じりなかつた。

「ビ……どひしたの！？ 早く、出できなさい！」

焦りをありありと浮かべた顔で、指を何度もパチンパチンと鳴らすヒバリさんの声。

でもそれに応えてなにかが出てくるよつな気配は、いくら経つてもまつたくなかつた。

「どひしました？」

余裕の表情で落ち着いた声を向けたのは、所長さんのせいだった。

「そうそう、言い忘れていましたが、外で待機していた部隊なら制圧しましたよ」

「ヤリ。

微笑みを浮かべながら、所長さんは続けてそう言い放つた。

ドアの外には、警察官によって取り押さえられた外国人たちの姿

が見える。

小屋の中に突撃してきた警察官が少なめだったのは、外に回る部隊と一手上に分かれたからだつたよつだ。

「な…………！？」

ヒバリさんは言葉を失つ。

隣の雷鳥さんも、表情に出さないよう懸命になつてゐるよつだけど、明らかに動搖しているのが見て取れた。

これで本当に、終わりだらう。

それにしても手際がよすぎまる。

ホトトギスがさらわれたといつ結論に至つてから、ぼくがヒバリさんの電話を受けてここに向かうまで、それほど長い時間がかかつていたわけではない。長く見積もつたとしても、おそらく一〜三時間程度ではないだろうか。

それなのには警察官まで手配していたなんて。

「用意周到ですね、所長さん……。もしかして、最初から全部わかつてたんじや……？」

ふつふつふ。

ぼくの言葉に、所長さんはただ笑い声を返すだけだつた。

「ああ、今度こそ、観念しなさい」

「くつ……」

小さくつめき声を発して、焦りの表情を隠そつともしないヒバリさん。

「もう終わり、といつことだね……。ならば……」

「そうね、仕方がないわ」

雷鳥さんの諦めたような声に、ヒバリさんも頭を返す。本当に、これで終わりなんだ。

そう安心しきっていた、そのときだった。

「動かないで！」

突然、ヒバリさんが大声を張り上げる。その手に握られていたのは。

「手榴弾！？」

ぼくは思わず叫んでいた。

一瞬にして緊張が辺りの空気を覆い尽くす。

「それも、特別製の広範囲型よ！ こっちの目的は、ホトトギスさんを殺すこと！ このまま心中したって構わないわ！ 最終手段として、そう指示されていたのよ！」

そう言いながらも、彼女の顔には大量の汗が浮かび、その声は微かに震えていた。

ヒバリさんでも、死ぬのは怖いのだ。

当然だろう。

過激派組織の上役からはそう指示されていましたけど、それはあくまでも最終手段。

もちろんそんな手を使つことなく任務を遂行するつもりで、この場に臨んだはずだ。

でも、すべての計画は阻止され、退路を断たれてしまった。
だから彼女も、それを望んでいるわけではない。
それでもぼくたちは、動くに動けなかつた。

おそらく彼女はまだ迷つている。

とはいへ、最終手段を使わざるを得ない状況に追い込んだのは、
紛れもなくぼくたちだ。

ヒバリさんは右手で手榴弾を握り、左手の人差し指を手榴弾のピンにかけていた。

下手に動けば、すぐにでもピンを引き抜き、手榴弾を投げつけてくるだろ。づ。

使命に忠実な彼女の性格を考えれば、内心では迷ついていても、完全にあとがない状況では任務を遂行する道を選ぶに違いない。

汗が頬を伝つて地面に落ちる。

誰も、身動きが取れなかつた。

と、いきなりまばゆい光が、小屋の中すべてを照らし出す。

！？

まぶたに手をかざしながら、ぼくは反射的にその光の発生源へと目を向けていた。

そこにあつたのは。

全身から神々しいばかりの光を放つ、ホトトギスの姿だった。

.....。

.....。

.....。

ヒバリさんの声が響いてから、一分弱だろうか。
緊迫した空気が流れる中、勝ち誇ったようなヒバリさんの笑みが、
徐々に歪んでいく。
なにも……起じりなかつた。

「ビ……どひしたの！？ 早く、出できなさい！」

焦りをありありと浮かべた顔で、指を何度もパチンパチンと鳴らすヒバリさんの声。
でもそれに応えてなにかが出てくるような気配は、いくら経つてもまったくなかつた。

「どひしました？」

余裕の表情で落ち着いた声を向けたのは、所長さんのせいだった。

「そうそう、言い忘れていましたが、外で待機していた部隊なら制圧しましたよ」

「ヤリ。

微笑みを浮かべながら、所長さんは続けてそう言い放つた。

ドアの外には、警察官によって取り押さえられた外国人たちの姿

が見える。

小屋の中に突撃してきた警察官が少なめだったのは、外に回る部隊と一手上に分かれたからだつたよつだ。

「な…………！？」

ヒバリさんは言葉を失つ。

隣の雷鳥さんも、表情に出さないよう懸命になつてゐるよつだけど、明らかに動搖しているのが見て取れた。

これで本当に、終わりだらう。

それにしても手際がよすぎまる。

ホトトギスがさらわれたといつ結論に至つてから、ぼくがヒバリさんの電話を受けてここに向かうまで、それほど長い時間がかかつていたわけではない。長く見積もつたとしても、おそらく一〜三時間程度ではないだろうか。

それなのには警察官まで手配していたなんて。

「用意周到ですね、所長さん……。もしかして、最初から全部わかつてたんじや……？」

ふつふつふ。

ぼくの言葉に、所長さんはただ笑い声を返すだけだつた。

「ああ、今度こそ、観念しなさい」

「くつ……」

小さくつめき声を発して、焦りの表情を隠そつともしないヒバリさん。

「もう終わり、といつことだね……。ならば……」

「そうね、仕方がないわ」

雷鳥さんの諦めたような声に、ヒバリさんも頭を返す。本当に、これで終わりなんだ。

そう安心しきっていた、そのときだった。

「動かないで！」

突然、ヒバリさんが大声を張り上げる。その手に握られていたのは。

「手榴弾！？」

ぼくは思わず叫んでいた。

一瞬にして緊張が辺りの空気を覆い尽くす。

「それも、特別製の広範囲型よ！ こっちの目的は、ホトトギスさんを殺すこと！ このまま心中したって構わないわ！ 最終手段として、そう指示されていたのよ！」

そう言いながらも、彼女の顔には大量の汗が浮かび、その声は微かに震えていた。

ヒバリさんでも、死ぬのは怖いのだ。

当然だろう。

過激派組織の上役からはそう指示されていましたけど、それはあくまでも最終手段。

もちろんそんな手を使つことなく任務を遂行するつもりで、この場に臨んだはずだ。

でも、すべての計画は阻止され、退路を断たれてしまった。
だから彼女も、それを望んでいるわけではない。
それでもぼくたちは、動くに動けなかつた。

おそらく彼女はまだ迷つている。

とはいへ、最終手段を使わざるを得ない状況に追い込んだのは、
紛れもなくぼくたちだ。

ヒバリさんは右手で手榴弾を握り、左手の人差し指を手榴弾のピンにかけていた。

下手に動けば、すぐにでもピンを引き抜き、手榴弾を投げつけてくるだろ。づ。

使命に忠実な彼女の性格を考えれば、内心では迷ついていても、完全にあとがない状況では任務を遂行する道を選ぶに違いない。

汗が頬を伝つて地面に落ちる。

誰も、身動きが取れなかつた。

と、いきなりまばゆい光が、小屋の中すべてを照らし出す。

！？

まぶたに手をかざしながら、ぼくは反射的にその光の発生源へと目を向けていた。

そこにあつたのは。

全身から神々しいばかりの光を放つ、ホトトギスの姿だった。

「ホトトギスさん……？」

まぶしさに目を細めながらも、ゆりかもめがつぶやきを漏り出す。ホトトギスは全身をまばゆく発光せながら、一步一步、ヒバリさんに詰め寄っていく。

「な……なんなのよ、あなた！？」

焦つて上ずつた声を向けてくる彼女にも、ホトトギスは黙つたまま。

明らかに、普通じゃない。

ホトトギスは本当に宇宙人なのだろうか？ それとも物の怪や妖怪の類なのだろうか？ はたまた、妖精とか精霊とか……。どうであれ、彼女がヒトならざるものであるのは、間違いなかつた。

ぼくは、混乱もあつたけど、落胆する思いのほうが強かつたかもしれない。

ホトトギスが普通の人間じゃないことは、ある程度覚悟していた。でも、やっぱりそんなはずはない、彼女は普通の女の子だ、そう望んでいた部分のほうが大きかったのだ。

その望みは、完全に絶たれた。

「ちよっと……来ないでよー！」

ぼくの苦悩に気づくはずもないホトトギスは、なおもヒバリさんに歩み寄っていた。

ヒバリさんは焦りを通り越し、恐怖に青ざめた顔で震える声をしほり出す。

次の瞬間、

「来るな～～～～～！」

彼女の指はピンを引き抜き、そして右手につかんでいた手榴弾を

ホトトギスに向かつて投げつけた！

もう、すぐ目の前にまで迫っていたホトトギスは、すっと左手を上げる。

彼女は難なく手榴弾をキャッチした。

そして、

ピカッ！

小さく光ったかと思つと、ホトトギスの左手に握られた手榴弾は、

サラサラサラ……。

乾いた音だけを残して、爆発することもなく砂と化し、床に散らばつていつた。

「もうやめなさい」

ホトトギスはヒバリさんに語りかける。

彼女の声は、普段のちょっと変わってるけど可愛らしさ喋り方とは全然違つた、神々しい響きすら持つた声だった。

「あなたにあちきを殺すことなんて、できないのだから」

喋り方こそ違つもの、いつもながらの「あひあ」といつ一人称に、ぼくの心にはなんとなく安堵の色が広がる。

怯えるヒバリさん。

隣に控えていた雷鳥さんが彼女を庇い、自分の体をふたりのあいだに割り込ませる。

いつも落ち着いている雷鳥さんはいえ、この状況はさすがに想定外だったからだろう、その身は小刻みに震えていた。

雷鳥さんはこつでもヒバリさんを支えてきた。

田の前で起こった現象に怯えながらも、自分たちにも手榴弾と同じような未来が待ち受けていると想像しながらも、彼はヒバリさんを守るとしているのだ。

ホトトギスは手榴弾を砂に変えた左手を伸ばす。ゆっくりと伸びていく左手を睨み返しながらも、雷鳥さんはまつたく目を逸らす気配がない。

そんな雷鳥さんの背後に守られているヒバリさんは、今にも泣き出しそうなほど恐怖に包まれているようだった。

おそらく伸ばされたホトトギスの手が触れた瞬間、雷鳥さんもヒバニセもさつきの手榴弾のように。

「ホトトギス、やめて…」

ぼくは思わず叫んでいた。

ゆっくりと首をこちらに向けるホトトギス。

微かに首をかしげる彼女には、ぼくがなにを言つて居るのか、まったくわからないといった様子だった。

「確かに今回のことは、ひどいことだと思つ。ホトトギスを殺そう

としたわけだし。それはぼくも許せない。でも……」

ぼくは言いながら、グッと「ぶしに力を込める。

「でも、そんな人たちでも、ぼくの大切な上司なんだ。未遂で終わつたんだから、もうこのくらいで許してあげてくれないかな?」

力強く懇願する声に、ホトトギスは動きを止める。
ヒバリさんや雷鳥さんも目を丸くし、こちらに呆然とした目を向けていた。

いやそれは、その他の外国人や警察官たち、セキレイや純さんを含めた会社の人たちも同じだつた。
ぼく本人と、そして所長さんの、ただふたりを除いて……。

懇願を受けた張本人であるホトトギスはじつとぼくを見つめ返しあらうにか考えているようだつたけど、やがて口を開いてこう言つた。

「……うん、わかつただわざ」

ヒバリさんと雷鳥さんが崩れ落ちるよりて畳み込むと、過激派の他人たちも観念したようだつた。

素早く警察官が身柄を確保、ヒバリさんたちは連れていかれた。

彼女たちがどうなるのか、ぼくにはわからない。

宇宙人のことは公表できないはずだから、表沙汰にはならないと思うけど……。

そんな不安を感じ取ってくれたのだろう、所長さんがポンとぼくの肩に手を置くと、優しく話しかけてきた。

「大丈夫ですよ。会社としても有能なおふたりには戻ってきてもらいたいと考えるはずです。政府にもつながりがありますし、どうとか穩便に済ませてもらえると思います」

「……はい、ぼくもそう思います。ヒバリさんに指示を出していた黒幕は、別にいるはずですし」

ぼくの答えに、所長さんはいつもの穏やかな笑顔で頷き返してくれた。

「ふ~、まいったまいった」

小屋の奥から、テルリンが純さんに連れられて歩いてきた。どうやら過激派によってホトトギスともどもさらわれて、奥の部屋に縛られていたようだ。

警察官たちはすでにいない。

残っているのは、過激派側ではない会社のメンバーだけだった。

純さんに支えられながらのテルリンも含め、残った全員が落ち着いてひと息ついたところで、所長さんが一步前に歩み出る。そしていつもどおりの穏やかな声で、語り始めた。

「実はわたしは、ずっと昔から地球に忍び込んでいた宇宙人なんですよ」

最初からいきなり衝撃の告白だつた。

でも、衝撃の告白はそれだけでは終わらなかつた。

所長さんは昔から地球に忍び込んでいた宇宙人で、ホトトギスはその娘なのだという。

所長さんの奥さんは地球人。つまり、ホトトギスは宇宙人と地球人のハーフということになる。

奥さんは今も、宇宙空間から地球を観測している宇宙船の中にいる。

その宇宙船は地球から少し離れた場所に留まり、ずっと昔から観測し続けていた。

目的は地球侵略。そのタイミングを計るために調査が、続けられていたのだ。

そして娘であるホトトギスもそこにいた。

もともと所長さんはスパイとして地球に忍び込んでいたらしい。

そのあいだに地球人の女性と恋に落ち、ホトトギスが生まれた。

所長さんはスパイとして地球に忍び込んではいたけど、地球人の女性を愛し、考え方を変えていた。

侵略なんて、してはいけない。

そのため所長さんは、愛する奥さんに提案した。娘と一緒に宇宙船へ行つてくれないかと。

奥さんはそれを、快く受け入れた。

表向きは地球人の捕虜として宇宙船に連れていく、といふことで仲間の宇宙人には話をつけていた。

もちろん、捕虜だからといってぞんざいに扱つてはいけないと念を押して。

地球人の能力は自分たちよりずっと上だから、もしそんざいに扱おうものなら、怒った地球人が大量に押し寄せて宇宙船を破壊してしまうだろう。

所長さんはそう警告していた。

奥さんを宇宙船に行かせたのは、宇宙船内の状況も詳しく知りたかつたからだつたらしい。

所長さんの立場はそれなりに上ではあつたものの、宇宙船の中にも派閥があり、自分を快く思つていらない集団もいた。だから宇宙船からの通信を鵜呑みにはできなかつた。

そこで奥さんを宇宙船で生活させ、逐一状況を伝えてもらつていたのだ。

その通信手段については、あとで説明するとして……。

所長さんは地球の調査を続けていた。上手く友好関係を結ぶ手段を見つけるために。

地球人たちには、すでに宇宙人に見つかっていることを知られたくないかった。

そのために考え出したのが、地球をくすんだ色に変えてカモフラージュする、リバーシブル・アース計画だった。

リバーシブル・アースに使われる神素は、実は所長たち宇宙人が作り出したものだつたのだという。

神素の「神」は、所長の名字、神仙寺の「神」だつたのだ。もつとも、所長たち宇宙人の文化には、名字という概念はない。それは、彼の奥さんの名字だつた。

宇宙をさまよつて住みよい惑星を探し回つてゐるような宇宙人の部隊は、所長さんたちの他にも多数存在してゐるらしい。

それらの宇宙人に地球を横取りされないためにも、リバーシブル・アースは有効だつた。

所長さんは調査にもつと長い時間をかけるつもりだつたようだけど、娘であるホトトギスが突然地球に乗り込んできただで、結論を早める必要に迫られた。

少し前に、所長さんたちとは別の宇宙人部隊が地球に接近したことがあつた。レベル1の宇宙人警報が出たあと、すぐに解除されたあのときだ。

そのどさくさに紛れて、ホトトギスは乗り込んできていた。

彼女が乗つてきた宇宙船は、所長さんが隕石だつたと情報を操作してごまかした。

ちなみにホトトギスが地球に来た目的は、「お母さんの故郷を見てみたかったから」だつたらしい。

それから所長さんは自ら、ホトトギスが宇宙人だということを広めた。

宇宙人が忍び込んでいるといつ話をして、様子を見るのが目的だつた。

ホトトギスが来てしまつたことで、宇宙船からの監視も強化されたはずだ。その考えはのちに、奥さんとの通信で正しかつたことがわかる。

ともかく所長さんとして、これ以上調査を長引かせていられる余裕はなくなつた。

調査を長引かせているのが、侵略をやめさせるためだと悟られてしまう可能性が高かつたからだ。

地球の未来は、キミにかかるところ。

その頃、所長さんはぼくに呟いていた。その言葉は、本当に真実だったのだ。

長かつたレベル2の宇宙人警報は、所長さんが奥さんのいる宇宙船を地球に近づかせるように仕向けたというのが原因だった。

地球の状況を頻繁に、より正確に伝えたいから、というふうに宇宙船側には報告をしていた。

だけど本当の理由は、奥さんと連絡を取るためだった。

所長さんには実はテレパシー能力があるのだという。ただ、ある程度近づかないと届かない。

そのために、宇宙船を地球に近づける必要があつたのだ。

テレパシーが有効なのは、心が通じ合つている相手のみ。最初は一方通行で相手の心が読めるだけというその能力も、心が通じ合つていいくうちに双方向の意思疎通が可能なテレパシーとなる。そしてその能力は、ホトトギスにも受け継がれていた。

だからわざと、縛られて猿ぐつわをはめたままのホトトギスの声が聞こえたのか。

ぼくはそう考へながら、ホトトギスに視線を向けた。

でもそうすると、つまりぼくたちは心が通じ合つている状態、と

いうことになる。

彼女に田線を向けると彼女も見つめ返してくれたけど、なんだか恥ずかしくなつてきたぼくは、すぐに田を逸らしてしまった。

ぼくとホトトギスのそんなアイコンタクト（？）のあいだにも、所長さんの話は続けていた。

心が通じ合つていればテレパシーは通じる。
だから恋人ほどではないものの、親子でもテレパシーは通じるものらしい。

地球上忍び込んだホトトギスと所長さんは、テレパシーで連絡を取りつていた。

そのおかげで所長さんは、この小屋の状況が手に取るよつにわかつっていたのだといつ。

ホトトギスがさらわれたことをぼくが知ったとき、所長さんは止めたけど、無駄だというのはわかつっていた。

ぼくをひとりでこの小屋へ向かわせ、そのあいだにあらかじめ連絡をつけていたみんな ゆりかもめやセキレイ、純さんたちといった会社の人と、さらに警察にも来てもらつた。

そして、目的地がわかつている所長さんたちは、ぼくを追いかけてきた。

明かりを点けるわけにもいかないから、暗視スコープまで手配していたという用意周到ぶり。

こうして所長さんたち一行は小屋を包囲し、外に待機していた部隊を制圧、タイミングを見計らつて中に踏み込んできたのだ。

「本当にホトトギスが殺されてしまう危険がないわけではなかつたのですが、彼女自身が任せてほしいとテレパシーで言つてきたので

ね。ここは娘を信じることにしたのですよ」

「んみゅ。完璧にあちきの狙いどおりになつただわさー。」

「……いろいろと危険だったと思ひますがね」

そうやつて言葉を交わす所長さんとホトト、ギスは、普通の地球人の親子となにも変わらない、ほのぼのとした雰囲気を漂わせていた。

そのあとぼくたちは、とりあえず会社に戻った。

ホトトギスは雑森町で生活していたとき、夜は公園で寝泊りしていたようだ。

とはいっても、人間には見られないようにカモフラージュする能力があるらしく、危険ではなかつたという。

春先ではあるけど夜はまだ涼しいことも多いのでは。
そうも思ったのだけど、暑さも寒さも、人間よりは我慢できる身体構造になっているらしい。

だからといって、それを知つた今、彼女をひとりで帰すわけにもいかない。

というわけで、彼女はぼくと一緒に暮らすことになつた。

狭いとはいっても、社員寮に住む誰かの部屋に泊まらせてあげればいいのに、と思わなくもなかつたのだけど。

ホトトギス本人が、ぼくと一緒にいいと言つ出したのだ。

そりやあぼくとしても、もちろん嫌ではないのだけど。

でも、その、つまりは同棲つてことになるわけだし、心の準備が……。

などといつ戸惑いが、ホトトギスに伝わるわけもなく。

「あちきを泊めるだわさー。」

という命令に、ぼくは従うしかなかつた。

それを聞いても所長さんはいつもおりの笑顔。

これは父親公認つてこと？

なんて考えて、さらに顔を赤らめるぼくだった。

ホトトギスと一緒に暮らし始めると、ビックリわけか彼女も一緒に通勤するようになっていた。

べつに社員になったわけではないのだけど、バイト扱いとして所長さんのもとで働かせることにしたらしい。

「アトリ、大好きだわさー！」

ベタベタベタ。

ホトトギスは周りに人がいてもお構いなしに、ベタベタとくついてくるようになっていた。

父親である所長さんがいる前でも、彼女はまったく気にする様子はない。

じつちが気にするつての。

それに、なんだか痛い視線も感じるし。……主に、ゆりかもめのほうから。

「ふん、なにや。アトリつてば、鼻の下伸ばしからつて。いやらしさんだから

「ちよつと、ゆりかもめ。なんだよ、それ？ ベツにぼくは……」

なんて反論するも、すりすりとホトトギスがくつつてきてこいる

状況では、説得力がなさすぎだった。

「う、アトリの超絶おバカ！ あんたなんか、ホトトギスさんと一緒に地球を出ていけばいいのよう！」「国外追放どころか、地球から追放！？」

どうしてぼくは、ゆりかもめからここまで邪険に扱われなきゃならないのだろう。

「納得がいかないって顔してるな。でも、周りで見てるほうからしてみたら、丸わかりなんだからな？」

セキレイがなんとなく睨みつけるような視線を向けながら、そう言い放った。

「丸わかりって、なにがだよー！？」

ぼくにはなにがなんだか、サッパリわからない。

周囲の視線は、どういうわけだか生温かい感じだった。

それはともかく。

ベタベタとくつついでくるホトトギスとぼくは、こうしてほとんどの時間を一緒に過ごすことになっていた。

とはいえるのも、数日のあいだだけでしかなかつたのだけど。

ヒバリさんと雷鳥さんはまだ戻ってきていない。

所長さんは近ごろちに戻つてくるはずだと語っていたけど、それがいつになるかは聞いていない。

ぼくは第二十八対策執行部で、ゆりかもめとセキレイ、そして所長さんとホトトギスと一緒に働く日々。

そう、どういわけかホトトギスはぼくたちと同じ部署に席を設けられ、さらには所長さんもずっと腰座つていた。

ホトトギスは仕事中でもベタベタくつこしていく。
それに反応して、ゆりかもめがぼくを睨みつける。

さらにはホトトギスの父親である所長さんの笑顔も、なんとなく居心地の悪さを感じるというか、監視されているような気がして、仕事が手につかなかつた。

もつとも、今のぼくたちには、大して仕事なんてないのだけど。
そんな、ある意味のんびりとした生活を続けていたある日、所長さんが「いつ圮つ出した。

「アトロイクさ。じまいるのあいだ、ホトトギスとお別れといひことになりやうでや」

「……え？」

「あちき、お父さんと一緒に、一回宇宙船に戻るんだわさ」

皿を丸くするぼくに、ホトトギスがいつもどおりベタベタくつときながら言った。

「ええー？」

どうして突然そんなことになつたのか、ぼくは驚きを隠せなかつた。

ところよつも、ホトトギスと離れるのが、嫌だつたのだ。

ほくの気持ちを察してくれたのだらう、所長さんが説明を加えてくれる。

ホトトギスが地球に来たことで、宇宙船側の地球観測が熱を帶びてきていた。

所長さんは侵略させないよう、リバーシブル・アースに関わってきたけど、それももう限界だった。

だから直接宇宙船まで出向いて、説得したいと考えて居るのだと云つ。

「それに、妻とも会いたいしね」

微かに頬を染めながら、遠い田をする所長さん。

考えてみれば、所長さんはずっと昔からこの地球にいると言つていた。

奥さんは生まれたばかりのホトトギスを連れて宇宙船に向かったらしい。ということは、所長さんは何年も奥さんと会つていないと云つことになる。

「で、せつがくだから、あちきも一旦戻ることにしたんだわぞ。アトツのことをお母さんに報告して、ちゃんと認めてもらつてくれるだわよー。」

元気いつぱいに笑顔を向けてくるホトトギス。

そんな顔を見せられたら、離れるのは嫌だなんて、わがままなことは言えなくなってしまう。

「大丈夫、あちきとアトリは、テレパシーで会話できるだわぞー。」

そのあと、所長さんとホトトギスは、すぐに宇宙へ向けて旅立つ

ていった。
こうしてぼくとホトト、ガスの、超長距離恋愛がスタートしたのだ
つた。

「お母さん、とっても喜んでただわせー。もつ両親公認だわよー。」「あはは……。嬉しいけど、でももう少しひ、恥ずかしいな……」

ぼくとホトトギスは、テレパシーを使って会話をするのが口課となっていた。

テレパシーを届かせるためには、宇宙船が近づかなければならぬ、なんて言っていたはずだけど。

ぼくたちはなんの問題もなく、テレパシーで会話を交わすことができた。

それせばいいや、ぼくとホトトギスの心が深く通じ合いつてゐるからいい。

つまり相性抜群どころのことだと、所長さんは冷やかしまじりに言つていた。

ちょっと恥ずかしいけど、離れていてもひつしてホトトギスと話せるのは嬉しいことだった。

それにテレパシーでの会話だと、食事をたかられるよりも、食べているものを豪快に吹き出したりなんてこともないし。

なんて考えていた。

「ちよっとアトリー、なんか失礼なこと考へてないかやー？」

怒りを含んだホトトギスの声が頭の中に響いてきた。

考えたことが勝手に伝わるといつのは、ときにはとても不便だつたりもあるもので。

なにか失礼なこと、なんて言つてはいるけど、彼女には完全に伝

わってこなはずだ。

「う……えっと、あははは、地球に戻つてきたりまた、こつもの食堂で一緒に食べよつね」

「テレパシーじゃ、こまかじてるのバレバレだわせ。ま、いいナビねん」「

彼女はさう言つてひと呑吸置くと、よりこつそつ強い想いを伝えてきた。

「あひあはアトツの」と、なにもかも全部含めて、大好きだわせー。頭の中に直接伝わつてくる彼女の声にて、ぼくは顔を真つ赤に染める。

「もへ、またホトトギスさんと話してゐるのな」

隣の席では、ゆりかもめがため息をついていた。
つへんやつぱり、仕事中はテレパシー会話を控えるべきかもしないな。

「かもしれない、じゃなくて、控えろって」

セキレイからもシシ「ノリ」が入った。

……つて、びびじてセキレイにまで、ぼくが思つたことが伝わつてるんだ!?

ま、まさか、セキレイとも激しく心が通じ合ひこむ!?

「アホなこと考へてるんじゃないー。お前をつきから、全端口に出して喋つてるんだよ!」

容赦ない平手打ちをぼくの頭に繰り出しながら、セキレイは叫ぶ。むへ、テレパシー慣れすると、そういう弊害もあるみたいだ……。

「だからアトリ、それも言葉にしてるつじば……」

再びため息をつく、ゆりかもめだった。

「あはは、そつちはそつちで、楽しくやつてるみたいだわね。あちきが帰るまで、寂しいだらうけど我慢して待つてねん!」「ホトトギスはよくそんなこと、恥ずかしげもなく言えるね」「そんなに褒めちゃイヤン、だわせー。」「……べつに褒めてないけど……」

結局、テレパシー会話を続けるぼくとホトトギス。いくら上司がいない状況だからって、こんなことを続けていたら会社から解雇されてしまうかもしない。そう思いながらも、ついつい会話してしまつのだけど。と、そんなぼくとホトトギスの会話にて、突然別の声が割り込んできた。

「アトリくん、ちょっと話したいことがあります。いいですか?」「しょ……所長さん! どうしてテレパシーが伝わるんですか! ?」「ぼくたち、恋人でも親子でもないのに!」「いやいや、じきに親子になるでしょう? 先行投資といつ感じですよ」「なんですか、それは! 意味がわからないです!」「あつはつは、さつきのはさすがに冗談ですけどね。ホトトギスの肩に手を乗せて、テレパシーに乗つかっている状態なんですよ」「そんなことまでできるんですか? ……。結構便利かも……」

「誰でもできるわけではないでけどね。それはともかく、とりあえず近況報告を」

所長さんは急に真面目な声になつて、いつ語りかけてきた。

「いつになるかはわかりませんが、なるべく早いうちこ、こちら側は説得するつもりです。それが無事終わったら、わたし自身はこのまま宇宙船に残りますが、ホトトギスは地球に帰そうと思います。……アトリくん、娘をよろしく頼みますよ」

「……はい」

所長さんの言葉に、ぼくは見えないとわかっているながらも大きく頷き、固い決意を返す。

「それまでにもし浮気などしようものなら、地球は滅亡すると思うておいてくださいね。信じてますよ」

微かな笑い声を交えながら、所長さんはそう言い放つ。でもこの人の場合、実際にそれができる立場にいるのだ。〔冗談だと笑い飛ばせる〕ことではなかつた。

「あははは、氣をつけます……」

答えながら、ぼくの頬を伝つて冷や汗がひと筋、流れ落ちていく。どうやら地球の運命は、ぼくひとりの肩にかかるようだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306y/>

リバーシブル・アース

2011年11月14日13時20分発行